

2000

風俗奇譚

風俗奇譚

昭和36年5月1日発行 毎月1回1日発行 昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和35年8月30日国鉄管理局特別換承認誌第842号

昭和36年5月1日発行 毎月1回1日発行 昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和35年8月30日国鉄管理局特別換承認誌第842号

昭和36年5月号

5月号

特集 鞭に憑かれた男と女
悦虐の彷徨
炎帝廟

女性風俗の粒々 話題の探究

定価 150 円

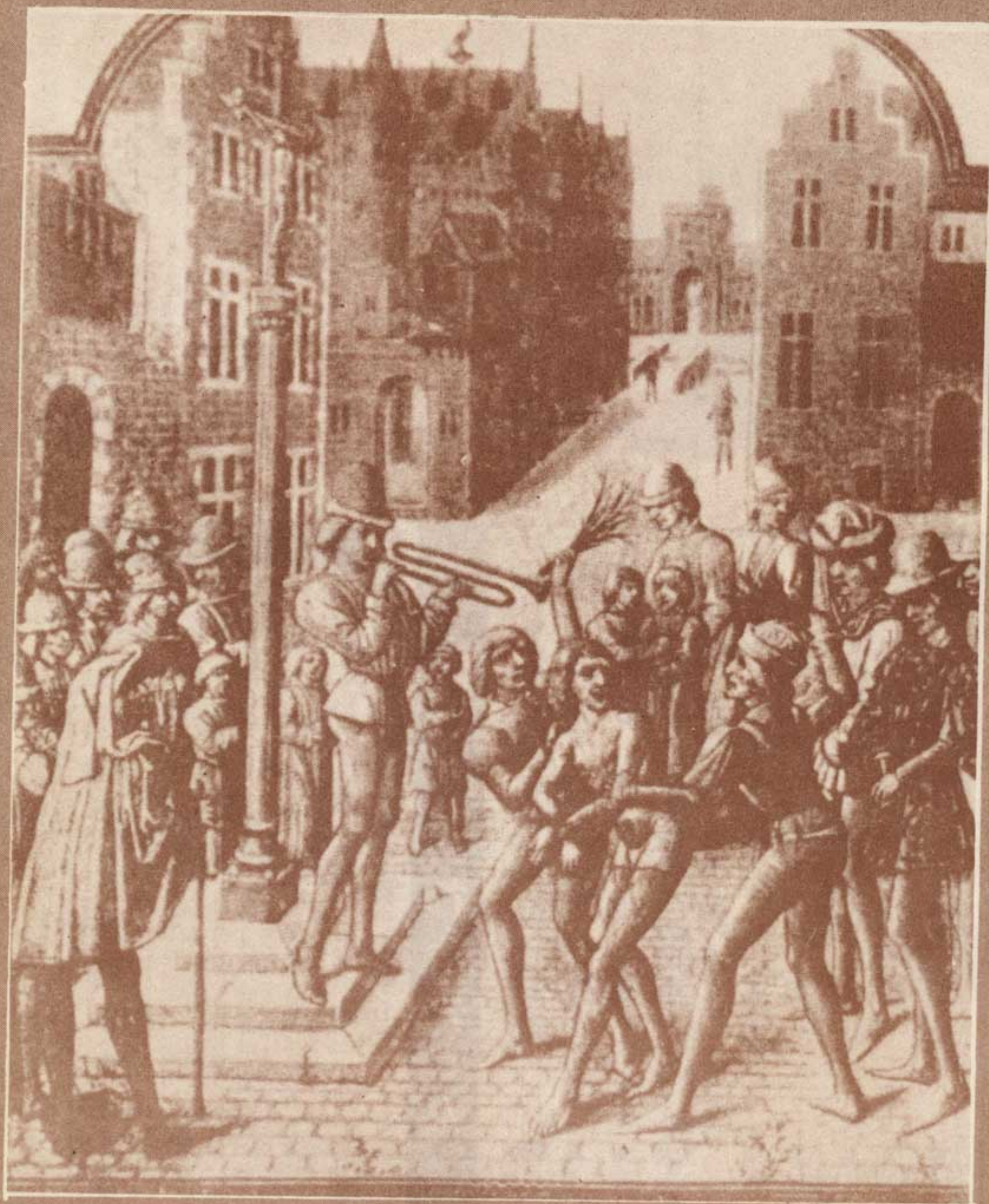


窃視症を描いたW・フィッシャーの風刺画——テニスの更衣室でのぞく目

ネクターール
2景



イギリスの書籍に収載された落書きで、上は尿をとるよろこび、下はネクターール・マニアの絶頂。



公衆の面前で鞭打たれる女重罪人（15世紀時代）

高月	水	牧	西	村	井	風	島	舟	西	村
ま	上		条	上	神	早	崎	木	牧	ユキ・
ゆみ・		ア	さ		せ	由		喜	え	牧
稲見	涼	ン	く	ユ	い	美	ユ	代	り	アン
年九	子(三)	ナ	ら	キ	子(三)	子(三)	カ	子(六)	子(四)	ナ
(三)		(元)	(元)	(四)			(八)			(二)

愛と復讐と革命

悦虐の彷徨 ① 被虐の女……青山三枝吉(七)



“貧民窟の花”と題するハーゲルの鞭打画（1637年作）



ふたり縛り

林のなかに裸女ふたり 松
の根かたに縛られて それ
でも飛ぶなら 飛んでみろ



林のなかにはほの暗く 木の間をすかして 湖の水の
 冷たさが はいあがつて広がる 裸で縛られた女の
 肌 鳥肌がたつへモデル・村上ユキ 牧アンナ





制服は嘆く

縄をぐるぐる顔に巻かれて、目も鼻も
覆われている〈モデル・西牧えり子〉







狼藉の 一瞬前

逃げようと争ったとき 障子も破れた だが しょせんはむなしい
抵抗に終わって 狼藉の前にさらされた女〈モデル・舟木喜代子〉





荒縄が肌を噛む

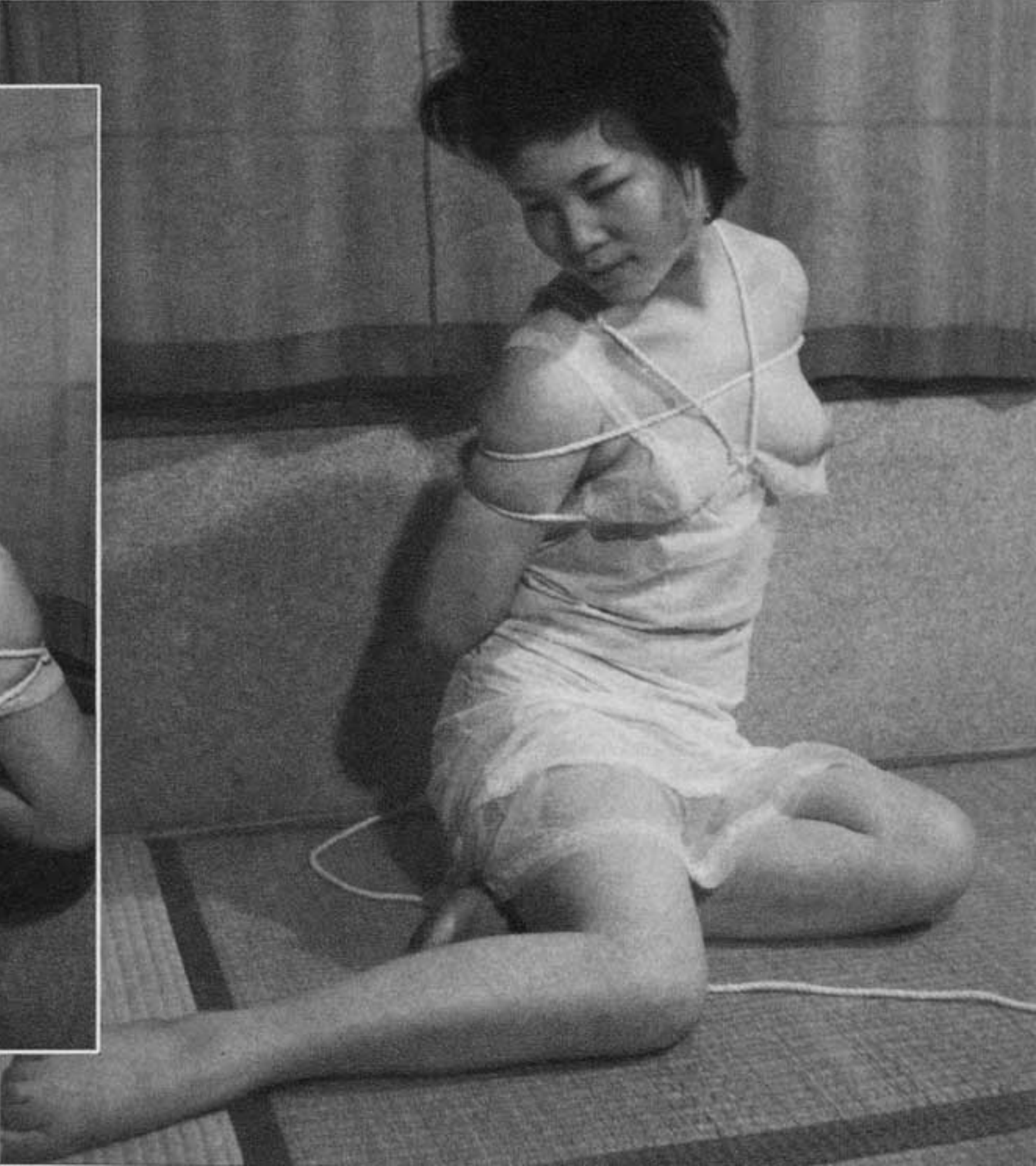
床下は黒い穴をさらして 太い丸太を突き出している 重い丸太を
背負わされて 荒縄でぐるぐる縛り 荒縄は情け容赦なく 乳房を
噛み 肌に食い入る あばら家の軒下の残虐へモデル・島崎ユカ



どうされるのかしら？

ブラウスは破かれて、申しわけみたいに上半身にまといつく。むき出しにされた乳房が、縄目に耐えて、あえいている。抵抗する力も失って、次に来る仕置きを待つ。哀憐の女〈モデル・風早由美子〉

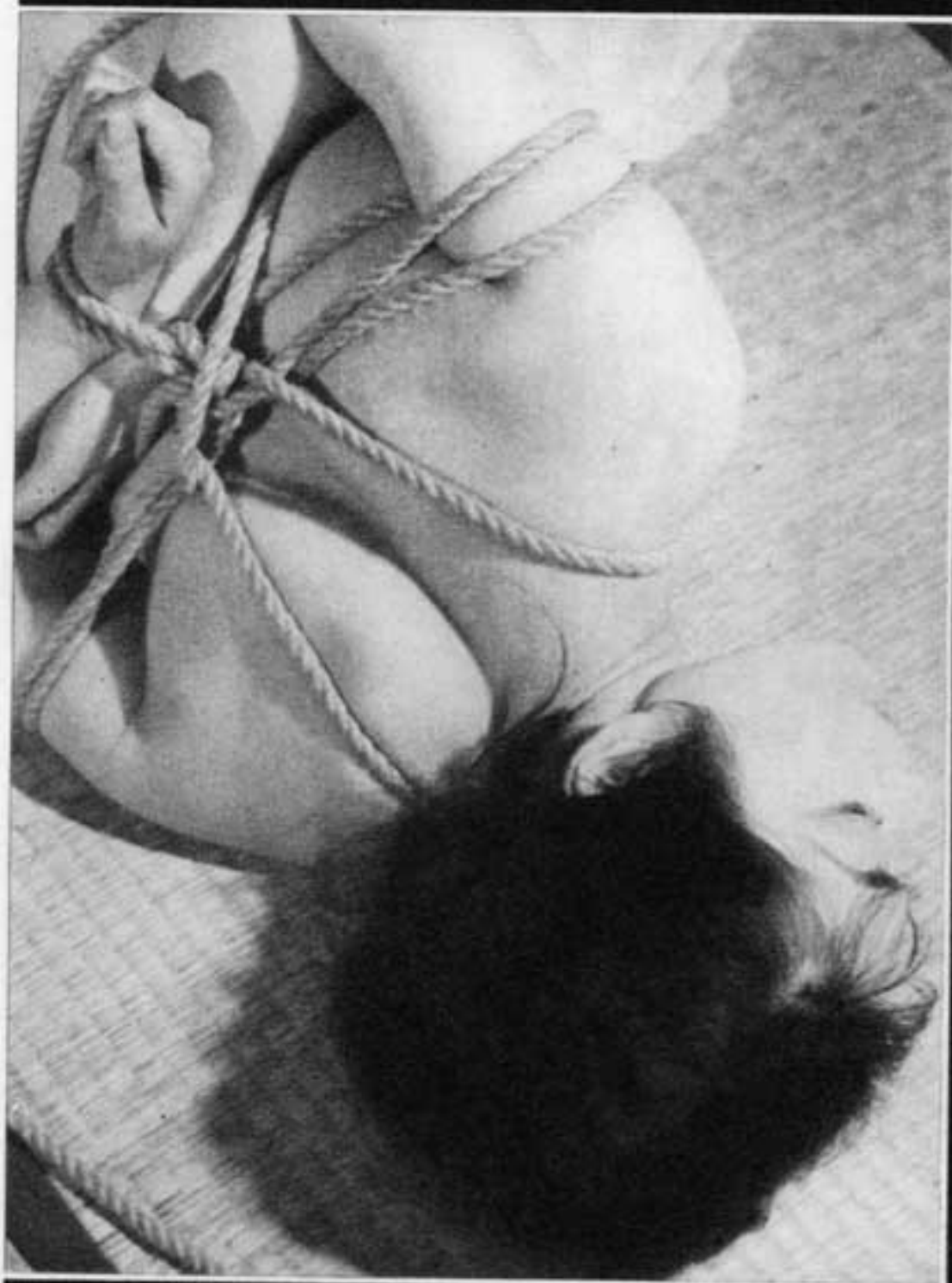




悦虐の時が来る

縛られた女のからだから 加虐を待つしおらしさがに
じみでて これは 悦虐の前の静けさとでもいうのだ
ろうか 女は何を期待する？〈モデル・井神せい子〉





羞恥のなかから

あられもなくハダカにむかれて縛られて この恥ずかしい姿勢でころがされて 女はもがく 苦痛と羞恥のなかで花ひらく 悦虐の時が やがて訪れて
ああ 女の肉体に陶醉が満ちあふれ 白い肌が 喜悦の思いに輝きを増していくへモデル・村上ユキへ





首輪につながれて

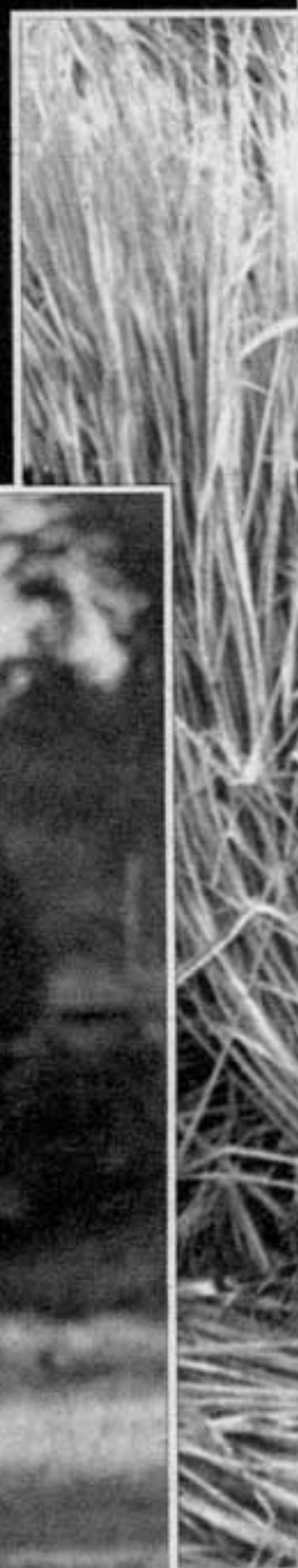
犬ではないのに 首輪をつけられ クサリにつながれて 腕
もまた背中のうしろでくくられて ああなんの因果か 足蹴
にまでされる この屈辱の世界に いったい どんな楽しみ
がひそんでいるのか湧いてくるのかへモデル・西条さくらへ





稲叢のかげで

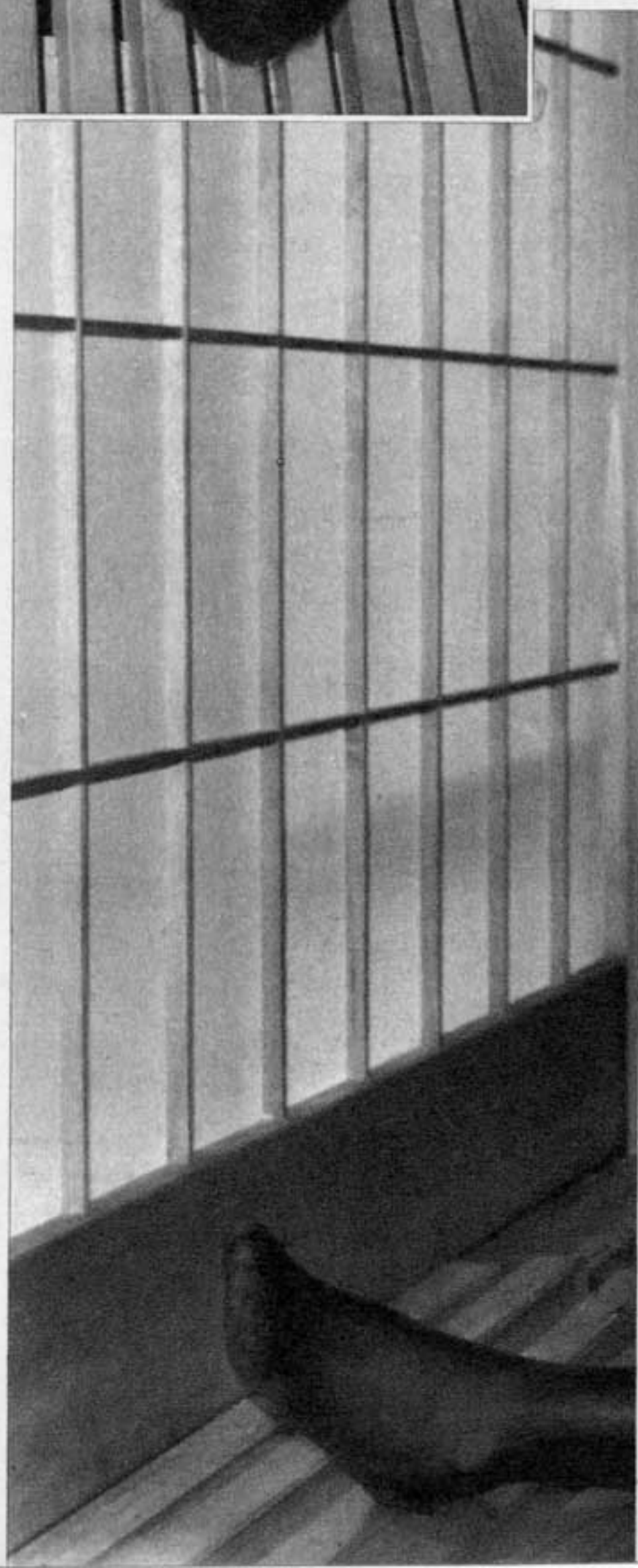
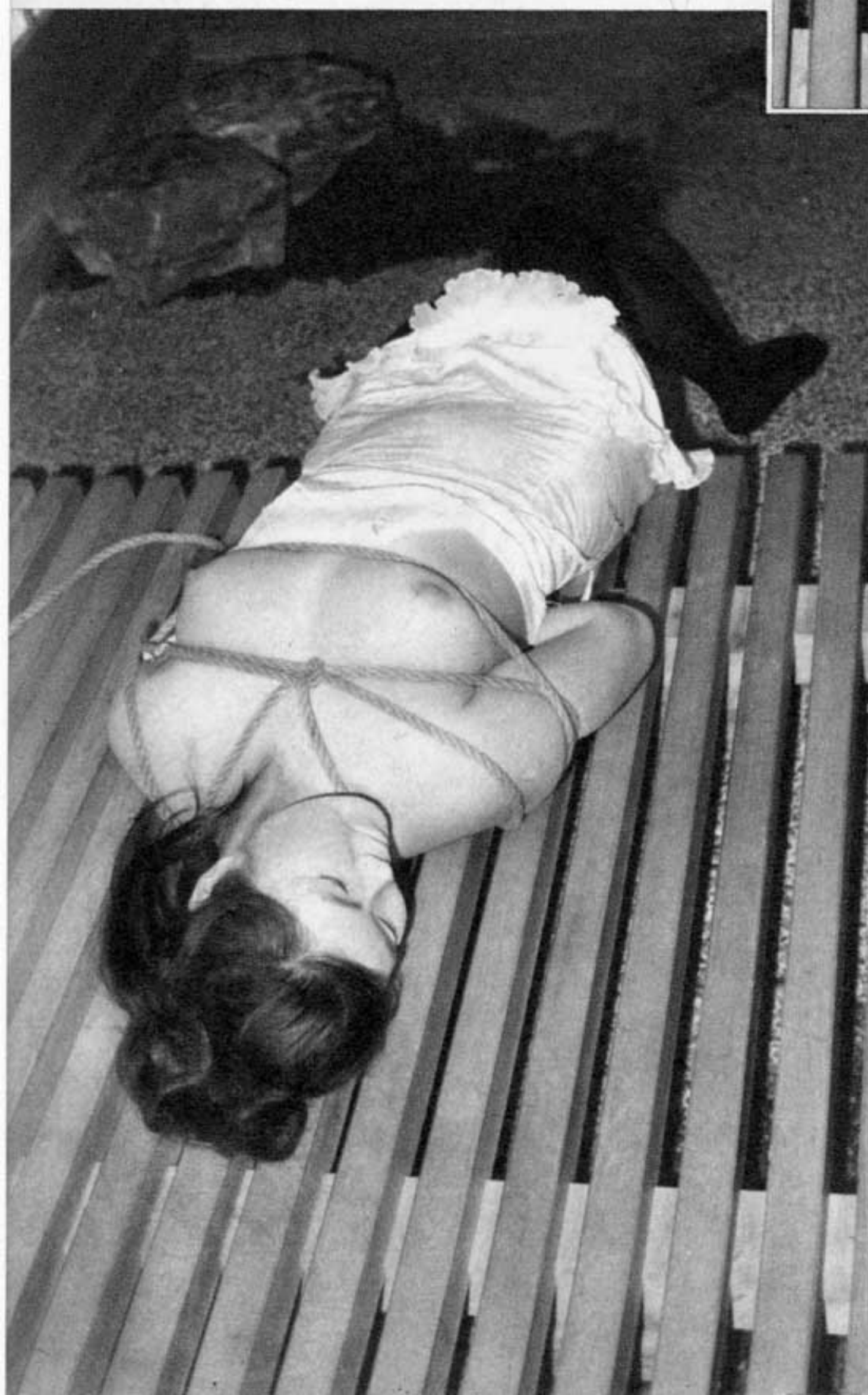
稲叢のかげで 縛られてころがされて ああ 寒風にさらされている
風の冷たさに まだ春の遠いことを知る 〈モデル・牧アンナ〉





恥ずかしくて

靴下とシュミーズだけのあられもない姿で縛られて あたしは恥ずかしくて どうしていいかわからない 痛いことも痛いし それに ころがされたスノコが背中にきしむ 乳房がむき出しにされ 縄がしめつけるので 長くこうしていると 気が遠くなる 〈モデル・水上涼子〉



6人の受難の女



灼熱地獄——ハリツケられた壁の前で 灼熱の炎が 肌を焼くほどに<田上恵子・え>



熱湯地獄——パイプから噴き出す熱湯が肌を焼き 乳房を責めつけるく田上恵子・えん



冷水地獄——シャワーからの凍るような冷水が たえず頭上から降る<田上恵子・え>





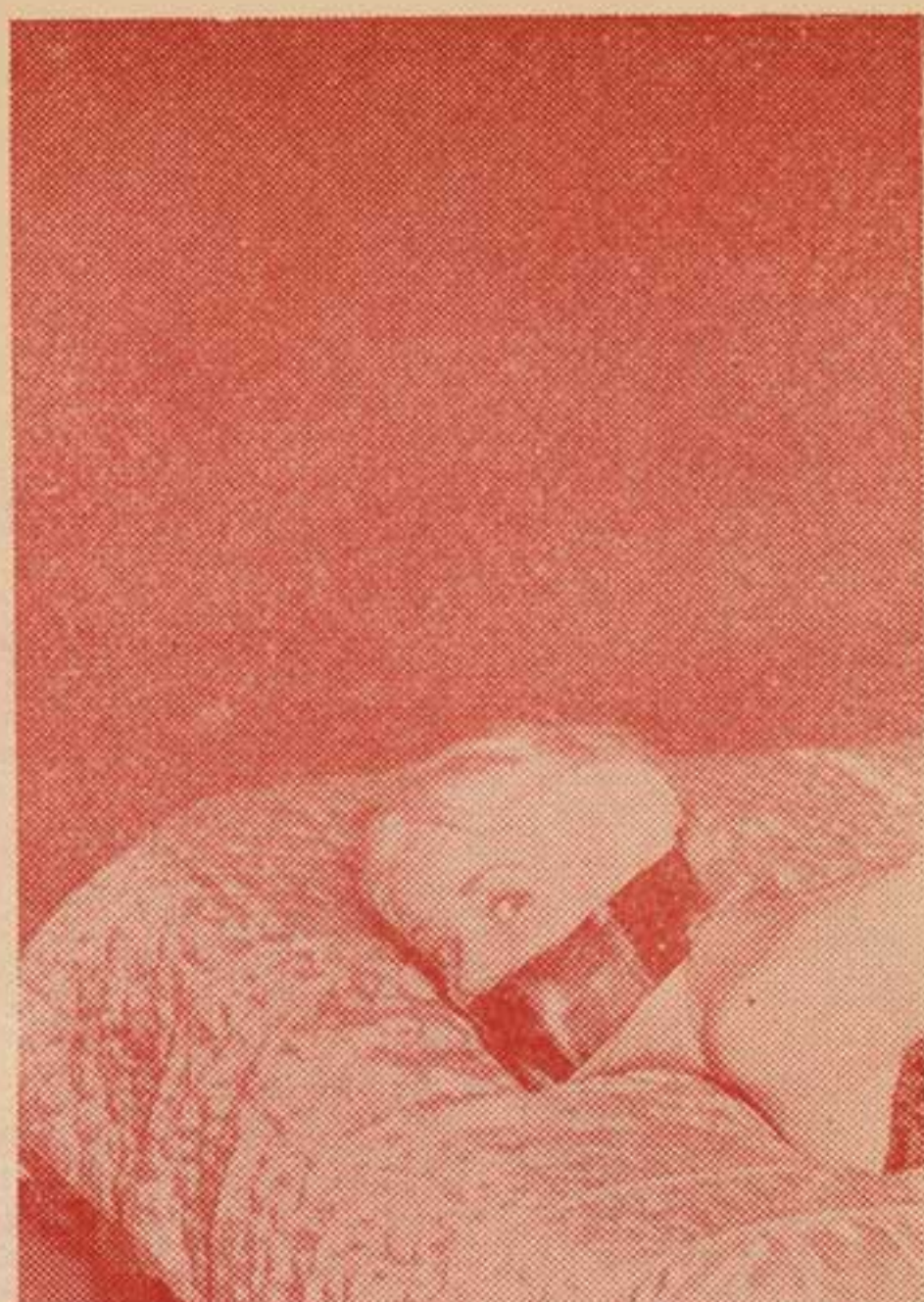
新式スの責め——鉄の三角雫の鋭角が 分銅の重みによって肌を噛むく古正英生・え>



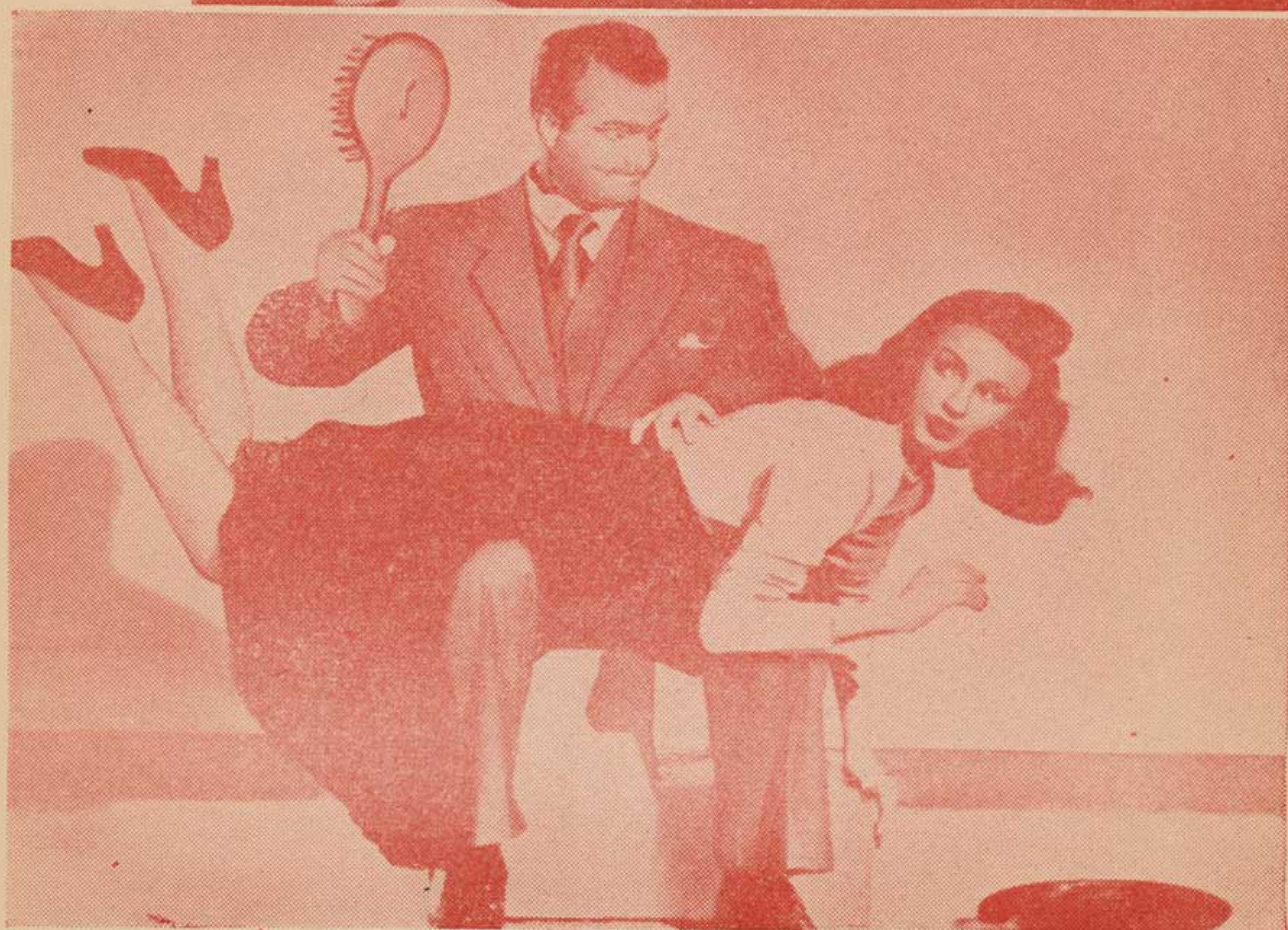
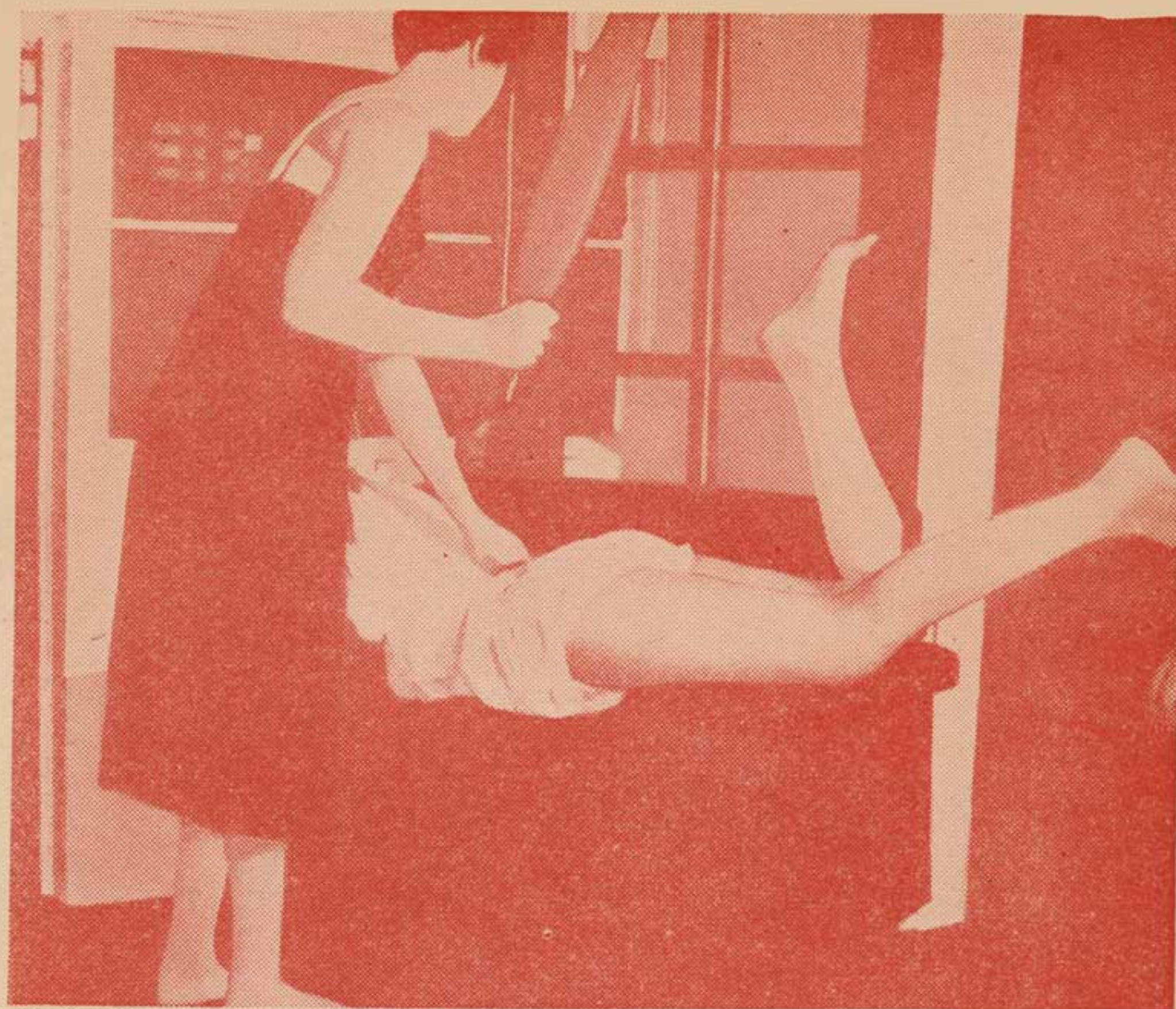
ふたりさろし——裸のまま背中合わせに縛られてさらされる恥ずかしさ<江馬美久・え>



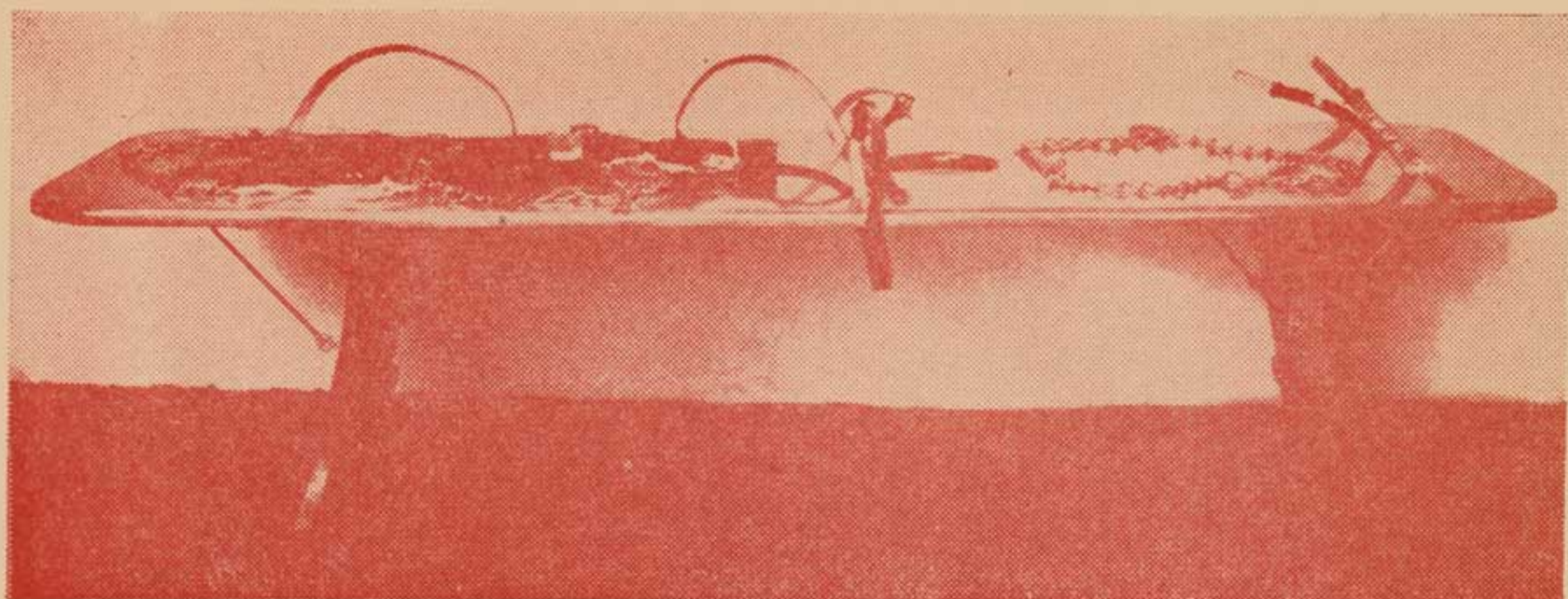
むっちり盛りあがった白い二つの丘
脂肪ののったそのポリューム
それは フラジェレーションの泉だ
ムチが鳴り
スパンキング・ツトルがたたく
そこに 加虐のよろこびがわき
被虐の陶醉が生まれる
ああ 尻打ちのたのしさ



尻打ち3景——右上は新しい尻打ち具、右下はスケルトンの映画から、左は「あたしはメイドのお尻を打つ」





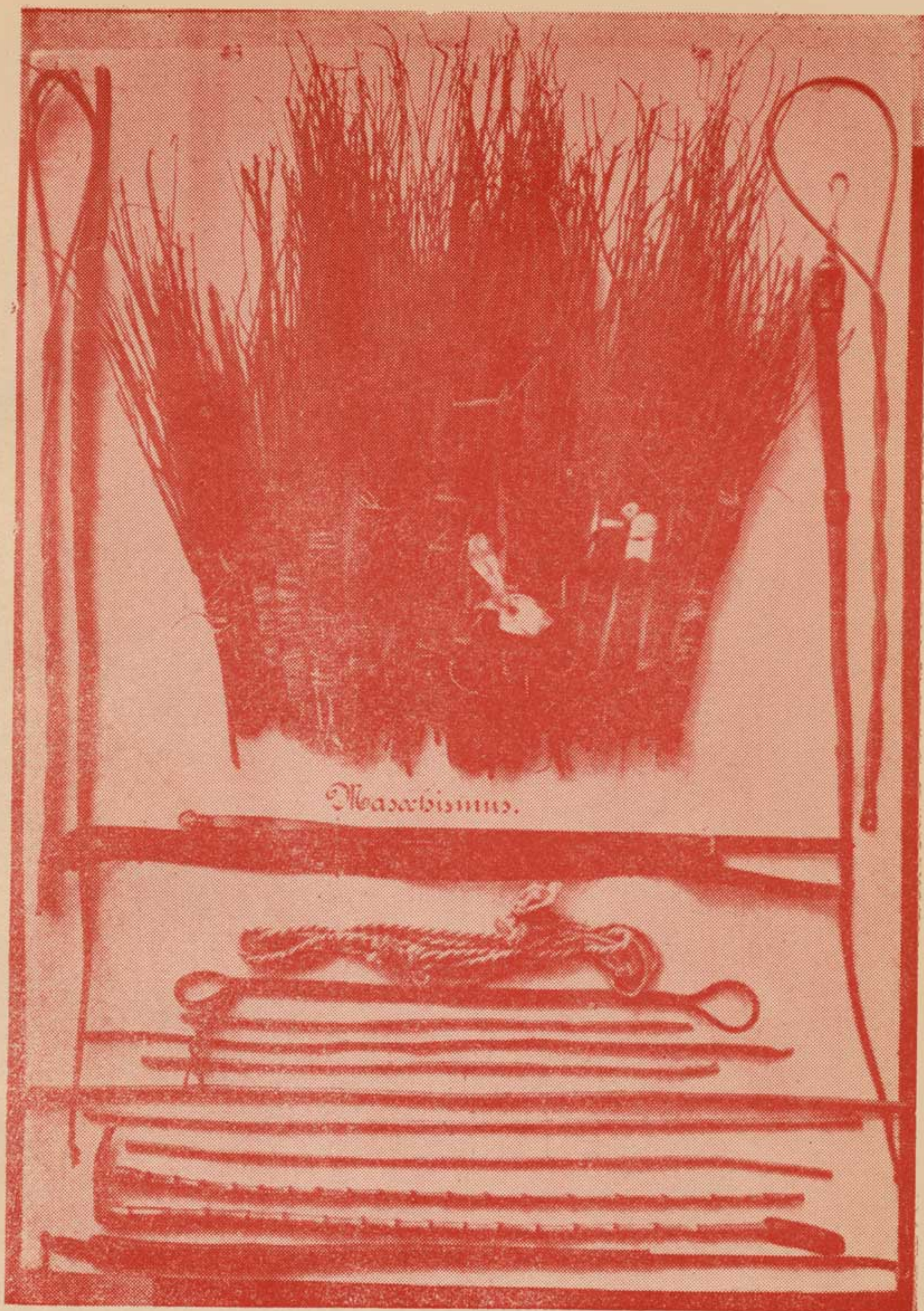


マゾヒストを客とする娼婦が設備した懲戒台。うつ伏せにして中央右よりの穴に局所を入れさせ、もてあそんだ。

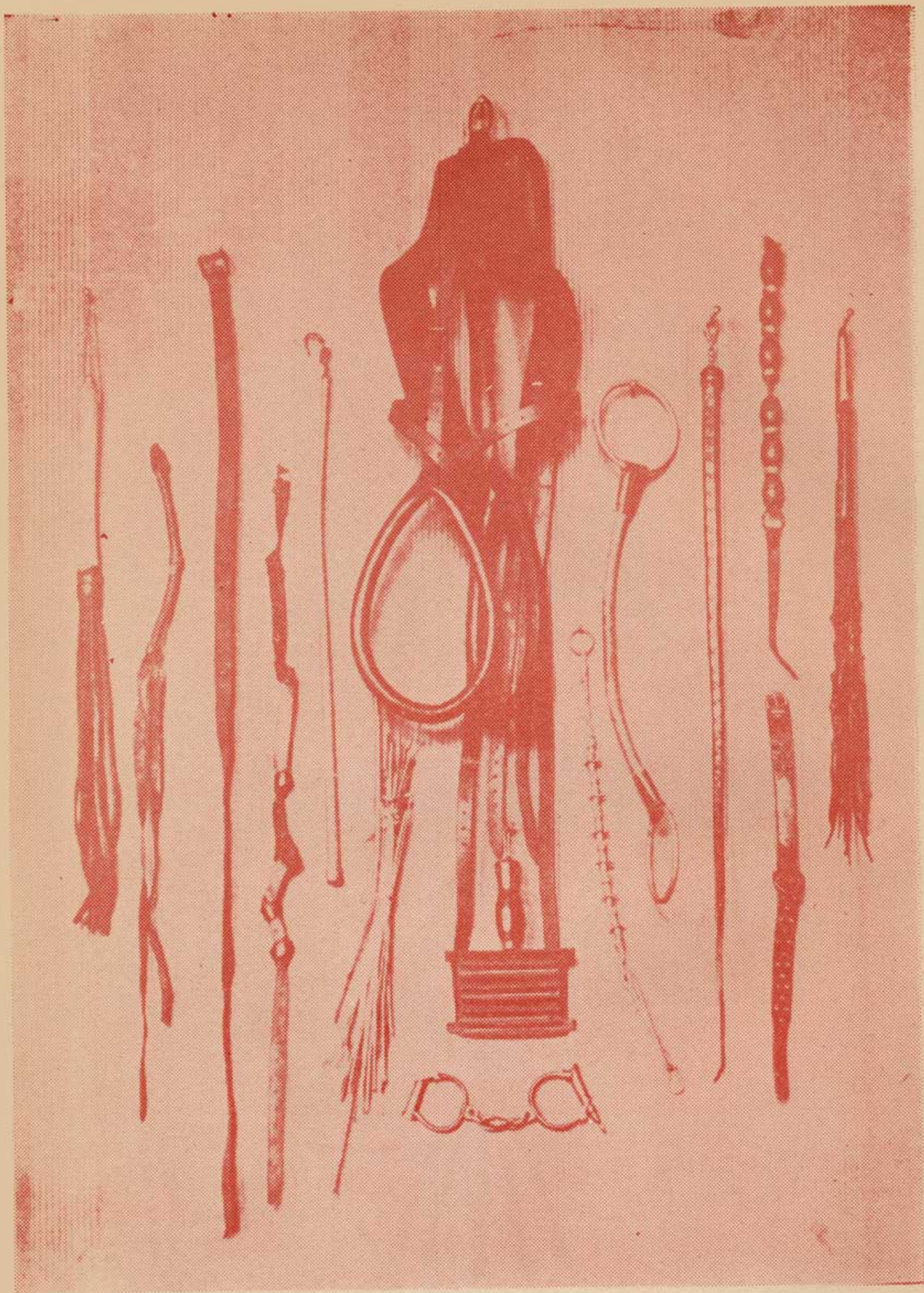




上はフォスが描いた『夫の尻打ち権』——ヘア・ブラシの柄で尻打ちするのは一つの流行でさえある。右はM・ラフィットがえがいた『むごい見せ物』連作の一つで、変態娯家での見せ物を描いている。



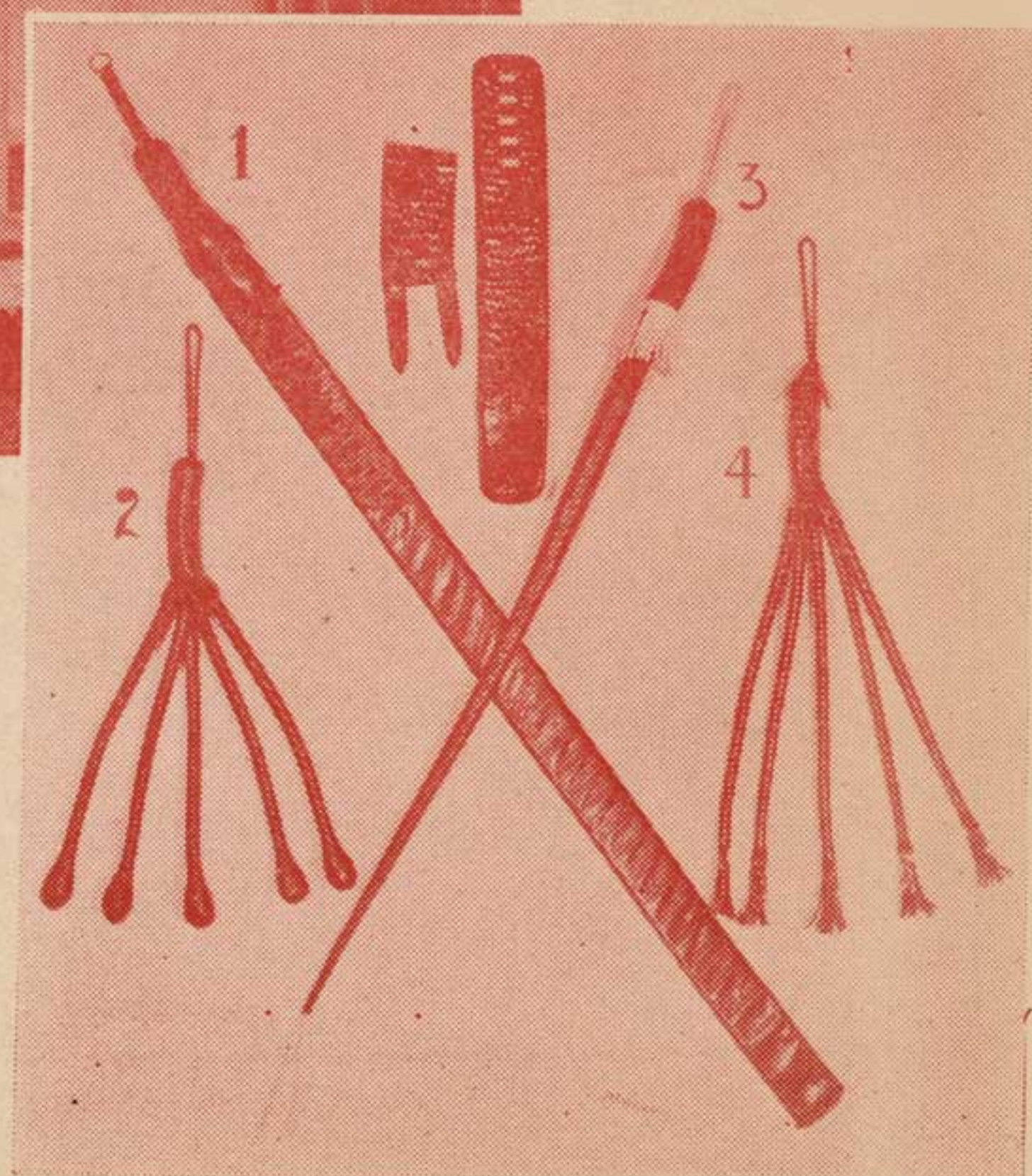
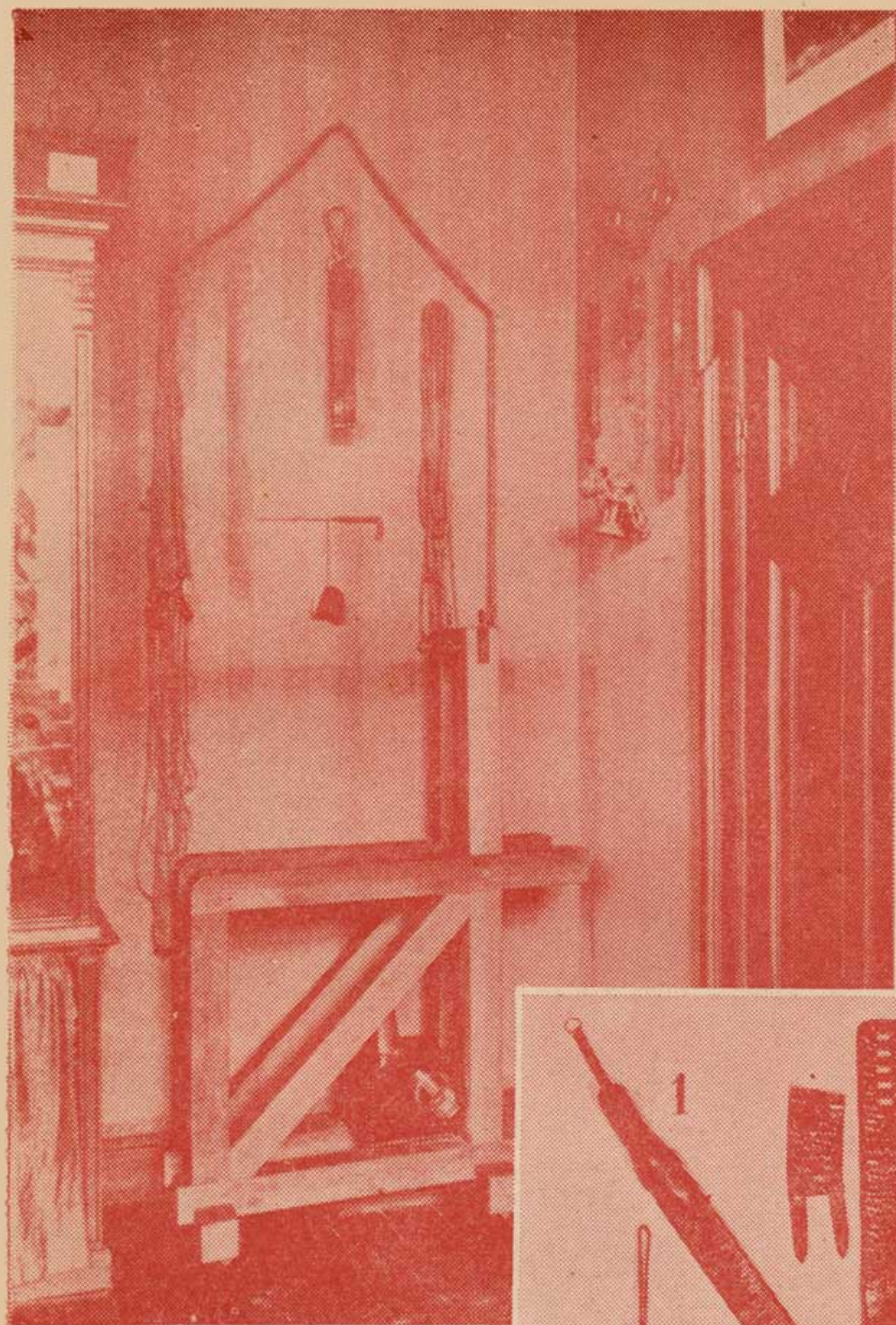
ムチのいろいろ——イラクサのムチを中心にして、犬用の皮ムチと皮ヒモ類をならべてある。これは、ベルリンの娼家で、マゾヒストのためにもちいられたものである。



ハンブルグ市のサント・パウリにいる変態娯婦が使用した器具のいろいろ

左から2本と右端は背中と尻を打つための皮ムチで『九尾の猫』といわれる。次の2本は緊縛用皮具、次いで人間馬用の乗馬ムチ、その下はイラクサの束のムチ。中央の上は人間馬のための特製鞍で、首にかけて固定する珍しい形。その下の四角いのは馬用の櫛掃除器と人間用のハミ。その右がトゲ付きの皮紐、さらに右へ口にくわえてうしろ首でまとめる変形ハミ。さらに犬ムチ、お互いに同一平面にいての背中打ちに用いる。その右上は変形ムチ、下はトゲ付きの首輪である。

ムチのいろいろ——①はスペインふうの皮ムチで、管刑用のもの。②と④はサド・マゾヒストの遊びに用いる特製の皮ムチ、②の先端には鉛玉がはいっていて音は低いが苦痛は激しく、④の先端は糸束になっていて音の激しいわりに苦痛は少ない。③は柔軟なカンガルーの皮を乾かして棒状により合わせたものをシンに使い、その外側をなめし皮で包んだ編み皮ムチ。重さもあり、音も苦痛も激しいのでアルゴラグニアに好まれる。



ベルリンの娼婦が考案した万能処刑台の一種。あらゆる遊びに有効に使用できるように作られてある。もちろんマゾヒストの客を喜ばせるためのもの。

譚奇俗風

1961年・5月号

特集 鞭に憑かれた男と女

だれでも持っている鞭打への関心

鞭打は、サディズム、マゾヒズムの、もっとも素朴な形のあらわれである。サディストは、鞭をふるとき性的興奮に身を焼き、マゾヒストは、鞭を受けるとき性的陶醉に身をひたす。かれらにとっては、鞭こそ、性の法悦境の扉を開くカギであり、桃源の花園に導くパイロットであるのだ。

ヨーロッパには、いろいろな種類の鞭を備えつけて客を待つ娼家があるという。客がマゾヒストなら、好みの鞭を選ばせて鞭打ってやり、サディストなら、鞭をふるわせて、それぞれの性向をいやしてやるのだ。その場合、彼女ら自身が、必ずしもサディストであり、マゾヒストである必要はない。ただ、そのテクニックを知悉ちしつして、客に満足を与えてやればいいのだ。だから、そういう性癖の持ち主が、犯罪に走らないですむ緩衝地帯かんしゅうちたいの役割りを果たしているのだから、存在価値はじゅうぶんにある、と説くものさえている。

それはさておき、鞭打は、宗教的な一種の儀式であったし、同時に刑罰の普及した形態でもある。そこに、人間の本性が見られるのだから、苦痛のなかから快美感を汲みとることは、抹殺ましかできない人間性のあらわれではなからうか。つまり、男にも、女にも、老若を問わず、人間の心には、鞭打への関心が案外大きくわだかまっているのは事実である。△大達欣治▽

鞭打の魅惑

奥村世紀男

鞭打を誘うマゾ女

サディズムにおける鞭打は、性行為の代償行為であるが、あるいは、その前戯として行なわれる異常刺激としてなされる。この場合の鞭は、ペニスの象徴である、とエリスは言っている。そしてまた、

「鞭打つ熱望は、鞭打を求める人とたまたま知り合った場合、そのために誘発されることがある」

とも言っている。そして、そのケースとして、次のような報告している。

Kは、四十歳のふつうの男であった。そのKが使用人を雇った。娼家に生まれた私生児で、二十五歳のSという女だった。

彼女は、あいきょうな女であったが、なまけもので、そっかしく、どうにもしまつが悪かった。そんな調子だったから、あるとき、Kは、思わずSをなぐってしまった。するとSは、とたんに喜んで、「じつは、これまで叱られるようなことばかりやってきたのは、おこられて打たれたかったからです。どうか、もっとウンとぶってちょうだい」

と、裸になってKに迫ってきた。

「よし、ぶってやる」

とKもいきりたって、ミシンのベルトをはずして、それで打ちのめすと、Sは、身をふるわせて喜ぶ風情。それを見てKもつい誘われて、その場で肉体関係を結んでしまう。

このときがキッカケになって、Kはほんもののサディストになってしまった。つまり、

Sのマゾヒズムが、Kのサディズムを誘い出したわけだ、というのだ。だが、エリスの報告では、Kのサディズムが、どんな形に発展していったかは詳述してない。

鞭打サディストたち

クラフト・エービングもまた、次のような例を報告している。

「性欲生活に異常があるため、家庭的な不幸をもたらしのではないかと心配して医療を求めてきた」という二十五歳の男の例である。

彼は、八歳ごろ、教師が子供をつかまえてその頭を脚ではさみつけ、臀部をしたたかに鞭うっているのを見て興奮を感じたのがキッカケになったのだと、エービングは記録している。

また、モンテューの報告によると、十九歳の聡明な、気のやさしい女性が、あるとき、訪問先で、九歳の少年が濡れタオルで打たれているところを、偶然見たとき、不思議な戦慄が頭のとっぺんから足のつま先まで走るのを感じて、それ以来、少年を鞭打つことばかり夢にみるサディストになってしまったということである。

また、Pという二十二歳の青年は、四つか

五つのころ、当時十四、五歳の姉が、家庭教師に、スカートをまくられてお尻を鞭打されているのを見た。そして、そのときの興奮とまっ白いお尻の印象から、鞭打サディストになったということである。

クラフト・エービングはまた、ちょっと異常な例を報告している。Bという三十七歳の男に関するデータであるが、彼は、馬方が馬を激しく鞭打つを見て興奮し、馬が倒れてしまうと、その場で射精してしまった。それが原因となって、この男の異常性欲が決定し、もっぱら視覚に訴える鞭打サディストになったというのである。

また、ヘンリー三世もまた、視虐的な鞭打サドの傾向をもっていたようで、その侍女たちは、主君の目をよろこばすために——つまりは肉体を喜ばすために、白衣をつけ、行列をつくって鞭打たれたと伝えられている。

以上の例のように、サディズムにおける鞭打の魅惑は、たいてい幼年期に鞭打を目撃して異常に感銘し、それが動機になって誘発され、鞭打サディズムが固定するのである。

空想の世界の鞭打

クラフト・エービングは、その著『性欲心

理の病態』のなかで、次のように述べている。「マゾヒストが鞭打たれたいという激しい欲望は、生まれつきのものである。だから、鞭で打たれることによって起こる反射作用について、まだ一度も体験しない前から、すでに一つのあこがれとして心に浮かんできたり、夢にあらわれたりする」

すなわち、マゾヒストの鞭打に対する受け身の要求というものは、生まれながらにして素質の上に形をなしているものである、というわけだ。

Xという二十六歳のある技師は、典型的な空想的マゾヒストであった。いつも自分を、被虐の受け身の立場において、いろいろと複雑な悦虐を空想したが、その萌芽は早熟で、五歳ごろ、すでに淫好的な感覚がはっきり表われていたという。

また、三十五歳の男の手記によると、彼は子供のころすでに、ひとりの人に、ほかの人間の絶対的な権力の及ぶことを、いつも考える習慣があった。したがって、ドレイを思い浮かべると、常に激しい興奮を覚えた。長じては、マゾヒズム的な観念のもとに性行為するのでなければ、ほとんど欲情が起こらなかった。

しかし、この男の場合は、鞭で打たれるという欲求が、子供のとき顕著に現われている、そして「アングル・トム・キャビン」などを読んで、その中の鞭打に心ひかれ、自分には実際に打たれたことはないのだが、一本の鞭に伴う快感へのあこがれが、彼をマゾヒストに育てあげていったという。

服従の意味の鞭打

もともと、マゾヒズムの基底は、絶対服従という被支配の意識の上にたつものである。そして、その心情を最も直截に、最も素朴な形で満たすのが鞭打である。

だからこそ、マゾヒズムのあらゆる形態、すべての場合に、必ず鞭打が、なにかしらかたちでつきまといっている。ことに自虐の面で顕著である。

その場合、生命的な危険を伴っていないということが、彼らをして、無意識のうちに、そこに身を投げ出させるのであろう。

ジャン・ジャック・ルソーは、八歳ごろ、いたずらをする、そのたびに、美しいミス・ランペルシェにお尻を打たれた。彼は、その美しい手で打たれる快感のとりことなり、わざわざいたずらをしては尻を打たれたもので

特集・鞭に憑かれた男と女

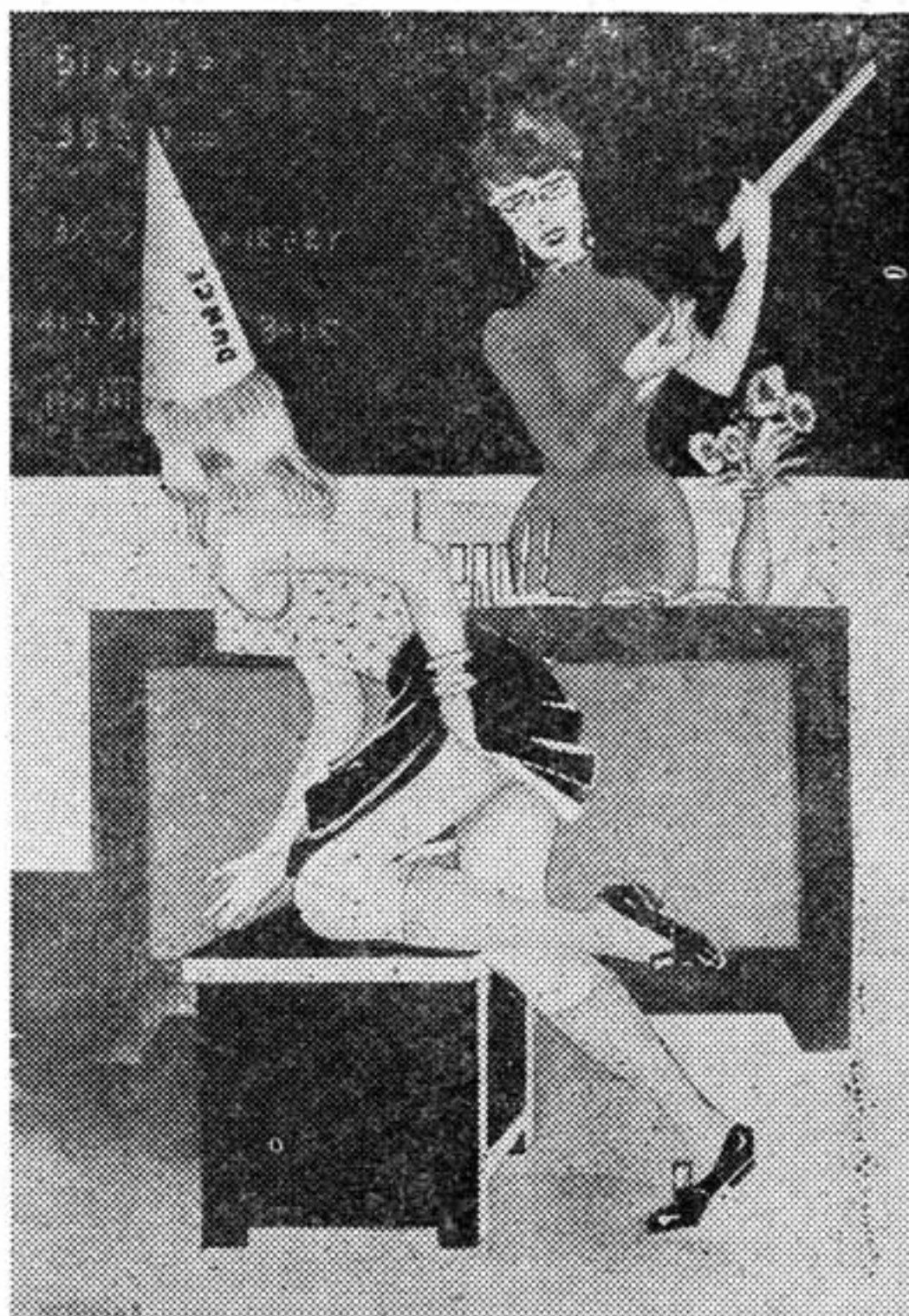
ある。それが、彼の生涯のマゾヒストチックな願望の始まりとなったのだという。

また、モンテューは、ある法学博士の場合を報告しているが、彼もまた、十一歳のとき、学校で、ひとりの子供が友人の尻を打っているのを見たのが、鞭打に魅せられる感動のキッカケとなったのだということである。

これらの場合は、鞭打が、一つのアクシデントによって、あるいはその反覆によって、異常に育っていった例である。つまり、鞭打は、初発の形というだけでなく、マゾヒズムのあらゆる場合に、いつも密着しているのが一つの特徴となっている。

だから、クラフト・エービングは、次のようにいっている。

「マゾヒストと、受け身の鞭打とは、切っても切れない必然性があり、そ



モノサシもムチになる

れは、マゾヒストが実現する非行において、常に唯一のものである」と。

肉体に結びつく快感

どんな民族でも、その刑罰史に、管刑ちけをもっていないものはないし、どここの拷問史にも鞭打の方法をなおざりにしているものはない。これは、人間の心理を示しているというより、民族の生理的表現であるからだ。

刑罰にせよ、拷問にせよ、あるいはそのほかどんな場合でも、とにかく相手を痛めつけるための手法としての鞭打は、きわめて素朴

な形のものとして、一種の生理反応であり、肉体的な興奮からの直接行動であることを示している。

それは、つまり、心理的であることを越えて、むしろ生理的でさえある。だからこそ、最も普遍的であるのだ。

それは、「なぐり合い」が「つかみ合い」と同様の状況において、ほかのどんな手段よりも、行動それ自体が、肉体的興奮に密着していることからわかるだろう。いや、肉体興奮そのものであるとさえいえよう。

およそ、刑罰は、民族の関係における端的な生理的反応として、まず、最初の意義と表現をもった。だから、鞭打が、最もふつうの方法として、あるいは最も普遍的な形式として、どこにでもあらわれたゆえんであるといえよう。

そしてまた、この生理的性質が、鞭打を、容易に性欲に結びつけるのである。

つまり、「病苦の上に性的な快感をもとめる」というアルゴラグニー（嗜虐症）の領域でさえ、その位置を認められるのである。

しよせん人間は、生理的、肉体的な快楽を伴う行為には、いいしれない魅惑をもつだろう。鞭打という形態においても。

鞭

は生きている



あべ
さだよし

鞭は愛の象徴

女がいちばん女くさく感じられるのは、騎乗スタイルで完全武装したときだ、という人があります。

乗馬ズボンに長靴、鞭をもって立っている

ところを見ただけで、興奮して歩けなくなってしまうというのです。

あの姿は反射的に、またぐ、という行為を連想させます。

ある種の男たちは、自分が馬になってまたがりたいと思うのです。そして、鞭や、キラめく拍車の攻撃の前に、馬体となってみずからを提供したいと思うのです。鞭や拍車が攻撃の象徴なら、背中の中のしにかかってくる内股や尻の感触は、慰撫の象徴だといえましょう。それがミックスされて、複雑な階調の陶醉を呼び起こすのです。

競馬を見にいったことのあつた人なら、ゴール前の最後の追いこみにかかったとき、騎手たちがいっせいに馬の尻に鞭をあてる、あの急迫した音が忘れられないでしょう。鞭は、狂気のようにおどろき、その、びしっ、びしっという充実した音は、スタンドのどこまでも聞こえてきます。鞭打

特集・鞭に憑かれた男と女

渴仰者^{かちやうしゃ}は、あの音をきいただけでヘナヘナとすわりこんでしまいそうになるのです。

競馬はギャンブルですが、同時に、そうした性的陶酔をともなったショウでもあるのです。だから、競馬場では、男も女も、ムンムンする体臭を発散させてゲームに熱中しているのです。

あの時の女性の表情や生理は、たしかに閨房に通ずるものがあるようです。だから、競馬場では、理性から逸脱しがちです。そのはてに、大切な虎の子をスッてしまって、競馬場の隅でぼう然としゃがみこんでいる女性などをよく見かけます。

女性は、そうした現実には、生理的に弱いようです。立ちあがる気力さえないのです。おそらく、小指でちょいと突っついてみてもひっくり返ってしまうほど、そのときの彼女は、心身ともに安定を欠いています。どこかの男が、

「奥さん、いっしょに行こうや」

と誘いかければ、彼女はどこまでもフラフラとついていってしまいうでしょう。

競馬場で、そうした虚脱^{きょだつ}女性を専門にネラっている男があります。む

ろん彼女たちは、多くの場合、オケラですから、ネラうのはその肉体です。

「奥さん、どうしたんかね」

なんだったら相談にのろうや、くらいのことをいって、しかるべき場所につれてゆく。

そうした女性は、誘惑にまけたら最後、多くの場合、マゾ的な傾向を見せる、といわれています。

おろかな自分を、無茶苦茶にしてもらいたいという自棄^{やけ}の願望なのでしょう。だから、鞭打を加えたりするのには、もってこいです。ヒイヒイいってころげまわることによって、彼女はすべてを忘れようとするのです。

たしかに、精神的な苦痛にとっては、肉体的苦痛が救いになることもあるのです。そして、自分がいためつけられるその感覚は、彼女にとっては爽快でさえあるのです。そのあげく、暴力組織を背景にしたあるモグリの売春組織に売りとばされてしまった人妻もあります。おそろしいことです。

同性愛者（ことに女の）の中には、鞭打の習慣のあるものが少なくないようです。

その動機は、主として嫉妬^{しと}ですが、鞭打そのもののなかに性的慰安を見いだしている例も珍しくありません。生傷^{なまきず}が絶えず、いつも

腕とか、脛^{すね}とかにホウタイをしていたりします。あのホウタイがまた、新鮮な欲情をそそるのです。

そうした一対^{いっつい}の女性にとって、鞭とは愛のいもとであり、またキズナでもあるのです。それをベッドルームの壁に二本クロスさせて、神秘的な愛の象徴としている場合もあります。

プレイが白熱するのは

西洋の教会では、何世紀か前までは、教えにそむいた者に対する罰として、公衆の面前で鞭打ちを行なっていました。

日本でも江戸時代には、罪人に対して尻の百叩きなどの刑を科していました。

西洋の教会で鞭叩きが廃止になったのは、ある尼僧^{にそう}の告白が原因になっていたといわれます。

公衆の面前でそれをされたあげく、尼僧はあとになって告白したのです。

「それは、苦痛とはまるで性質のちがったものでした。私は、よろこびのあまり、気も遠くなりそうだったのです」

エキジビショニズム（露出症）の傾向をもった者などにとっては、それは、複合された

よろこびの効果があるようです。

また、ルソーがそのさんげ録で、尻叩きの罰をうけた時に感じた性的よろこびについて告白していることは、あまりにも有名です。

なにも、ルソー先生を引き合いに出さなくても、鞭に対するひそかな戦慄と陶酔の記憶をもった人は、すくなくないでしょう。

初級の学校では、先生が黒板に書いた文字をしめしたり、地図を示したりする棒がムチの役割りを果たします。

でっぴりとした中年の女教員などが、眼鏡をひからせ、そのムチをほどよくあしらっているところなどは、たまらない魅力があります。

それを自分のからだに受けたくて、わざと教室でイタズラをしたりする腕白小僧もあるくらいです。そんな少年の目の記憶は案外、いつまでも残っていて、ふとしたはずみに首をもたげてくるのです。

クルーゾオの「悪魔のような女」というフランス映画で、シモーヌ・シニョレ（イヴ・モントンの妻）が演じた中年の女教師は、とても印象的でした。あんな女性の手に鞭があったら、すすんでその下にからだを投げ出したがる男性は少なくないでしょう。

△トピック・コーナー▽

千両箱責め

日本テレビ、土曜日夜7時からの連続テレビ映画「琴姫七変化」の中に、千両箱抱きという珍奇な責めシーンがあった。

これは松山容子という女優が主演する女剣劇映画で、毎回、善玉と悪玉が追いつ追われつのチャンバラをくりひろげるのが見せ場。

この回は、巫女（みこ）姿の若い女が、悪侍たちにうしろ手に縛られて、うす暗い金蔵の扉の前にすわらされている。巫女なので白衣を着て黒髪は二尺ばかりの長さ。監禁されているために、その黒髪が痛々しく乱れている。白衣の胸に数巻きの縄が、かなりの緊縛感をみせてかかっている。

この巫女の膝の上に、千両箱を二個ぐらいのせて、

「どうだ、千両箱の重みは——。痛いかな、苦しいか」

などと悪侍たちが毒づいている。れいによって何かを白状させようとしているのだ。そのうち、

「ええい、強情な女だ。かくなるうちは、打って打って打ちのめせ！」と、どなる。「ははッ」とこたえて侍の一人が竹の棒をにぎり、女の背後にまわってみがまえる。

女は唇をかねて悲愴（ひそう）な表情。

うつむきかげんになって被虐の覚悟。その肩に鞭がふりおろされそうになる瞬間、お定まりのめっぽう強い善玉の二枚目が救出に現われる。

白衣に縄、乱れた黒髪、膝の上の四角い千両箱、という設定に、責めシーンとして変わった効果がみられた。

左腕では攻撃力がうんと減殺される。おまけに足を縛られているからウサギ飛びしかできない。進退の自由もこれでだいぶ制限をうけます。これに対して女性のほうは、まったくフリーということにしておく。さて鞭打の応酬です。

こうした場合、双方とも、最初の攻撃はおっかなびっくりです。つまり、まだじゅうぶんに気がはいっていないから、偵察戦の域を

特集・鞭に憑かれた男と女

でない。

これは、ボクシングの試合でも同じことです。最初はなんとなくジャブをくり出しながらリングの上をグルグルまわっているだけです。そのうち、どっちかの攻撃が有効にきまると、はじめて、そこで活がはいったようになる。

前哨戦のあやふやな気分がふっとんで、はじめて真剣な打ち合いがはじまるのです。

鞭打のプレイも同じことです。

はじめは、

「ソラ、ゆくぞ」

などと言いながらも、いたずらに威嚇的な素振りなどをくり返している。そのうち、どっちかの放った鞭が、ぴしりと相手のからだにきまる。うたれたほうは真剣にうち返す。

そんなことを、二、三回くり返しているうちに、はじめてプレイは白熱化してくるのです。

力の集約こそ極意

鞭は生きている、ということばの実感、鞭を使い、あるいは鞭打たれたことのある人でないとわかりません。

長い細い鞭、あるいは比較的太くて短い鞭

——と、その種類はさまざまですが、そのはたらきは、使い手のうまい下手によって、十にもなれば、その半分にもなります。末端まで生命のこもった鞭というものは、絶対に防ぎきれものではありません。

まるで炎の舌のように、どんな細い隙間からでも侵入し、対象にからみつく執拗な攻撃力をもっているのです。

さて、ふたりは秘術をつくして攻防戦を展開します。ひと鞭、ふた鞭とうけて彼女はひるみますが、やがて気をとりのおして、自分もさっと振る。

鞭の使い方の極意は、要するに、力の集約です。すべての力を、あの細い末端にまで透させるコントロールのテクニックです。あながち、クソ力を出したからいいというものではありません。だから、女のかぼそい腕だからといって、攻撃力が劣るとは限っていないのです。

むしろ、そうした繊手というか、やさしい手から出る力が、力学的に集約されて、おそろしい攻撃力に変化してゆくところに、鞭のおもしろさがあるといえましょうか。それにかかっている、鬼をもひしぐ大男も、のけぞっ

てぶっ倒れたり、尻に火がついたように悲鳴をあげながら逃げまわるから愉快です。

まして、両足を縛られ、腕は不得意な左腕しか使えないとしたら、どうでしょう。戦いは死相をおびてくること必定です。

そんな死闘が三十分もつづくと、ふたりは傷だらけになり、息もたえだえにぶっ倒れてしまします。しかし、相手にとどめを刺そうという意欲から、なお攻撃をやめないのです。その動作は、すでに緩慢だし、鞭も半分は死んでいます。

ところが、それを避ける相手の動作ものたりのたりと緩慢になっているから、どっこいどっこい。

最後に、死力をつくしてどっちかが立ち上がる。そして、ネライをさだめてさっさと振りおろす。

「ぎゃあッ」

という、絶望的な悲鳴が相手の唇からもれる。そしてゴロリと反転して動かなくなる。

それを見届けるなり、叩いたほうもヘナヘナとへたりこんで、動かなくなってしまいうのです。

これこそ同権時代にふさわしい。鞭のプレイということができましよう。

告白

ムチと皮紐の一夜

佐 東 英 策



化粧品セールスマンをしている私が体験した、奇妙な話を告白します。

ただ、この話を信じていただくためには、私の性格を少しばかり説明してわかってないと、ムリだと思います。

私は、率直にいますと、女装マニアなのです。

子供のときから、弁天小僧菊之助、女勘助、九紋竜の長次などの講談界の英雄や、あるいは「とりかえばや物語」の兄と妹が、それぞれ、男と女をとりかえて生活する平安朝の物語、江戸時代の女形……というのに興味をもっていました。

しかし現実には、男性である私が、そう簡単に女装して暮らすわけにはいきません。そこで、私のえらんだ職業が「化粧品のセールス」だったのです。これなら、いくらかでも自分の趣味を生かせると思ったからです。

しかし、お断わりしておきますが、私は、女装にはきわめて興味がありますが、「男色趣味」ではありません。この点を誤解のないように願います。

さて、その私が、この商売にはいって三年め、昨年の秋のことでした。奇妙な体験、それも、私にとっては、一生涯、忘れることの

特集・鞭に憑かれた男と女

できない「感激」を受けたのです。そのお話をしようと思うのです。

そうそう、もうひとつ、私がきわめて「化け猫」の話に興味をもっていたことも、説明しておかなければ……。

「鍋島怪猫伝」「有馬怪猫伝」「佐賀の夜桜」

「白縫物語」……といった、日本古来の物語

のように、化け猫が化けた美しいお姫様が、私の生涯かけてのあこがれでした。

皮紐と調教用のムチ

さて、これだけわかってもらえたら、カンジンの話に移りましょう。

そう、あれは、たしか、大田区山王の高台の閑静な屋敷町でのことでした。前に、二、三度は来たことのある、松井さんというりっぱなお屋敷でした。

旦那様はなにをしている人か知りませんが、奥様は、まだ三十そこそこの、きれいな人でした。

りっぱな応接間で、この奥様とふたりで話していると、彼女の化粧した顔、はなやかな衣装、快い香水のかおり、あらゆる女性的なふんい気が、じわじわと、五官のすみずみま

でしみわたってくる。言いがたい刺激だったのです。

「なんで、そんなにあたくしを見るのです」

「いいえ、奥様、あんまりお召し物が、ごりっぱなものですから……」

「あら、あなたは、着物にも趣味があるんですか……」

と優しくいわれて、つい私は、自分の変わった性格について、全部を打ち明けてみる気になりました。

その奥様は、教養の高い女性だったのです。

にこやかに笑いながらいいました。

「おもしろい趣味ね。でも、あたくしの趣味も変わっているかも知れないわ。今夜お泊まりになっていらっしゃいよ。あたくし、女装のお手伝いをしたげるわ。その代わり、あたくしの言うこともきいてくれないといやよ」ということになりました。もちろん、私は大賛成です。

その夜——私は、入浴して、入念にヒゲを剃り、脛毛を除き、すべすべした肌を整え、奥様の下着を身につけました。

それから、奥様に手伝ってもらいながら、私は、何カ月ぶりに、あの甘く悩ましい恍惚感を味わいました。

さて、私の女装ができ上がると、奥様は、妖しく光る目つきで私を見つめながら、言いました。

「きれいなお姫様ができ上がったわ。まあ、どこから見ても女だわ。あなたも、女みたいな気持ちでしょう」

「ええ、そうよ。わたし、女の扮装している間は、女と同じ気持ちね。でも、男に愛されたいとは思っていないの……あの、あなたの好みって、どんなの。さっき言ってらしたでしょう」

「あたくしのはね……」

そういつて奥様が持ち出して来たのは、数本の皮紐と、調教用の鞭でした。

「あたくしは、これで縛って、打ってもらいたい」

「え！」

私はびっくりして、まじまじと奥様の顔をながめました。

マゾヒズム——この気品の高い容貌のどこに、マゾがひそんでいるのか。

「びっくりなさった。あたくし、サディズムも持っているのよ。でも、あたくし、化け猫のお話をうかがったでしょ、それで、あなたと共同演出で、おもしろいことを考えたのよ」

「化け猫」の狂態

そして、その夜は、こうだった。

「タマや、おまえ、今までどこへ行っていたの？ あたくし、寂しかったわ……まあ、おまえ、震えているのね。もっとこっちへいらっしやい」

「お姉様、わたしも寂しかったわ。ねえ、お姉様、あたくし、もうどんなことがあっても、お姉様から離れませんわ。ねえ、もっときつく抱いて……」

ベッドに腰を掛けて、奥様と私はこんな話を交わします。ふたりは、女同士の同性愛のように、唇を寄せ、互いに胸と胸をさぐり合います。ベッドがきしむほど、ふたりは、もつれ合い、たわむれ合います。

「タマや、おまえは、あたくしを愛している？」

「愛しているわ。食べてしまいたいほど……」
そのうち、奥様は、私の秘密を探り当てます。

「まあ！ タマ、おまえは……」

「まあ、お姉様、なあに」

そう甘ったるく言いながら、私は、口紅を耳まで塗り、目のまわりにも朱を入れ、眉毛

を太く描き直し、髪を乱しはじめます。

「見たなあ……」

私は、ベッドから逃げようとする奥様の髪をつかんで、引き戻します。

「うふふふ、見たからには、生かしてはおけぬ、食い殺すぞう」

そう叫んで、今度は、奥様をベッドから突き落とします。さらに、その肩に、いささか残酷な気がしましたが、奥様の注文がありました。すので、力いっぱい、皮の鞭を飛ばしました。

「むうっ」

と、奥様はうめいて、床にひれ伏しました。

「大丈夫？」

私は思わず彼女の上にかがみ込んで、声をかけました。

「いいのよ、もっと打って」

彼女は答えました。

「そう……」

そう言って顔を上げた時、目の前の鏡の中に、私は、異様な姿態をした自分の姿を発見しました。

姿は美しい女の姿です。そして、その女が髪を振り乱し、あらぬ姿で、美しいいけにえの前にかがみ込んでいるのです。

鏡を見た瞬間の私の顔は、決して醜くはあ

元東京中野病院外科部長 上谷文一著

慢性淋疾短期根治

★新薬盲信の害即ち慢性淋疾の本態尿道側管淋の病理を明らかにし側管壁に生成される防壁の為薬剤は菌に到達不能となり根治至難再発する理由★現行全療法の慢性淋根治至難の理由★難治淋を一回淋糸消滅十日以内絶対根治の合理的無痛無害直接殺菌の一方法説明す★全国根治患者礼状集

価送料共百円

発行 東京都中野区宮園通り四の五

上谷外科医院

発売 東京都中野駅前20番地（南口大通百米左側）

宮園書店

りませんでした。急いでした扮装のため、女の顔が消えきらず、一種の妖しいふんい気をももし出しておりました。

私は夢中で、目の前にさし伸べられている奥様の白いうなじに、噛みつきました。私は、歯を当てたまま、狂暴に光る私自身の目を、いつまでも鏡の中に見据えておりました。

私のお芝居的な演技は、この時から、まるで別物になりました。私は、おのが美しい姿態の中に、一匹の怪獣がすまいはじめたことを、はっきりと意識いたしました。

私は、狂ったように奥様の着物を剥ぎとり、

特集・鞭に憑かれた男と女

皮紐で縛り上げました。

「おまえは、わたしの正体を見たね。おまえは、わたしの刑罰を受けて、それからわたしに噛み殺されるんだよ。いいかい、本当に噛み殺してあげるからね。そしたら、わたしはまた、きれいな娘に化けるのさ。さあ、こっちをお向き」

ぴしりと、鞭が飛びます。奥様は、さかんに哀願します。

「なにを言っても、わたしにはわからないよ。わたしは化け猫だからね」

ぴしりっ！ のけぞる奥様を、皮紐の余った部分でぐいと手繰りよせます。私は、舞台や映画でやるように、あの奇妙な手つきを使って、彼女をさんざんに踊らせます。髪をつかんで引きずり回します。

そして、とうとう彼女の上に折り重なって、醜い歯茎をあらわして、咽喉笛にむしゃぶりつきます。長い間、そうして折り重なったのち、私は、そろりそろりと彼女から離れます。

「さあ、死んだぞ、死んだぞ。これから、骨までしゃぶってやるんだ」奥様は、咽喉笛をのけぞらして、ぐったりしております。その咽喉に

は、まるで、流れ出た血のように、私の口紅の跡があざやかに浮き出ておりました。

無抵抗に投げ出された奥様の姿態が、ふたび私の情欲をかき立てます。もう一度、私は、奥様のからだを、ところ構わず噛みつきまします。鞭でなぐりつけまします。奥様はもう、うめき声のあげどおしです。

「おまえは死んでいるんだよ。死んだ者が声を出すのかい。それなら、今度こそ、声の出なくなるまでいじめてあげるからね」

ぜいぜいと息をあえがせながら、私の打擲は続きます。ぴしり、ぴしりと肌に食い込む鞭の音に、私は、あらゆる理性を喪失し、彼女に迫りました。

思い出は永久に

夢魔のような一夜が過ぎ、翌日、ふたりがぐったりしたからだを起こしたのは、もうお昼ごろでした。奥様は、

「また、こんど必ず来てくださいね」

と、あの、上品な笑いを含んだ顔に戻って、明るく送り出してくれました。

私の財布に黙って彼女が一万円札を入れたのも知っています。しかし、私には、そんなお金の問題よりも、どうしても、その夜のこ

とが忘れられなくなりました。

といって、相手はりっぱなお屋敷の奥様、しかも、その夜は留守だったが、旦那様のいることはたしかです。いろいろな品物や、家庭のふんい気で、想像はつきしました。だから、むやみと私ごとき者が尋ねていくことは、迷惑なことはわかりきっていました。

だが、どうしても、あの狂おしい夜のことが忘れられなくなって、ふたたび大森駅に降りたのは、それからわずか三日めのことでした。

「そうだ、私は、化粧品セールスが本職なのだから、いつ尋ねていっても、おかしくはなかったのだ」と自分自身にいいきかせながら、いそいそと、暗闇坂を上って、その家の門の前に立ちましたが、なんと、思い出のその家は、すでに空家になっていたのです。

私は、狂ったように、近所を回って、どこに引っ越したかを聞きましたが、どうしても聞き出すことはできませんでした。

話は、これでおしまいです。しかし私は、どうしても、あの、憑かれたような「秘密の一夜」を、忘れることができません。

おそらくは、私の一生に於いて、あれほど、私の性を満足させてくれるパートナーが現われるものでしょうか。

— <告白> —

あたしの鞭打の獲物

寺 尾 夏 彦



夢に見た彼女

トン、トン……アパートの私の部屋を、遠慮がちにたたくものがある。

「久美子のやつだ」

私は、寝ころんで読みふけていた雑誌を投げ捨て、ドアを開いた。

果して久美子だった。きょうは、めずらしく、えんじ色の和服に、赤っぽい帯をしめている。いつものセーラー服とはちがって、なんとなくおとなっぽい。

ちょっとはにかんだような目で私を見上げて、久美子は部屋の中へはいって来た。

「お友だちのところへ行くって、母に言ってきたんです」

「だからゆっくりできるんです」とは言えずに、彼女はまだもしじしながら、ものめずらしげに私の部屋を見回している。

「まあ、おすわりなさい」

私は、座ぶとんを取り、久美子にすすめた。

彼女は、それまでかかえていた、姉からの借りものであるらしい和服コートをわきへ置いて、はにかみながら座ぶとんの上へ膝をそろえた。そして、うつむいたままの目で、私の散らかした週刊誌へ手を伸ばしかける。

「さて、どうしてやろう」

私はさっそく、これからの悪い計画を思いめぐらし始めるのだ。

紹介させていただくが、私は満二十五歳、ある会社の外交員、商売がら、かなりまとまった金がいえることもある。しかしキャバレーやバーへ遊びに行くことはめったにない。

というのは、私が性的にノーマルな男ではないからだ。つまり、私はサディスト、しかも、鞭打ちという異常な興味を持っている。

こんな男が、バーや、キャバレーでの遊びに、いったい何の関心があるう。私は、そんなことをするくらいなら、早くアパートへ帰

特集・鞭に憑かれた男と女

って、嗜虐的な小説に読みふけり、勝手な妄想にひたるほうがどれだけ楽しいかわからない。

そして、私は、こんな私の相手になってくれるような女性が突然あらわれたらどんなにすばらしいだろうと、来る日も、来る日も、思い続けていたのだ。

しかし、自分の職業にも似合わず、元来内気で小心

な私の前には、なかなかそんなチャンスは回って来なかった。一生、そんな相手なんてあらわれないのではないか——私はそう思い、絶望的になりつつあったのだ。

こういう異常で病的な傾向を持った私のような人間は、ただ、観念の世界、空想の世界にしか、真の喜びを求められない、それでまた仕方ないのだ、私は一生懸命そう思いこもうとした。

しかし、人間は、いくら努力しても、空想だけで満ち足りるということはない。私は寂しく、やるせなく、昼間仕事をしていながらも、いらいら



して落ち着くことがなかった。

そんな時だった、私と久美子が会ったのは。そう、それは、彼女が私のアパートへ尋ねて来てくれた日の、ちょうど二週間前、一月末の日曜のことだった。

私は、その午後、所在なさに、フラフラとアパートを抜け出し、駅近くのティー・パーティーにはいって、その片すみの席にぼんやりと腰かけていた。

しばらくポロツとして思いにふけていた私は、急にウェイトレスから声をかけられて、ハッと顔を上げた。

「あいすみません、しばらくご合席願えませ

んでしょうか」

のっぽで、美人のウェイトレスは、くりかえしてそう言った。

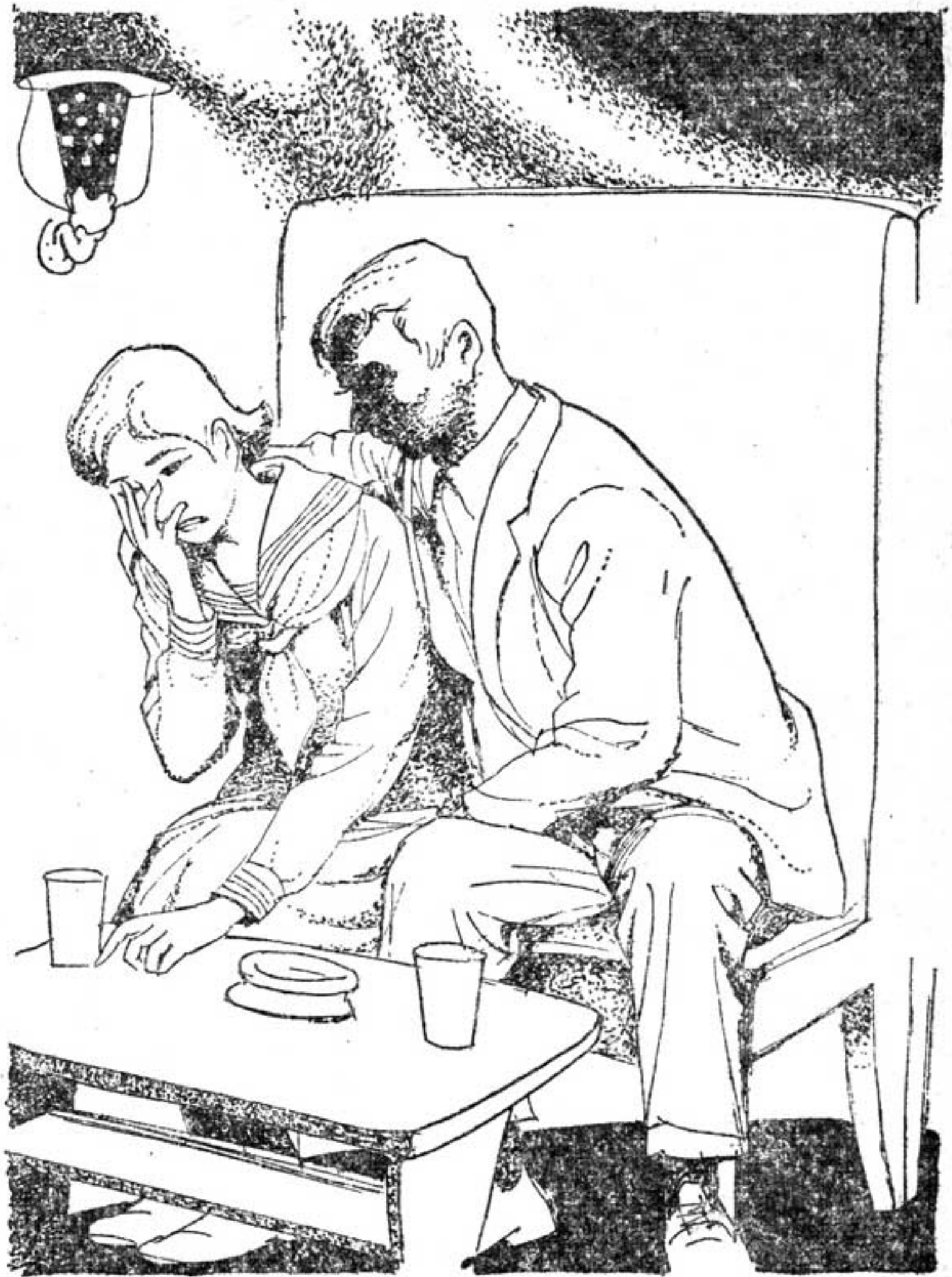
いつの間にか私の周囲の席はいっぱいになっていたのだ。私は、こんなにこんで来たのをちっとも気がついていなかった。だから、四人かけのボックスにたったひとり、ゆうゆうと腰かけていたのだ。

ウェイトレスのうしろに、困ったような顔をした、美しい、十七、八の女子高校生が立っていた。

それが久美子だった。

私は、彼女を一目見たとたん、あやうく声を立てそうになった。どうして？ それは、毎夜、私の空想にあらわれる、私のアミーにそっくりだったからだ。その弱々しげな、それでいて男の心をそそらないではおかしくないようなタイプの娘。心持ち青白く、病的な感じすらする大きな目。しかし、オーバーをぬいだセーラー服の下には、年以上に成熟した豊かな胸、腰つきを感じさせるのだ。私の長い間の空想の女性が、現実の女性となって私の目の前にあらわれたのだ。

私は決心した。どんなことがあっても、この娘を私のものにしてみせる。



神は私に恵みを与えてくれたようだった。
彼女が待ち合わせの約束をした級友は、いくらたっても姿を見せなかったからだ。
私は、彼女に、一生懸命話しかけた。彼女の機嫌を取るようなことも言った。
彼女も、どこか寂しげな、なにか影のある

娘だった。あとでわかったことだが、彼女の父親は本当の父親ではなかったのだ。彼女は再婚した母親の連れ子だった。そして異母姉がひとりいる。
私の最初の成功の原因は、そこにあった。
とにかく彼女は、私をうるさがりはしなかつ

たのだ。自分をかまってくれる人をほしがっていたのだろう。

私たちは一時間ほど話し、その店を出た。東京の西部にあるKというこの町は、国電の駅と直角に交わって、きれいな商店街が続いていた。

日曜の家族連れの多い、にぎやかなその通りを、ふたりは、なんとなく歩いた。美しい商品の並んだウィンドウを、顔を並べてのぞきこんだり、映画館の看板の前にたたずんだりした。

私は、どうしても、そのまま別れてしまう気にはなれなかった。そこで私は、彼女を裏通りのアベック専門の喫茶店に誘った。その二階の席は、みんなふたりがけのロマンス・シートで、なんとなく甘いムードがただよっている。

あまり幅のないシートにぴったりとからだをふれ合ってすわっていると、私は、欲望が妙に高ぶって来るのであった。思いきって、私は、彼女の腰に手を回してみた。それでも彼女は、私にからだを押しつけたまま、じっとしている。

私は、さらに大胆になって、あいた右手で、セーラー服の上からそっと、ふくらんだ乳房

特集・鞭に憑かれた男と女

へふれてみた。ふれ合った彼女の頬が上気して、熱くなって来るのが感じられる。私は急に攻撃心にかられて、彼女のお尻を力いっぱいねってしまった。

「あっ」

はじめて彼女の口から、小さな悲鳴がもれた。しかし、それは、あたりをはばかったものであり、彼女は身をよじらせただけで、私の腕からのがれようとはしなかった。私のその時の期待と喜びを、皆さんはわかってくださるであろうか。

私は、いっそう力をこめて、彼女を引きよせ横腹といわず、腿といわず、つねり上げた。かすかに身もだえ、からだを押しつけることで、必死に彼女は其の痛さをこらえようとする。

私はとうとう自分を制し切れなくなって、彼女の丸い肩にかじりついてしまった。齒に当たる、柔らかく、こりこりとした感じ、私の両手はしっかりと彼女を抱きしめていた。

その時、彼女の口から、悲鳴ではない「あー」という嘆息がもれたのだ、確かに。私の聞き手がいいではない。私の全身は、ぞくぞくと喜びに

うちふるえた。

「彼女はマゾだったのであろうか」

「彼女のからだの中にマゾの血が流れていたのであらうか」

私は、彼女の胸に頬を押しつけ、彼女のにおいを鼻いっぱい吸いこみながら、しめつけ、しめつけ、抱きしめた。私には、その時、彼女がどんなに可愛く思えたことだろう。

私は、それから、髪の毛を引っばったり、靴の爪先を踏んづけたりして、彼女をさんざん苦しめた。

座席の背は高く、まわりのアベックはみな自分たちのささやきや、愛撫に夢中だった。だから、だれひとりとして私たちの異常な行為に気づいたものはいないようだった。

すっかり暗くなった町へ出た私たちは、次に会う約束をして、別れた。町にはまた、木枯らしが吹き始め、すくみ上がるような寒さだったが、彼女の額には、少量の汗が浮き、目じりには涙のあとが見えた。私は、ハンケチでそれをぬぐってやり、肩を抱くようにしてさよならと言った。

実現した空想

私はその晩、どうしてもねむることができ

なかった。彼女を裸にして縛り上げ、鞭をふるう空想に、からだのしんまでほてらせた。しかも、その空想は、今までのように実現性のない、空想のための空想では、もう、なかった。

修学旅行を明日に控えた中学生のように私は、期待にふるえ、いつまでも、寝床の中で転々としていた。

その日から、きょうは五回めのデート。とうとう私は、私のアパートへ彼女をたずねさせたのだ。

私は、熱心に雑誌を見ている彼女に、なお何冊かの本を出してやった。そのなかに、私の秘蔵するある種の本を加えて。そうしておいて私は「買い物をして来る」と彼女に声をかけた。

あわてて彼女が立ち上がりそうになる。私はそ知らぬ顔でそれを制した。

「お菓子を、買っておくのを忘れちゃったんだ、ちょっと行ってくるから」

と声をかけて私がドアを押しかけると、

「あっ、それならここに……」

久美子が、それまでコートの下へ置いていたらしい果物の包みをあわてて取り出した。

しかし、それをもってしまっは、こち

らの計画がつまりてしまう。

「それはどうもありがとう、でも、ほかに買いいものもあるから、ちょっと行って来るよ。お湯がわいたら、火を止めておいてね」

私は、押しつぶせるように言って外へ出た。

彼女に出してやった本の中には、日ごろ私が苦心して集めた東西の秘本がまざっていたのだ。そして彼女が、私の留守中に、それらを見るにちがいない、と計算したのだった。

私は、わざと時間をかけて、甘いものを買って帰った。

ドアをノックすると、果たして、あわてたような返事が聞こえ、気のせいか目をうるませた久美子の手が、ドアを開いた。

『クリスチーヌの受難』があわてて閉じられたらしく、重ねた本の一番上に、あぶなく乗っていた。

「なにを見ていたの、これ？」

私は本を取り上げ、彼女の目をのぞきこんだ。

彼女の顔が赤くそまり、何も言えずにうつむいてしまう。

私は今度は、はぐらかすように、彼女の持ってきたバナナや、レモンをほめ、お茶を入れた。

彼女もそれ以上追求されないの、ホッと

したようだった。それでも処女らしく盛り上がった形のいい胸が、ドキドキ脈打っているようで、お茶をのむ手が心もとない。しばらくすると、あとかたづけをしようと、彼女は戸口のところに流しで、皿や茶碗を洗い始めた。

うつむき加減にした彼女の背からお尻へかけての魅力的な線に、私は、じっと目をそそいだ。

ことに少し突き出されたお尻が、ふっくらと盛り上がって可愛らしい。私は、この可憐な尻を思いつきりいじめてやる空想で、思わず生つばを飲みこんだ。

ふきんを、ふきんかけにかけて、こちらを向いた彼女は、じっと注がれていた私の視線に、恥じらいの表情をうかべ、

「なに？」

と言って、問いかけた。

しばらくふたりは、なんとなくもじもじしてすわり続けた。彼女は何か話しかけようとするのだが、適当な話題が見つからないらしい。さっきまで見ていた本へ視線を落とし、ハッとしたようにまた上を向く。

しかし、困っているのは、実は彼女だけで、

私のほうは、ただ計画的に、沈黙を守っていたのだ。もう、爪をかくして、飛びかかるチャンスをねらっているネコと同じで、彼女が困ってもじもじしている様子を、心の中にじっと楽しんでいる。

たびたび会うち、彼女の心が私に大きく傾いているのを、私はじゅうぶん感じ取っていた。私が相当な行動に出ても、久美子は逃げないという自信が私にはある。

(征服してしまうんだ)——そうすれば、この高校三年生の、世間知らずな女の子に、な

にができる。

私は、

「久美子ちゃん、ちょっと」と、沈黙を破るように声をかけた。

救われたように、彼女の瞳が私の顔に向けられる。

「ちょっと」

私はさらに続けて言い、私のわきを目顔で示した。

「なにに」

問いかけるようにして、彼女の着物の膝がにじりよる。

私は、ついで彼女の手をとらえ、強くひき寄せた。柔らかい弾力のある彼女のからだだが、

特集・鞭に憑かれた男と女

ふいを突かれて、私のひざへ倒れこむ。

私の口へ触れた彼女の髪から、お風呂へは
いって来たらしい清潔なおいがした。しっ
かりと抱きこんだ私の腕の中で、処女のから
だが甘ずっぱくにおいながらもがく。

「久美ちゃん、ぼくが好きなんだろう。だか
ら、ぼくが好きなことなら、なんでもするだ
ろう、ね、ね」

私は、彼女の耳へ口をつけて、こうささや
いた。

と、久美子は意外なくらい素直に、私の胸
に頬を押し当て、コクン、コクンうなずいた。
私の手は、勇気を得て、久美子の柔らかい、
頼りないようなお尻をなでさすった。

彼女、両手で私の胸へひしとすがるように
して、じっとしている。

私は、その手をじゃけんに払うようにして
いきなり彼女のえりもとへ手をさし
こんだ。

ピクン——久美子のからだが一瞬
硬直したようだった。遠慮なく探り
入る私の指先に、形よく張った乳房
の上の可愛い豆粒が、もう堅くしこ
っている。

つまむようにして軽くもむと、久

美子のからだには、続けざまに痙攣が走った。

私の胸元へも、彼女のハッ、ハッとつく熱
い息が吹きかかる。

私はすかさずささやいた。

「ほんとうに、なんでも言うことをきくね。

よし、可愛い子だ、じゃ手をだしてごらん」

そう言うとおいて、私は、片手で彼女の腰
ヒモをとき、それを一気に引きぬいた。彼女
はさすがにハッとしたらしい。

私はしかし、腰ヒモだけ取ると、出された
彼女の手足をすばやく前へ回し、かたくしば
り上げてしまった。おどろいたような彼女の
目が、探るように私に問いかける。

私は委細かまわず、彼女を突き飛ばすよう
にして立ち上がると、押し入れから、古い皮
ベルトを取りだした。

「そこへ四つんばいにおなり」

急に威丈高になった私の声が、命令する。

彼女の目が、いっそううろろと、私の顔
をさまよった。

私はもう、そんな彼女に一顧も与えなかつ
た。瞬間、久美子の頭にはさっき読んだばか
りの本の場面が浮かんだのかもしれない、お
ずおずと私の言うとおりにになった。

「いいかい、少し痛いけど、我慢するんだよ」

私はもう、からだじゅうの血が逆流し、一
刻の猶予もならなかった。目の前に、食欲を
そそっている久美子のお尻に向かって、ベル
トを振り上げ、振り下ろしていった。

まっ白いお尻へムチを

私は興奮して「四つんばいにおなり」と叫
んだが、彼女の姿勢は、実は三つんばいだっ
た。なにしろ、両手首をいっしょにしてしば
り上げてしまったのだから、完全な四つんば
いにはなれっこない。彼女の姿勢は全く不安
定なものだ。

私が容赦なく振り下ろすベルトの下で、久
美子は、必死に悲鳴を押し殺している。

私はそれをいいことに、いっそう力をこめ
て、ベルトを打ち下ろした。そのたびに、彼
女のからだはふらつき、とうとう畳の上へ横
ざまにころがってしまった。顔が涙に、くし
やくしゃになっていく。

「なんだ！ そのかっこうは」

私は低く叱咤し、今度は、久美子の腹とい
わず、背中といわず、ベルトを振り下ろした。
彼女は口の中で、ヒッ、ヒッと言いながら
懸命に姿勢を元どおりにしようとする。

それでも、両手をしばられているので、ち

っとも思うようにいかない。私の鞭が故意に彼女の努力を邪魔するからだ。

とうとう彼女は、起き直ろうとして、反対に仰向けにころけてしまった。着物の前が乱れ、白い脛がのぞく。私の鞭は、えたりとそこへ集中した。

身をよじり背中を畳にちりながら、久美子は、私の鞭をのがれよう、のがれようとするが、何の役にもたたない。それどころか、ひざを立てて踏んばるために、裾前はいっそう乱れ、いまは内股までがあらわになってしまった。

それに気づいて、彼女は、なんとかしようとするのだが、しばらくした両手では、どうしようもない。私の振り下ろすベルトの鞭で、たちまち両股が赤くそまった。

もう、耐え切れなくなったのだろう、彼女の口から悲鳴とともに嗚咽がもれ始める。

幸い日曜日のこととて、両隣の部屋の夫婦ものは、映画でも見に行っているらしく留守だ。廊下をへだたて前の部屋の、いつもヒステリー気味な奥さんのかん高い声も、きょうは聞こえてこない。

それでも私は、用心のため、ベルトを捨て、押えつけた彼女の口へ、タオルでさるぐつわ

をした。

そのタオルこそ、昨晚、私が彼女のことを思い描きながら、自分をよこしたものだ。

久美子は必死にカブリを振って、私の手のがれようとしたが、私は片手で彼女の鼻をつまみ、苦しがつてあいた口へ、すばやく、そのタオルを押し込んでしまった。

これでもう大丈夫。あとはなにをしても平気だ。

私は、彼女の赤い帯はわざと解かず、いきなり手をさしこんで、彼女のパンティーをつかんだ。うすいナイロンのパンティーがなんの造作もなくずり下げられ、あぶなく足首にひっかかった。

恥ずかしさに彼女は、顔をまっかにして、今度こそ、必死にうつむきになろうとする。

私は手を出さずに、彼女の努力を興味深く見守った。そして、やっとのことで、彼女の姿勢は元にもどった。

それでも、もう手首でからだを支えることはできずに、一生懸命ひじをひろげて、からだを支えている。そのため、彼女のお尻は、私の目の前にいっそう近く突きだされた格好になった。

私は、ニヤッと笑いながら、舌なめずりす

ると、いきなり、彼女の裾に手をかけて、それをまくり上げた。彼女の声にならない声が、なにか叫んだようであり、私の目に、彼女の桃色のお腰がひるがえった。そして次の瞬間、彼女のまっ白なお尻が飛びだして、寒々とむきだしになった。処女の特種な香りが、私の鼻をうつ。

私は、しばらく恍惚となって見とれたあと、鞭を取り直すと、それへ向かって慎重な一撃を加えた。柔らかい手ごたえ、着物の上からはまたちがった味だ。私の手は、高まる興奮に、グルグルふるえた。

一つ、二つ、三つ……彼女のお尻は、そのたびに激しく痙攣し、足首のパンティーがひきさかれそうに広げられる。腕を投げ出してしまった彼女の涙にぬれた頬が、畳にごしごしすりつけられ、そのため、いっそうお尻が打ってくださいますばかり高く突き出された。

久美子が、立てたひざを伸ばそうとすると、私の鞭は、容赦なくひざの内側へ食い込む。彼女はあわてて、またそれをひきもどす。私の手はとうとうひっかかっているパンティーもつかみとった、そして、それを自分の顔へ持っていった。

久美子の処女のお尻、まぎれもない十八

特集 男と女に憑かれた顔

歳の娘のにおいだ。

私の血は、ますます狂い立った。真冬の
に、額を汗が流れ落ちる。

「あつい」

つけっぱなしにしてあったガス・ストーブ
の栓をしめた。

こちらを向いた久美子の目が、私の顔に必
死の哀願を送る。

(冗談じゃない、仕事はこれからだ)

私は、ベルトを見せつけるようにして振り
回すと、また、彼女のお尻、内股へと、力い
っぱい振り下ろし始めた。

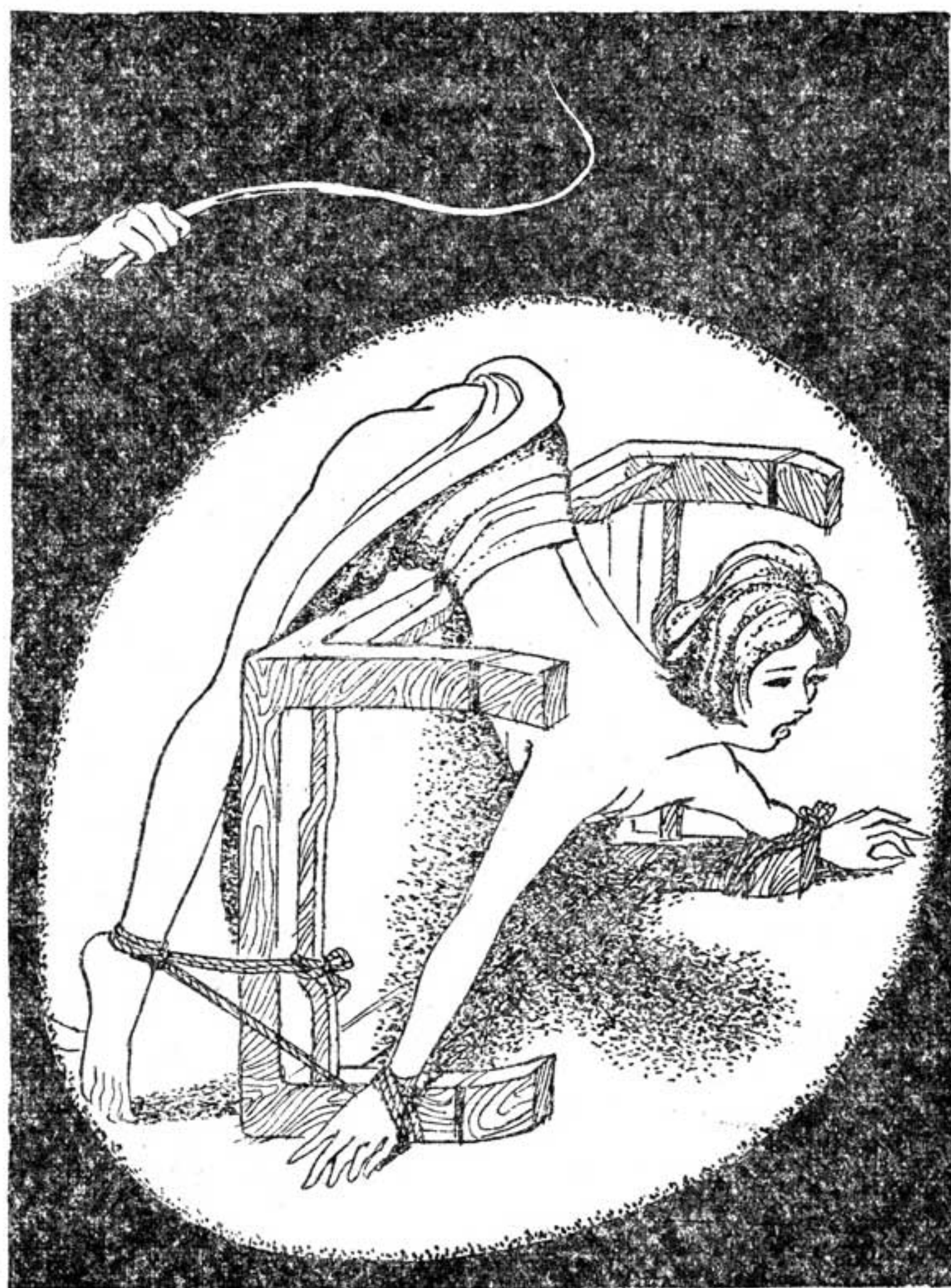
すぼめよう、すぼめようとする彼女の股が、
いっそう恥ずかしく開き、足先が宙を蹴る。

そのたびに、彼女は前へつんのめり、また懸
命にひざを立てる。その必死の動作に、私の
加虐の血は、さらにあおられた。

「脚をもっと広げているんだ！ す
ぼめたら承知しないぞ」

今度は、鞭は、畳をするようにし
て、彼女の内股へ、そしてまた下腹へ
と、すくい上げるように食いこんだ。
「うっ、うっ」

声にならないうめき、一撃ごとに
それをのがれようとして、久美子の



お尻が浮き上がる。そして、こっちの望んだ
とおり、すっかり両足を立ててしまった。

鞭が離れるとひざをたわめ、鞭がまきつく
たびに、思わずひざを伸ばして、爪先立ちに
なる。

もう恥も外聞もない。畳をずりながら、逃

げ回る彼女の格好は、たとうもなく猥せ
つなものだった。

お尻の割れ目はもちろんのこと、かっ色の
可愛いアヌスまでが、私の目に入る。

私は、わざと、そこへ食いこむように、鞭
を当てた。

夫婦和合の秘器！

磁力放射回春器

サンクイン



科学的磁力でアナタの悩みを解消！
(専門家推奨！)

性に悩む男性に福音

◆早漏の方

本サンクインを使用すれば磁気の科学的配列に依り30分以上持続効果絶大！

◆勃起不全に対して

本サンクイン使用数分後に完全隆起し射精後も萎縮しない。

◆短少の方に対し

本サンクイン使用数分内に局所は驚く程膨張します。

▲従来のものは副作用がありましたが心配なく使用のまま歩行入浴が可能な秘器で、斯界で一大センセーションを捲起しており注文殺到中です。

◆アナタの性能を数倍にする新器具！◆定価共800円◆パンフレット説明書30密送

週刊誌で評判！(北日本化学KK取次)

OKクリム

厚生大臣許可第一号品

性専門クリニック

一産病予防%!!

二函代金着払

肥後 ずいき 粹人 佳人 用 関 房 風 流 手芸品 円七 種 組 箱 入 千 共 八 百 円

◆注文殺倒!!

プラスン大器

多数専門家の御使用 発明博、展覧会賞受領

男性の悩み解消

定価共千五百円

性器短少、説明書30円

性の生理的欠陥の力減退等

失意の暗い人生に悩む人

れは今直ぐハガキで申込み送れます。

代金着払で現品急

東京都中央区 明星社 振替東京 85488番

一打ちごとに興奮が

どれほどの時間がたったろうか、さすがに私は、腕のくたびれるのを覚ぼえ、手を休めた。裾をまくり上げられたまま、力尽きたように横たわっている久美子、お尻の筋肉が、思い出したようにピクリ、ピクリと痙攣している。

私は、彼女を抱き起し、その口からタオルを引き出してやった。口の中へ押し込まれていた部分は、唾液でぐしょぐしょになっていた

る。手に取るなり私は、たまらなくなつて、それを自分の口に含んだ。彼女のツバキの味……夢中で私は、むさぼり吸った。こらえにこらえていたのか、いや、出したくとも出せなかったのたのであろう。

かかって、今度こそ、その赤い帯をくるくるとといてしまった。解放されたと思って安心してた彼女の目が、また、おびえたように私を眺め、いやいやをした。

「ヒョッ」というような声が、久美子の口からもれ、せつなげな嗚咽が続いた。

「ぼくのするとおりするんだ」押し殺した私の声が、彼女の目を弱々しくうつむかせ、容赦のない私の手は、残酷に、

またぞろ、私の嗜虐の血が騒ぎ出した。タオルを投げ捨てると、私はふたたび彼女へ飛び

彼女の肩から着物をはぎ取った。白い肌襦袢と桃色のお腰だけになった彼女。しかし、狂った私の手は、それさえ容赦

特集・鞭に憑かれた男と女

なくはぎ取った。

「ああ」

とため息をもらしながら、おおうべきひと
きれの布もない彼女の素裸のからだはミノム
シのように部屋のまん中にちこまった。

私は、血走った目で、狭い六畳の部屋を眺
め渡し、新しい責め道具をさがした。

「よし、あいつを使ってやろう」

私の目は、壁の隅に立てかけた座卓に注が
れた。

彼女のからだを抱きかかえると私は、座卓
を立てたまま部屋の中央に引き寄せ、ちょう
ど座卓の上の角が彼女の下腹部へ当たるよう
にして二つ折りにしてしまった。そうしてお
いて、手首のひもとをとき、両手を広げさせ、
座卓の畳についたほうのそれぞれの足へ、し
っかりとしぱりつける。

すると、彼女の足は、畳へ懸命に
爪先立ちになり、ともすると宙に浮
いてしまう。お尻が恥ずかしい格好
のまま上を向く。

私は、ふたたび鞭を取り上げた。

ビシッ！ ビシッ！

手ごたえを楽しみながら、それは
振り下ろされる。

「ビッ、ビッ」

という悲鳴が、押し殺されながら久美子の
口をつく。両足があられもなく開き、畳を蹴
って跳ね上がる。

赤くそまっていたお尻が、今度は紫色の筋
を作っていく。

「カンニンして、カンニンして、もう……」

彼女の声が、心なしか、だんだん甘く夢み
ごちになつて来たようだ。

私は、ぞくぞくとうれしくなり、鞭を柔ら
かく、そつとなでるように使ったり、短く持
って軽くびちゃびちゃ叩いたり、彼女が安心
すると急にビシリと強く叩きこんだりした。

ときどき上がる悲鳴の合い間には、甘い、
そそるようなすすり泣きが、もれ始めた。

私は、鞭を捨て、彼女の手首を座卓の足か
らとき、なお泣きじゃくっている彼女の肩へ、

やさしく着物を着せかけた。そうしておいて
机のひき出しからひげ剃りあとにつけるクリ
ームを取り出すと、またお尻へ手をさし入れ、
はれ上がった部分へ万遍なくすりこんだ。し

みるはずはないのだが、手が触れるだけで、
彼女は飛び上がるほど痛いらしく、私の腕の
中で、何度も何度ものけぞった

こうなると、また、あくことのない私の血

が騒ぎ出す。メンソレータムをすり込むか、
アルコールで消毒してみたくなる。

しかし、あんまり素直に任せ切っているよ
うな彼女の態度を見ると、私は、彼女がたま
らなくいとおしくなつて来るのだった。

じっと私は、欲望の火を押えた。

「ごめんね、ごめんね」

久美子のお尻をさすりながら、ささやき続
ける。久美子は、ただ泣きじゃくりながら、
いっそう私の胸へすがりついて来た。

彼女の顔を合わせてやりながら、私は彼女
を仰向かせ、いきなり、そのグミのような口
を吸った。

私のやにくさい口臭とはちがって、久美子
の口は新鮮で、まだ少し乳臭いにおいがした。
私と久美子のあいだは、それからいっそ
う進んでいる。

短時間に私は、彼女を本物のマゾに育て上
げてしまったらしい。しかし、ふたりはまだ
若いのだ。あまり度を過ぎして、せっかくのも
のを破局に追いこんでしまつてはならない。
私は、ふたりだけの秘密の快楽を、できるだ
け長く続かせたいのだ。永久にとさえ思っ
ている。まだ幕は上がったばかりなのだ。可愛
い久美子！……

△告白▽

ふくよかな処女の尻に当てる鞭

田丸隆一

「なぜ、おまえは、あのつまらない社会から足を洗わないのだ」

という忠告を、なんだか受けたろう。それは、ぼくが、ある女子野球チーム（名まえだけは勘弁してください）の監督を三年もしていたからだ。

女子野球といっても、男のプロと違って、ほんとは会社の製品の宣伝と、税務署などとの交際用につくられているチームだから、監督のぼくですら、手取り二万五千円のみじめな待遇。それでもぼくには、こんな楽しみがあったから……宿命の悪魔にそそのかされた、ぼくの破廉恥な告白を聞いてください。

三時間の罰を与えて

「せんせ、許して……」

グラウンドの更衣室の一隅に立たされている



る三塁手のA子は、消えいるような声で、ぼくに呼びかけた。ぼくは、だまって煙草をくゆらしながら、返事もしない。

「わたくし、先生……もう、許して、がまん

ができないんです」

A子は、せつなそうにあえぎながら、訴える。ぼくは、やおら彼女のほうに顔を向ける。もう、みんなグラウンドからは引き上げて、合宿に帰ってしまったあとなので、ひっそりと静かである。

ぼくは、ゆっくりとA子を見た。彼女はまだ十七歳の、おとなしい選手である。その顔を緊張させて、ややうつむき加減に、必死にぼくを見つめている。

どこか炎加代子に似た感じだが、色がもっと白いので、凄艶にみえる。その豊かな肉体を見ているうちに、ぼくは心の中では会心の微笑を浮かべながら。

「なんだ、まだ、罰則の二時間は来ないんだよ。あんなヘタなプレイをして、君の行為の代償としては、軽いはずだ」

特集・鞭に憑かれた男と女

と静かにいってやった。彼女は、会社も一年生なら、チームでも一年生。このチームでは、三星を守って「わが社のナガシマ」と期待されているのに、きょうのゲームでは、平凡なゴロの処理ができなくて、味方の敗因をつくってしまったのだ。

「いいえ、わたくし、時間を……気にしているんじゃないんです。わたしは、さっきから……ご不浄に行きたくって……」

あとのほうは、消え入るようにいって、顔を赤くしながら下をうつむく。彼女のユニホームの胸が、心もちふるえているようである。ぼくは心の中で、いよいよ時期が到来したな、と興奮の鼓動の高まるのを覚えた。

彼女をトイレに行かせないまま、ゲームが終ってかならずと、罰則の立ち番をさせているのだし、春とはいえ、まだ肌寒いこのごろでは、女性にとって二時間の緊張はムリであつたらう。

しかし、ぼくは、このA子のエラーを見たときから、天啓のように、このアイディアが頭にひらめいていたのである。

A子をこっそりと責めてやろう。彼女のユニホームの下、神秘的な美



しい臀部に責めの鞭を当てる快感……この悪魔のささやきが、私をして、彼女のエラーをとりあげて、立ち番を命じたのだ。

ぼくは、彼女のかたわらに近よって、「あんなプレイしかできないヤツが、これくらい罰はあたりまえじゃないか」

こう言い終わらないうちに、彼女は、まっすぐに立っている形のいい脚を、小刻みに、交替に少しずつ踏みかえながら、「でも、もう我慢できないんです。すぐ帰って来ますから、行かせてください。お願いします」

と泣きそうな顔をする。

よっぽど許してやろうかと思ったが、口まで出なかったことばをのみ込んでしまった。やはり、ぼくの悪魔のほうか、

「だめ、だめ、あと二十五分はダメ」

と冷淡に言い放った。しかし、すぐ調子をかえて、

「このままじゃ、君も我慢できまいから、よく、その場にしっかり固定してあげよう」

ぼくは、彼女を隅のロッカーのほうに連れて行き、両手を上にあげさせて、手首をロッカーの上の頑丈な横棒に結びつけた。

五つのムチ打ち

彼女は、さっきから、自分の生理要求をずいぶん我慢していたのに、いままた、からだを動かされたり、両手を上にあげさせられたので、ほとんど泣き声になり、

「ああ、わたし、もうどうしたらいいのかしら……」

と、大粒の涙をぼろぼろ流して泣き出した。ぼくは、少しずつ興奮する胸を押えながら、「じゃ、先生が、きょうの罰のしめくりをつけてあげよう。いいね。このことは、先生と君だけの問題だよ。きょうのことが済んだ

ら、だれにもいわないで黙っているんだよ」といって、自分のロッカーにかくしてあった鞭をもつてくると、

「五回の鞭打ち！」

と、きっぱり言った。彼女は、びっくりしたらしいが、それで許されるならばと思ったのか、少し泣きやんで、目をつぶった。ぼくは、彼女の横に回って、中ぐらいの力で、彼女の腰から下、臀部のやや上部を、びしっ、びしっ、と打った。

「ひとつ」

低いぼくの声が、更衣室に響いて消える。

ぼくは、毎度のことながら、この鞭の音を聞いただけで、胸に熱いなまつばがこみ上げてきて、次第に、このふんい気の中で興奮してくる。

「ふたあつ——」

彼女は、

「いっ！」

といって、身をよじらせた。それは、痛さのためばかりでなく、我慢している生理的欲求のためであることは、その表情と身ぶりから、わかる。ぼくは、ますますサディスティックになり、表面に冷静をよそおいながら、いまは、自制心を少しづつ失って行き、急に

彼女に近づいて、ユニホームのズボンをずらして下にさげた。

「あっ、いや！ いや、先生、いけません」

と身をもたえるが、あまり激しくもたえらなと、ついオシッコをもらしそうなのか、かえって身を堅くしている。

「ズボンの上からだ、罰のきき目がうすいんだ」

と、わざとらしくいったが、本当は、私は、もう悪魔を売り渡しているのだった。ズボンの下のむき出しの腰部、まっ白いパンティーに包まれている、むっちりとした尻、ななという美しい処女の臀部であろうか。ぼくは、このもりあがりくびれたまるい肉量が、このうえなくすばらしい芸術品に見え、それに鞭を当てる自分の幸福がひしひしと感じられた。すっかり理性を失っていたのだ。

「よつつう」

少し激しく鞭を、思い切って彼女の臀部の真上に振った。

「ああっ」

と、A子は身をのけぞらせながら、瞬間、歯を食いしばるようだったが、すぐ間をおいて、見よ、ついにこらえきれずに、しーっ、とかすかな音をさせて、もらし始めた。

すぐに、まっ白いパンティーの下部が濡れはじめ、そのびっしょりとした液体は、ふとももを伝って下に流れ、それでもまだオシッコはとまらず、ついに、パンティーの股に食い込んだ部分から、じかに、ポトポトと床に落ち出した。

ぼくは、鞭をもったまま、この天与の秘密の情景に見とれていた。

「だめ！ 先生、いけないわ わたし、もう、死にたい」

とA子は、半ば失神したように、両手を上に縛られたまま、がっくりと腰を落としてしまった。

あたりは、森閑として、なんの物音もしない。この更衣室には、いま、彼女の尻の香りがふくいくとただよっている。ぼくは、このななともいえないにおいと、ふっくりと熱い陽気に包まれた彼女の下半身を、あくことを知らず、むさぼるようにみつめていた。そして、

「いつつ」

と、思い切って最後の鞭を打ちおろした。もう、願うことなら、この五つが、六つでも七つでも、いや永久に打っていたかったが、思い切って、約束どおり五つでやめることにした。少しの理性が残されていたのだ。

特集 鞭に憑かれた男と女

「もういい、許してあげるから、さ、元氣を出すんだ」

と急に優しく言うに言って、彼女の手のいましめを解いてやった。

「早くパンツを脱ぎなさい、それから、この濡れた床をふいて……だれも見てやしないよ、これで罰も済んだんだから……」

幻想は限りなく

A子への罰は、これで済んだ。

しかし、ぼくの心の中の悪魔の楽しみは、それだけではない。

あとは、自分ひとりの下宿の部屋に帰ってからの空想で楽しむのだ。さすがに、女子野球の合宿だけに、いくら監督のぼくでも、合宿には泊めてもらえないシステムになっていた。

ぼくひとり、合宿からほど近い六畳の部屋を借りて住んでいたが、このほうがかえって、孤独の楽しみにふけるぼくには、幸いであった。

この日も、下宿に帰ると、ぼくは、ごろりと火鉢の横に寝ころんで、目をとじた。きょう、更衣室で責めたA子の、思いがけないほど、むっちりとした尻を頭に浮かべ、その白い

肉に、ハッキリとついた鞭の跡を思うと、切ないうずきが湧き上がってくるのだった。

A子は、なんと、顔に似わず控え目な可憐な女だったのだろうか。しかも、その臀部は、なんとまた、人知れずみごとに熟していることだろうか。ぼくは、きょう、彼女を白いパンティーの上からながめ、少し責めてみた。

可憐なほどのふるえを見せたその臀部。ぼくは思わず、パンティーをむしりとり、両手に、その丸い感触を満喫したり衝動にかられたあの瞬間、彼女がもらしてしまった処女の香り高い放尿、そして、その上から、かまわず叩きつけたぼくの鞭。ぼくは、なんと悪魔にとりつかれた男なんだろうか。

しかし、ぼくが、自分のチームで、そう魅力を感じて、鞭を当てたのは、A子が初めてじゃない。F子や、G子や、T子……なん人もいる。

いや、ぼくが選手たちから「鞭の監督」というニックネームをつけられていることも知っている。ひとには見せないようにして、いつもかくしてもっている鞭だったが、いつの間にか、知れてしまったんだろう。

とにかく、ぼくのこの鞭の下であえいだ、かすかすのお尻、それをぼくは、次から次へ

と思い浮かべて見る。

彼女らを裸にしてうつ伏せに並べる。大きいボール紙、もちろん真っ黒いものを尻の形に切り抜いて、それにひとりずつお尻をすっぽりと入れる。

ハート型に立体的に浮き出た真っ白い二つの半円、このずうっと並んだところを、ぼくが鞭をもって、ピシリ、ピシリとひとりずつ叩いて歩く……

いや、そればかりではない、もっと……ぼくは変わった責め道具を考え、あくことなく責めてみたい。また、両の手で愛撫し、熱烈な崇拜のくちづけも惜しまないであろう。

こんな幻想にひたっているうちに、階下で玄関の開く音がした。

やっと現実に戻ることができたのだ。

この楽しみが、ぼくを「女子野球」からどうしても離してくれない理由だった。

しかも皮肉なことには、選手たちから「鞭の監督」といわれているぼくは、会社幹部からは、それだけ練習に厳しい監督とみられていたし、もっと皮肉なことには、ぼくのチームはまた、同じリーグのチームにくらべて、かなりの好成績を上げる好チームに育っていたのだから、不思議なものだった。

ムチで鍛えられた女

— O嬢の物語より —

柏 正 彦 田 上 恵 子・え

アンヌ・マリイ夫人

ステハン卿は、恋人のOにいった。

「あなたが、あたしのための印と、火の登録をからだにつけたら、とてもすばらしいんだがね」

Oは、恋人の意を迎えたいと思ったので、

「いいわ、あなたがお望みなら、あたし、どんなことでもするわ」

といった。

するとステハン卿は喜びを顔いっぱいにあふれさせて、Oを、アンヌ・マリイという人のところへ連れていった。

そこは、フォンテーヌブローの森に近い、大きな庭園にかこまれた邸宅であった。

「Oを連れてきましたよ。さっそくやってくださいますか」ステハン卿は、アンヌ・マリイに向かっていった。



「あなたは、この女に、鎖と印のふたつを同時につけたいんですね。じゃ十日ぐらいかかりますね」

アンヌ・マリイはいった。

ステハン卿はうなずいた。

Oは、これから自分の身の上に、なにがおこるのか、心配でならなかった。

この家には、アンヌ・マリイのほか、三人の女がいた。この女の館は、高い塙とヨロイ戸で用心深くかくされていて、せまく、きたない裏通りに出入り口があいていて、ただであつたから、なかで女たちがなにをしても、外からは気がつかないのであつた。

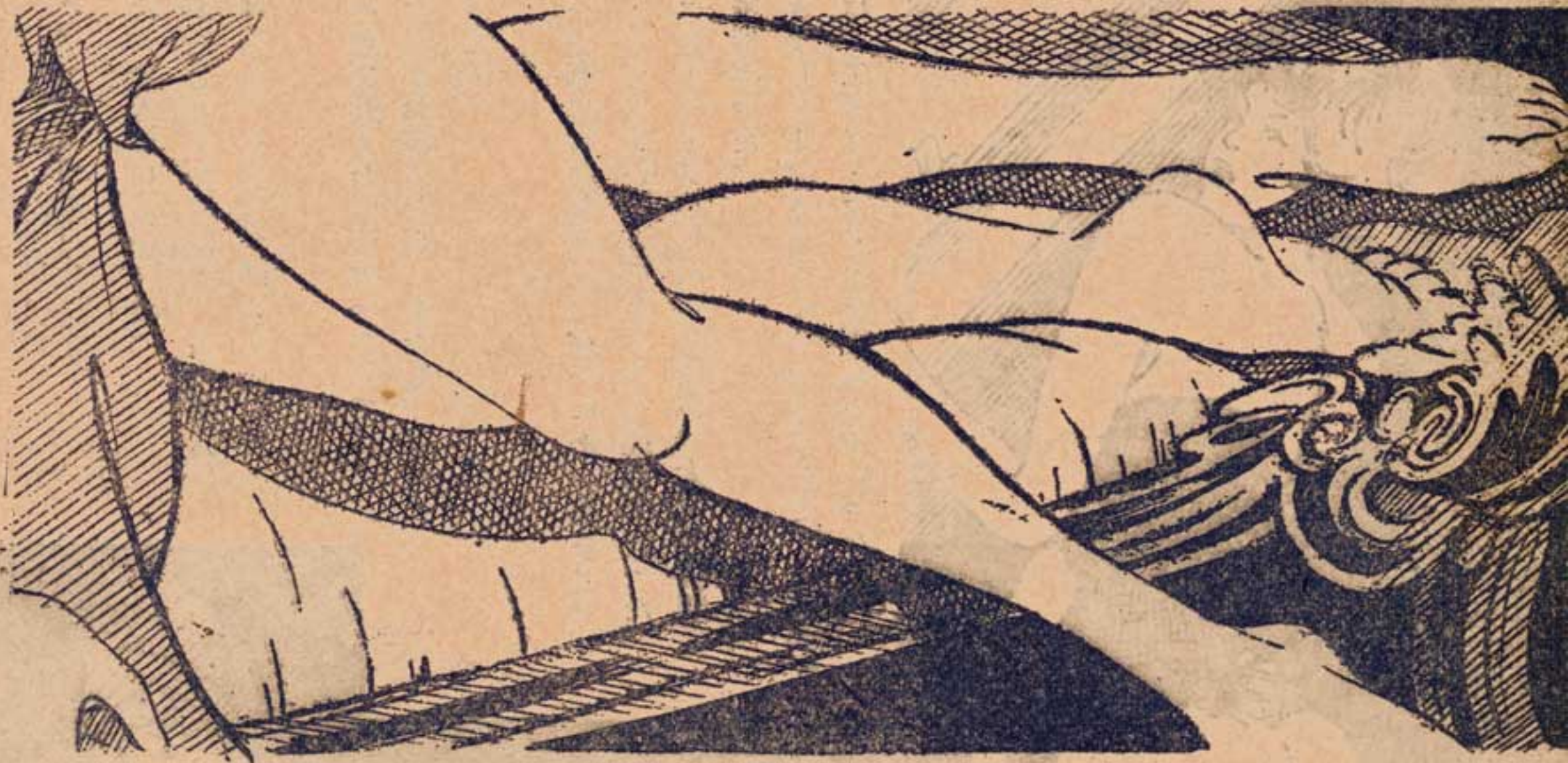
だから、館のなかで着物をつけているのは、アンヌ・マリイだけであつた。

三人の少女のうちふたりは、ブルネットの髪で、乳首をメーカーアップして、ほとんど紫色に近い色をしていた。

もうひとりとは小柄で、丸顔の赤毛の少女であつた。

少女たちは三人とも、胴をきっちり締めつけているコルセットを除いては丸裸であつた。

そして三人がかりで、Oの衣服を全部脱



がせてしまった。

アンヌ・マリイは、ハダカにむかれたOのからだを点検して、そのもと尻に縋になつて、三本の紅紫のムチの跡を見だし、それを指でさすって、

「ステハン卿がムチ打ったのかい？」と聞いた。

Oが、「ハイ」と答えると、

「どんな道具で、いつ、やったの？」

「乗馬ムチで、三日まえでした」

「あしたからしばらくの間は、ムチ打たれないですむでしょうよ。でも、きょうは、あなたの到着をお祝いするムチ打ちをしますよ」

アンヌ・マリイは、そういつて、赤毛の少女に言いつけて、黒いナイロン製のコルセットをもつてこさせ、Oに着けさせた。それも力いっぱい締めつけさせた。

そしてOは次の間につれていかれた。その部屋の奥には正面に少し高い舞台があり、二メートルぐらいの間隔をおいて二本の太い柱がたっていた。床には厚い真紅のビロードのじゅうたんが敷かれていた。

「それでは、これからはじめることにしましょう」

アンヌ・マリイはそういつと、Oだけをの

こして、ステハン卿に帰るように命じた。

五分間のムチ打ち

Oは、この部屋の窓という窓が全部二重になっているのを知って、おどろいた。

「だれにも叫び声がきこえないようになっているのよ。壁にはコルクが二重に張りめぐらしてありますから、なかでどんな音が



しても、もれませんよ。さあ、横になって」

アンヌは、Oの肩に手をあて、真紅のビロードの上に、彼女のからだを押えつけた。

そして、すこしひきずって前方にずらすと、舞台の端にある鎖に、Oの両手をしっかりとむすびつけてしまった。そのため、Oのからだは引っぱられ、臀部が空に浮いた。その膝をまげて、胸の下に引きつけるようにさせた。

そして、つぎの瞬間、Oの両足は、いきなり、つかまえられる、ぐんと、頭のほうへひっぱられた。くるぶしと、手の鎖が、いっしょにむすびつけられ、両方になっっている円柱に、それは固定された。頭越しに両足が引きひろげられた格好になり、彼女のからだのいっさいは、むきだしになってしまった。

アンヌ・マリイは、股のあたりを静かに愛撫しながら、少女のひとりコレットにいった。「からだじゅうで、ここがいちばんやわらかいところだよ、傷をつけなくていいんだから軽くおやり」

コレットは、片足をOの腰にのせて立ちはだかった。

Oが下から見あげると、コレットの両足のアーチごしに、手に持ったムチが見えた。

最初の一撃で、彼女の肉体の中心は、火がついたようにはげしく痛み、おもわずうめいてしまった。

コレットは、次に右側から左側へ移動して、しばらくあいだをおいてから、ふたたび打ちはじめた。

Oは、その苦痛からのがれようとして、力いっぱいあばれたが、どうしても逃げる事ができず、ムチは、皮膚をやぶってしまった。

しかし、Oはけっして「ゆるしてください」とか「おねがいですから」だとか、弱みは見せなかった。

アンヌ・マリイは、どうしてもOにそれを見せたかったのであった。

血が、からだから吹きこぼれても、Oが泣き声をあげないのを見ると、コレットに、「もっとはやく、もっと強く、お打ち、力いっぱいに！」

といいつけた。

Oは、身をかたくして耐えたが、むだなことであった。一分後には、声も涙もでなくなった。

アンヌは、Oの顔に愛撫を送りながら、「あと、ほんのちょっとでおしまい。かっきり五分間だよ。その五分のあいだは、いくら

わめいてもいいよ」

といった、Oは、とうとう悲鳴をあげた。

「やめて、やめて、おねがいだからやめて。」

もう一秒だってだめ、がまんができないわ！」

しかし、アンヌは、やめさせなかった。そして、とうとう五分間、彼女は耐えさせられてしまった。

アンヌ・マリイは、ほほえんで、Oに言った。

「わたしに感謝なさい」

Oは、ほんとうにアンヌ・マリイに礼をいう気持ちになっていた、なぜアンヌ・が、ほかのことをするよりもさきに、自分をムチ打たせたのか、そのわけが理解できた。それは、

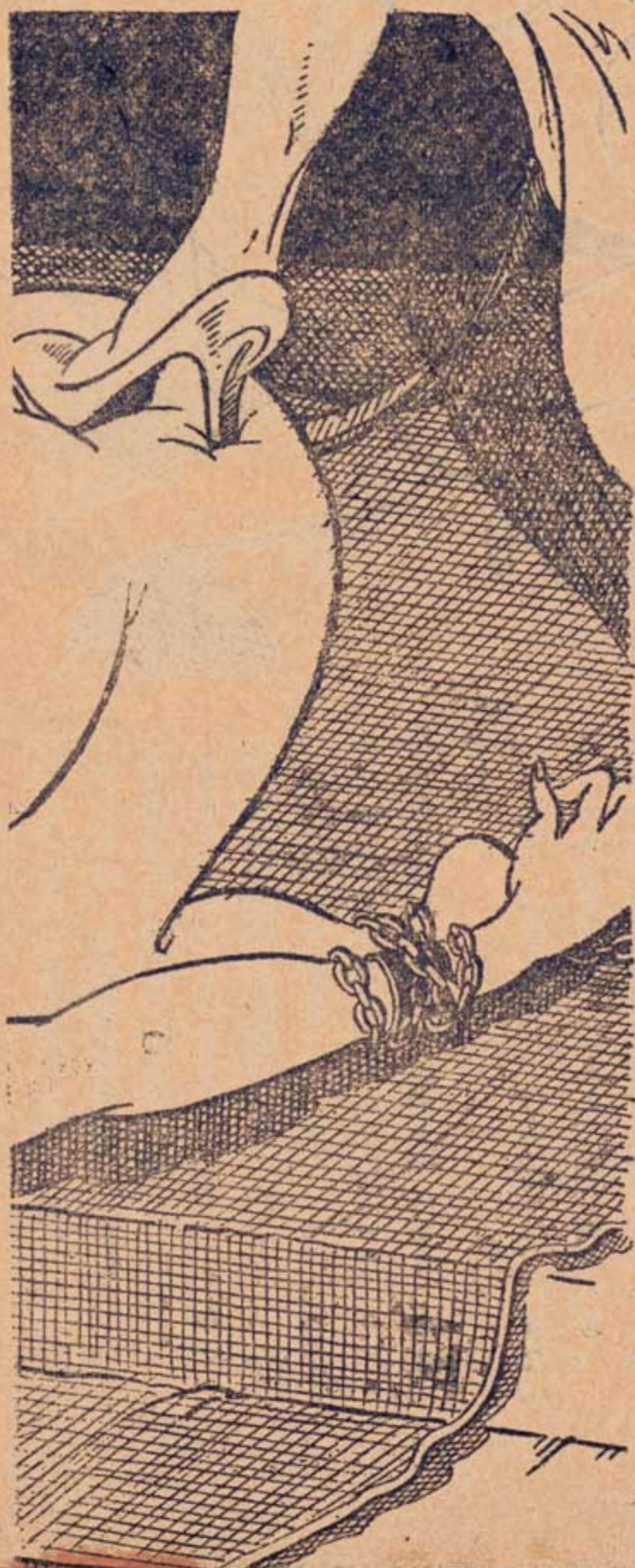
アンヌの、Oに対するいたわりの心からでたものであった。

責め苦に服しているときは、つらくておもわず逃げようとするのだが、責め苦が終わったときは、その責め苦を受けたことで、彼女は幸福だった。というのも、彼女は、ムチ打ちのなかで、いつも陶醉するからであった。

彼女の幸福は、責め苦が長く、残酷であるほど、大きかった。

メダルを吊る穴

「こんどは、からだに穴をあけましょう、あなたのからだに、この指輪を吊るすために」



翌日、アンヌ・マリイがOに言った。そして、鉄色の鋼鉄製のリングを見せた。それは、クレヨンほどの太さがあり、長方形で、重い鉄の鎖の一部に似ていた。そしてその一つ一つは、互いに巧妙に噛み合わされて、ひとつ一つになっていた。それにメダルがついていて、ステハン卿のネームが彫られていた。

「このメダルを下げるのよ。でも、穴をあけることは、そんなにむずかしいことではないのよ。あつという間にあけてしまうわ。問題は、金具をちゃんと打ちこむことね。さっきのムチ責めより、ずっと痛くないわ、少しきつくからだをしぼるだけ。それでじゅうぶんなのよ。さあ、これから穴をあけましょう、きょうは、たっぷりお泣きなさいね」

そして、赤毛の少女が、模範を示すことになった。彼女はベッドのところへ行き、あおむけに寝て、しずかに両足をひらいた。すると、彼女の肉体の一部に、パンチであけたような丸い穴が一つついているのが、Oにもわかった。

「ああ」

と、Oは、恐怖と羞恥のまじった叫びをあげたが、メダルは、つけねばならない運命なのだった。



肉体にパンチで穴をあけられて金具がはめられた日から、アンヌ・マリイは、Oの金具をはずし、その穴にテスト用のリングをとおした。

それは、気持ちよくびったりあったが、吊り上げられると、重かった。肉のなかにくい

こんでいる金属をみると、拷問の道具をくわえさせられているようであった。

「これでできたわ、あとは烙印だけね」

と、アンヌ・マリイはいうと、

「Oには、入れ墨で、印をつけるんじゃないの？」

とコレットが聞いた。Oはびっくりして、アンヌ・マリイの顔をみた。すると彼女は言った。

「かわいそうなO、ほんとうわね、あなたのお尻は、まっかに熱した鉄で焼かれるのよ」

「鉄で!」

「そう、まっかに焼けた烙印よ」

灼熱の鉄の烙印

その烙印は、すぐ行なわれるわけではなかった。そして翌日、気晴らしのムチ打ちがくり返された。



そんなある日、アンヌ・マリイは、Oにムチを持たせて、そばにいた、ブルネット髪のイボンヌに、ムチをふるうことを命じた。

最初の一撃で、イボンヌがすごい悲鳴をあげたので、Oはためらった。

しかし、二度目にムチをおろしたとき、イボンヌが、さらに大声で悲鳴をあげたので、Oはおそろしいほどのまばゆい光につつまれたような晴れやかな気持ちになり、われを忘れて、気ちがいのように笑いだしたくなり、はずみをつけて力いっぱい、ムチをふりおろしたのであった。

そして、このものすごい拷問がおわったあと、Oは、午後のあいだじゅう、イボンヌのそばにいて、そこによこたわっている彼女に絶えまなく接吻してやった。

その次の日の朝、ステハン卿がやってきた。Oは、自分のお尻に熱い鉄がジュージと押しつけられることを思うと、魂が凍るほどふるえあがった。そして、半ば失心状態に陥った。

ステハン卿は、アンヌ・マリイとイボンヌのうしろについて、そんなOを、音楽室にはこんだ。そこには、もうひとりのプルネットのクレアと赤毛のコレットが待っていた。アンヌ・マリイは、柵から四本の皮紐をつ

かむと、Oを円柱のひとつに、お腹がびったりくっつくほど押しつけて、腰と膝のところを紐をまきつけ、固定した。そのあと、両手とくるぶしも、しっかりと柱に結びつけた。

アンヌ・マリイの手が、烙印の押されるお尻の部分をなでて、位置をはかっているのを知ると、Oは、渦巻く恐怖に気も失わんばかりになった。

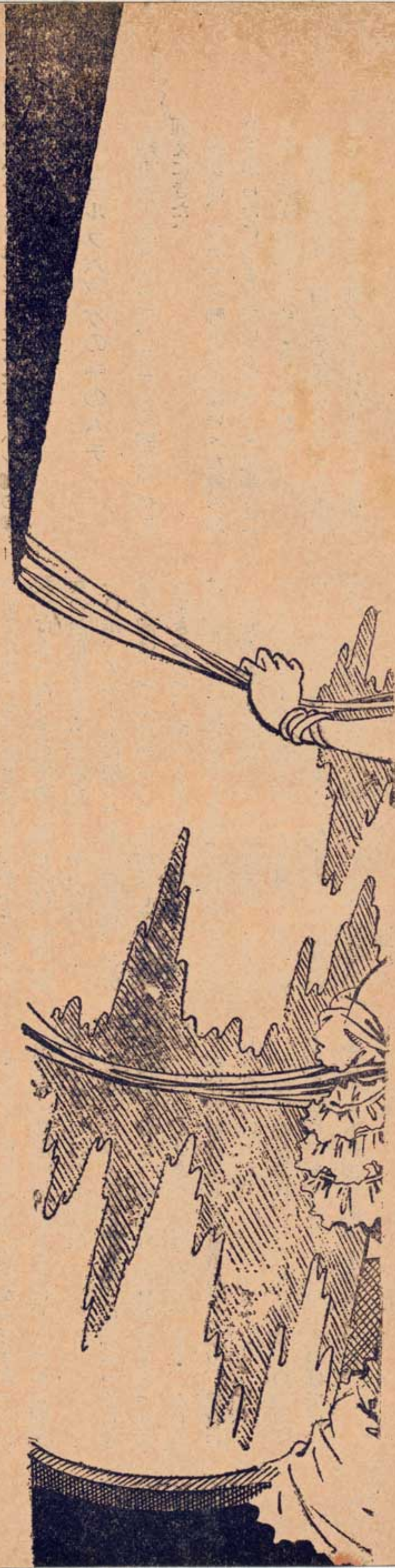
無気味に静まりかえった夏の白昼に、火のパチパチはじける音や、窓がとざされる音が、耳にはいった。

彼女は、首をねじれば、それが見えたのだが、そうする勇氣はなかった。そして、じっと身をかたくして待った。

とつぜん、あらゆる苦痛を全部いっしょにしたような、ものすごい苦痛が、彼女のからだにつきとおった。それは、胃袋も腸も心臓も、火でやけただれるような苦痛だった。

彼女は、全身の筋肉をこわばらせ、あらんかぎりの悲鳴をはりあげた。

だれが、彼女のふたつの豊かな肉に、一度にふたつの鉄を押しつけたのか、ゆっくり五つを数えたのはだれの声だったか、また、焼き鉄をはずすようにと合図を送ったのはだれだったのか、もはや彼女には、なにもわからなかった。みなに皮紐をときはすされると、Oは、アンヌ・マリイの腕のなかに倒れこんだ。暗い失心の渦のなかに吸いこまれる直前、





いきいきとうれしそうにしたステハン卿の顔を、ちらと見たような気がした。

ゴルフバッグの中のムチ

約束の十日がたって、ステハン卿は、Oを迎えにきた。

彼女は、ステハン卿の名のはいった鉄の飾りをからだにつるしていたので、一足歩くごとに、それが振り子のようにゆれた。

烙印の文字は、指三本と半分ぐらいの大きさで、丸いノミで刻みこまれたようにお尻に

めりこんでいて、ひとつひとつが一センチの深さはあった。その文字を読むには、指で彼女のお尻をさすってみればよかった。

Oが、アパートに帰ってから数日後、ステハン卿は、ゴルフのバッグを肩にして、はいってきたので、びっくりした。ステハン卿には、ゴルフなど縁がないと思っていたからだ。彼女のおどろきは、バッグをあけ、なかにいっばいつまった数々のムチを見たとき、笑いかかった。皮のムチが何本もはいていたのである。二本は赤皮で、いくぶん厚手の

もの。黒いのが二本あったが、それは、非常に長い皮のムチがついており、その根本がコイルで巻かれ、端をナットで止めてある刑罰用のムチだった。おそらく、一回打たれただけで、肉がちぎれとぶほど痛いだろう。

ナットのついた、小さなコードでくくった犬用のムチもあった。

そのほかには、皮の腕輪と、綱が何本かできてきた。すべて、Oの処刑用具である。

ムチをならべ、装飾品のように飾るのにはベッドの反対側の暖炉と鏡のあいだの場所がちょうどよいと、彼はOにしめた。

ムチは、腕輪やロープといっしょに、形よくつりざげられた。

そして、Oはベッドにむかってさがっている彼女の拷問の道具とともに、これから同居することになったのだ。

彼は、犬のムチを選ぶと、Oのふっくらしたお尻に打ち下ろした。不意のことだったので、Oは飛びあがった。だが、すぐ、からだを駆けぬける妖しい感覚を感じとり、歓喜にしばれていった。

この日から毎日、ステハン卿は、Oのアパートを尋ねてきてはムチ打ち、そのはてに、ふたりとも抱擁に陶醉するのだった。

＝＜独 占 封 切＞＝

「ヌートリクス・コーナー」

ウルスラ夫人の 女騎手強制調教所

谷 貫 太・訳

これは、大金持ちで、競馬狂で有名なウルスラ夫人の持っている厩舎の女騎手たちが、どんな生活を送っているかというのを主題として、それに、拷問、懲戒、女主人の気まぐれ、女騎手という特別な職業や、女同士の共同生活から来る異常な心理状態などをからみあわせて作った、空想小説というか、空想絵入り小説である。

ANUTRIX-QTV

現在までに百数十編出版しているが、これは、中でも、女同士のサド・マゾヒズムや、騎手の服装に対するフェティシズム、あるいは変形拷問などの意味からいって、かなり豊富に取り揃えてあるものの一つである。
ここに掲載したさし絵は、そのなかのごく一部である。この一編の中には、二十九点のさし絵が、それぞれの場面を説明していると考えていただきたい。したがって、これは、一種の抜粋である。



ウルスラの厩舎

ある夏の日、遠くに、騎手たちが馬をはしらせているのが見える。有名な馬主兼調教師のウルスラ夫人は、馬場の中央の緑の草地に立



って、馬や騎手の様子をながめていた。十七、八歳の可愛い女中が、ウルスラのところにかげよった。夫人は、女中をひざまずかせて、その肩にどっかりと腰をおろすのだった。女中は、ウルスラの厩舎では、椅子の代用だった。その地面には、ちょうど、女中の手足





を入れて押える鉄の帯がつくられてあり、女中は、うつぶせに地面にはっているのだった。

夫人は、長靴のかかとに鋭い刺輪のついた拍車をチャラチャラいわせながら、女中に、ミニチュアのくつわをはませ、その皮ひものはじを握ってうれしそうだった。

やがて、女騎手たちが、近づいて来た。近くによってみると、彼女たちは、ふつうに乗っているのではなく、馬の上に固定して縛りつけられていた。

長靴のかかとは、騎手の考えとは関係なしに、鋭い拍車を馬のわき腹に蹴込むように固定され、馬の反動で、右の手袋の先につくりつけられた鞭が、一歩ごとに馬のお尻を責めるようになっていた。

仕置き部屋

厩舎に帰ると、成績の悪い娘は、呼び出されて、皆のしている前で、くさりにつながれ、両手をうしろ手に縛られて、床の上の食べ物を、

犬のように食べさせられたり、馬のようにくつわをはめられたまま、仕置き部屋に宙吊りにされたりして、こらしめられるのだった。

ウルスラは、騎手たちに対して、きびしかった。望むとおりの記録が出ないと、夫人は、その騎手を、ありとあらゆる方法で、いじめつくし、からだにやきを入れるのだった。

騎手のなかにまじっている夫人の助手たちは、夫人の命令一下、すぐ名指された女騎手にとびかかり、よってたかって縛り上げ、吊るし、乗馬鞭で尻を打ちのめし、荒れ馬に縛りつけ、時によっては、ふたり、三人を一束にして縛り合わせたりするのだった。

乗馬鞭の唸り

あるとき、夫人は、腹ごなしに、ボニタという騎手を、馬の右側にしぱりつけた。ヒラリと夫人は馬にまたがると、はげしく拍車を入れた。馬は、おどりがると、狂ったように走り出した。

ボニタは、生きた心地はなかった。そのうえ、夫人は、ときどき、哀れなボニタを馬上から冷ややかにあざわらいながら、手綱の余っている皮

ヌートリクス・コーナー

の部分で、したたかにポニタのお尻を打ち据えるのだった。

馬のいななきと、馬蹄のひびきとそのなかからきこえるポニタの悲鳴とが、離れた厩舎の仲間のところまで、きこえるのだった。

リディアという女騎手は、さかさに吊られた。

納屋のなかで、乗馬服のまま吊るされたりリディアのお尻に、ピシピシと乗馬鞭がうなった。

夫人の助手が、鞭を使いたがらないために、いつも賞を取りそこなうリディアに、鞭というものの痛さや、ききめを手とりばやく、リディア自身のからだに教えているのだった。

縛られた女騎手

明日は、競馬の当日、という日、夕暮れせまる競馬場には、お仕置きのために、障害の代わりに縛りつけられた女たちの上を、同じく、馬に縛りつけられて、鞭でおどされながら、練習にその上を馬で飛び越しさせられるふたりの女騎手の姿が見られるのだった。

夫人は、騎手だけでなく、馬をもいじめつ



くした。命令に反して、馬を血の出るまで拍車や鞭でいじめなかった騎手は、自分のからだで、その代償に苦しみをうけねばならないのだった。

ある騎手は、鋼鉄のよろいを着せられ、くさりで馬に縛りつけられた。反動が、彼女を苦しませて、身動きすると、哀れな女騎手のかかとの拍車が、無情に馬の腹につきささるのだった。

また、皮の衣装で縛り上げられた騎手は、

両脚を開いたままで、一番感じやすいところを、おどりが上がる馬の背中に打ちつけられながら、こらえなければならぬのだった。

さて、晴れの競馬の当日、どんな事件が起こったろう、というところで、第一編が終わり、第二編（未到着）につづくのである。

（このさし絵集の注文取り扱いは、本社代理部、または渋谷区上通り三ノ二八、泰西出版資料会社で独占して取り扱っております。）

男を支配する女性たちの物語、は5つの短編からできている。

第1話は、「妻に征服され縛り上げられた男の話」――

ある男が、責めの絵雑誌を家に持ち帰り、それを妻に見つけられる。妻はその中に登場する女主人公に大いにひかれ、その真似をしようといいだす。

そこからこの出来事が始まる。さし絵は7枚あって、すべてジムという画家が描いているが、そのなかの3枚がここにあげたものである。



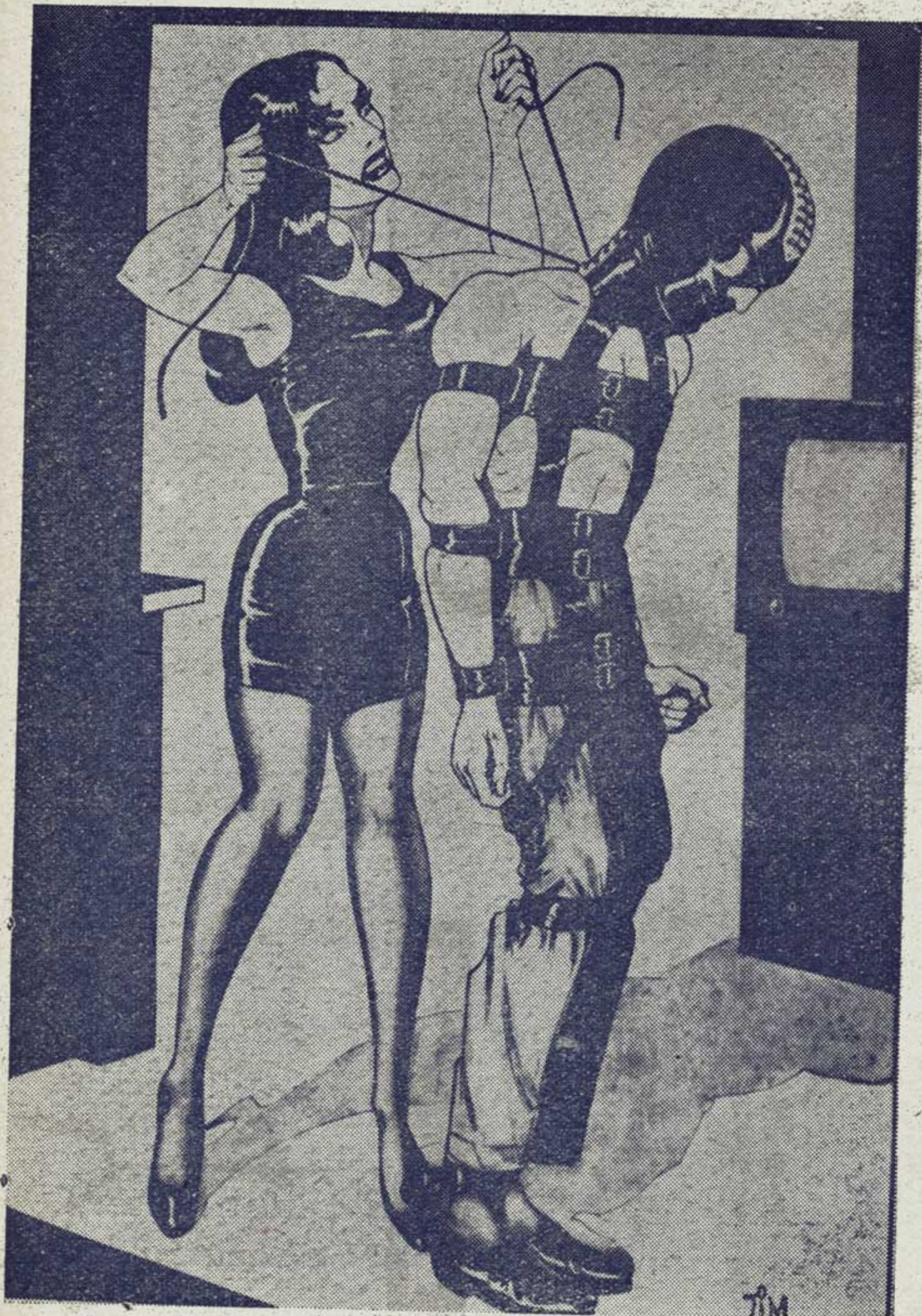
NUTRIX-QT



NUTRIX-QT

② ついに馬にされてしまった男、
「このノロマな馬め！ 部屋を回るのに一週間も
かかるっていうの!? 鞭を当ててやろうか？」

③「頭の部分を全部こうやっておおわれると、とてもいいのよ、ひとりぼっちになったみたいで」



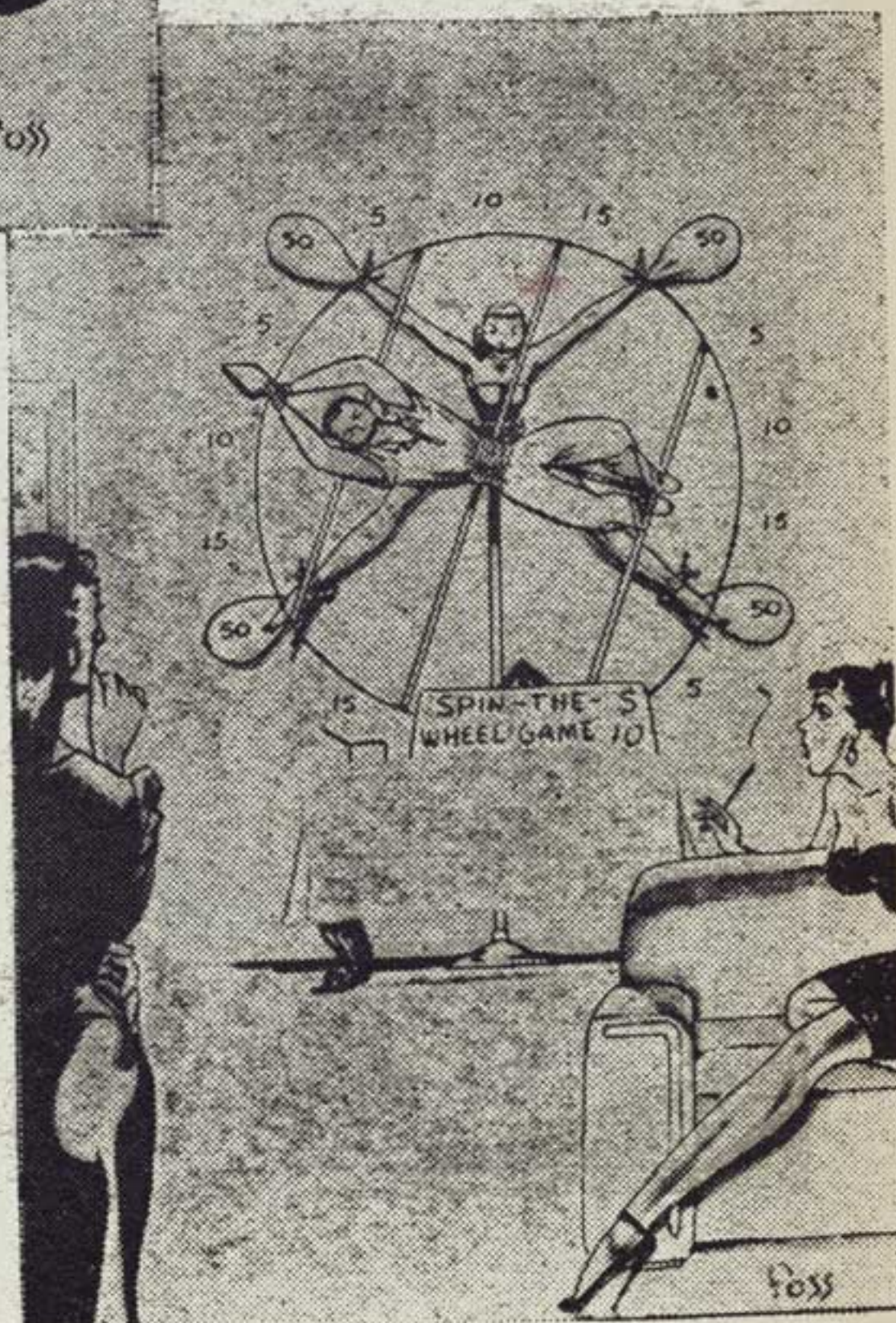


そうして第5話は「祭りの日、縛られて見せ物にされた男の話」——
 ポプと、ガール・フレンドのダイナは、ある日、カントリー・フェアに出かける。そこには、チーター夫人のやっている不思議な遊戯場があった。美しい女の子が、くるくる回る標的にしぼりつけられており、それをまわしながら、羽根のついたピンを投げつけるのだった。

NUTRIX-QT

NUTRIX-QT

④と⑤はいずれも、チーター夫人に見つけられて、その不思議な見せ物にされてしまうポプとダイナを描いている。
 ほかに第2話「男とフランスからきた小間使い」第3話「征服された男の夢」、第4話「女の子にはずかしめられて」がある。



猫

責

め

地

獄

——無気味な黒猫の舌ざわりに、羞恥と悦虐の女体はもたえる——



志乃田 藤 美

乳房にお腕を

「ふっふっふ、萩枝殿、おぬしのそのような姿も、また一興じゃ。どうじゃ、うれしいか。これ、そのような顔をせずとも」

と、ひとりの中年の武士の手が、ふくよかな女のあごにかかった。女の美しい顔が羞恥にゆがむ。

「う、うううう……」

萩枝という中年増の口中には、長じゅばんの袖口が押し込まれていた。

「萩枝殿、いやさ萩枝。そなたをどう料理しようと思つたの勝手、ふっふっふ、思えば、長い歳月をかけたものじゃ。そちが、吉井の妻になつてから五年、わしは辛抱よく待った。今宵の来る日を待っていたのじゃ。も



う、イヤとはいわせぬ、そなたのからだは、吉井から拙者が奪うのじゃ。のう、萩枝、源四郎めを忘れるのじゃ、いや、わしが忘れさせてやる！」

武士は、部厚い唇をなめ回しながら、視線を、萩枝の胸の隆起に移した。女の胸が大きく波打っている。

武士は、下卑た笑いを発しながら、女の衣を左右に押し広げた。

「うッ、ううう……」

萩枝の口中からうめき声がもれた。両手を大黒柱にくぐらわれているだけに、胸を割ることはたやすい。まだ二十七、八歳だろう、女の乳房は、大きくはないが、男のソレによってみがき育ったように、ふっくらとした重量感があった。

「萩枝、この乳房をワシに与えぬ前に、そなたは源四郎めに……」

男の瞳が嫉妬にギラついた。さらに男は、

「玉の肌と自負した源四郎の妻だけある。このキメのこまかいそちの肌を、源四郎の代わりに、この小二郎が愛してやる。萩枝、そなたのその可愛い口から、色よい返事を聞かすがよいぞ。ウッヒッヒヒヒ」

小二郎とみずから名のった武士は、つと、萩枝から身を引いた。萩枝がホッとしたのもつかの間、

「萩枝、そなたの乳房を、源四郎は、こうして愛したのか。うん、それとも、こうしてか。どうじゃ、コレ、返事をしないところをみると……」

小二郎の手には、一個の木の椀が握られ、その椀がすっぽり、萩枝の白球に伏せられていた。武士の手が、器用に上下左右に動かされた。

「ううッ、ううう……」

女は羞恥のうめき声をもらした。眉をさか立ててのけぞった。それを追うように、小二

郎の片手が延びて、赤い木の椀がピタリと吸いついた。奇妙な音をたてて鳴った。

白昼の誘拐

そのころ、三千石の旗本吉井玄次郎の屋敷では、

「殿、それがさっぱり……」

下僕たちが次々と力なくうなだれていた。

「馬鹿者！ おまえたちがボヤボヤしておるから萩枝が何者かに……」

と、座敷内を右往左往しているのは、玄次郎の長子源四郎である。

この日、といっても昼下がりに、

「しばらく帰りませぬゆえ、里にまいって、父上様、母上様に会いとうなりました」

妻の萩枝から言われた源四郎は、

「そう言われれば、この一年というもの、そなたを里に帰さなかった。済まぬ。だが、そなたを愛する、この源四郎の心情を……」

源四郎は、そっと愛妻萩枝を抱き寄せた。

「うれしい……」

萩枝は、源四郎の部厚い胸板に頬ずりして甘えた。

「暮れ六ツには戻りますゆえ」

唇を合わせたのち、萩枝は夫源四郎に愛情

の腫を燃やしなから、はにかんだ。そして、下僕の助造を供につれて、代官町から向島の実家に駕籠を飛ばした。

ところが、その途中のこと、突然、

「お、奥さま……」

悲鳴をあげて、駕籠の垂れを助造がハネ上げた時は、助造は、当て身を食らって、神田浄水の土手をころげ落ちていた。

「あッ、な、なにを、無礼な！」

萩枝が懐剣の紐を解こうと右手を帯に運んだときは、すでに遅かった。

「騒ぐな！」

ピカリ、萩枝のノド元に短刀が当てがわれていた。萩枝の顔から、スーッと血の気が引いていった。

「急ぎな！」

若い遊び人ふうの男が、駕籠かきに合図した。

「エッ」

「ホーッ」

駕籠は、何事もなかったように、神田川を下り、日本橋へと右折した。

白昼の出来ごとであったが、場所が川添いだけに、だれひとりとして気づく者はなかったのだ。……

不遜なくらみ

「あッ、お、お許しを……」

「ウッヒッヒヒ……とうとう、いい声を聞かせてくれたのう、萩枝。だが、このワシを苦しめたそなたは、ワシの愛にこたえるのじゃ。拙者が、そなたをどのように思っていたかを、そなたは知るがよいぞ。源四郎めとちがったワシの愛を、うけるのじゃ。そこで、拙者の女房になるがよい。ヒッヒッヒッヒッ」

残酷でいながら、美しい責め絵図が、ここ、日本橋の呉服商坂田忠兵衛の土蔵内でくひろげられていた。

女は、吉井源四郎の妻萩枝であり、下品な笑い声をあげながら、女の顔に手をかけて悦に入っているのは、柴木小二郎である。

双の乳房に腕責めをうけた萩枝の肌には、くっきりと腕のあとが薄紅色に浮き出していた。萩枝は両眼をとじて無言でいる。

「萩枝、源四郎の誇るそなたの肌に、拙者の愛を刻んでつかわすぞ。ありがたくうけるがよい」

小二郎の頬に残忍な笑いがただよった。「あれッ、な、なにをなさるのです！」

萩枝の紅唇から、哀願の聲がほとばしった。その恐怖の顔前に、ピカリ、無気味な色をみせ小刀が抜かれた。

「あッ！」

萩枝は、思わず声をのんだ。不自由なからだをもみながら、必死にのがれようと身をよじった。

「ふふ、ふッふッふふ、殺しはせぬ。その代わり、二度と源四郎に抱かれぬよう、そなたの黒髪を……」

小二郎は、結いたての島田髷を荒々しくつかむや、ブスリ、根元から切り落とした。

「ひえーっ！」

萩枝は、消え入るような悲鳴を紅唇からあげると、恥じらいに面を伏せた。バサリ、髪がとけ、半裸にむかれた丸い肩に垂れ落ちた。

「そなたの恥じろう姿も美しいが、こうして嗅ぐ髪の香も、また一段と興をそそってくれる。萩枝、忘れるでないぞ。そなたの髪の一部は、この小二郎がしっかり抱いていることを。そちも、さぞ幸福であろう」

小二郎は、まるで生き物のように、油光りした黒髪を鼻に当てると、ヒクヒクと鼻腔を動かした。

そして、甘い髪の香に満喫した彼は、ほおず

りしていたが、やがて、口中に移し、赤子が母親の乳房を吸うように、切り落とした萩枝の黒髪をシャブリながら、みだらな目を細めた。

萩枝の両眼から悲涙が流れ落ちた。

「このような恥ずかしめをうけるのなら、いっそのこと、舌を切って……」唇を噛みしめた。

だが、こうした萩枝の悲しみも、小二郎にとっては、まるでネコにカツオブシを与えたも同様、ジワリ、ジワリといったぶることに、快感を味わっていた。

「萩枝、わしは、吉井家の用人。それだけに、こき使われてきた。とくに、そちの亭主には、犬猫同様にこき使われてきた。その犬がジッと耐えてきたのは、そなたを掌中に入れ、拙者流の愛を仕込み、美しいそなたを夜ごと踊らせたかったからじゃ。その労苦が、今宵やっと実ったのじゃ。ふっふっふ、美しい姿じゃ、ザンバラ髪のそなたものう」

「ごくり、生ツバをのみ込んだ小二郎は、黒髪をふところに入れると、やおら立ち上がった。ビクッ、萩枝は、次にくる小二郎の行動に身を堅くした。」

乳房を噛む猫

「若様、奥様の居所がわかりました」

と、ガラリ障子をあけて、源四郎の部屋に駆け込んだのは、吉井家の中間小平である。

「なに、萩枝の居所をつきとめたとな。して、萩枝のいる場合は？」

源四郎は、小平を見据えて問い正した。

「へえ、日本橋……」

源四郎の瞳がキラリと光った。

「それも、柴木様でして……」

「なに、柴木が……」

「へえ、ご用人様が……」

「うぬ、柴木め……」

源四郎は、憤怒の情を満面に浮かべるや、大刀をむんずとつかみ、

「小平、柴木の隠れ家に案内せえ」

と、歯ぎしりした。

「へ、へえ」

源四郎は、中間小平の道案内で、駕籠を日本橋へと飛ばした。

駕籠にゆられながら、源四郎は「柴木め、斬ってくれる。叩き斬ってやる。だが、連れ去られて、まる二日、いまごろ、萩枝は、柴木に。うぬ、殺しても、あきたらぬ」激怒に

燃えて、まるで芋虫のような駕籠の遅さを感じた。

「駕籠や、もっと早く走るのじゃ！」

源四郎は駕籠かきを叱咤した。

一方、吉井家の用人柴木小二郎は、「萩枝、おっつけ、そなたの愛する源四郎めが見える刻限。ふっふっふ。亭主の前で、猫踊りを見せるのじゃ、そして、このワシの掌中で、妻になるがよいぞ。そのほうが、そなたにとっては、しあわせというものじゃ。どれ、そろそろ源四郎めを迎える準備にとりかかるか」

しどけなく肌をさらした萩枝を見据えて、小二郎は、さらに悪計をめぐらすのだった。物音一つしない離れ屋敷だけに、行灯の灯が無気味な影をつくる。

小二郎は、やがて、一匹の黒猫を抱えて戻ってきた。

「クロ、今夜はご馳走をするぞ。おまえの好きな、女の柔肌をたんと食べるがよいぞ」

小二郎は、まるで人間に向かってしゃべるように、黒猫ののどを撫でて言った。猫はのどを鳴らして答えている。

萩枝は、なにが行なわれるかをいち早く身感じた。それが戦慄となって、

「こ、小二郎、おまえは……」

舌がもつれ、唇がワナワナと震えた。

「ふふふふ。恐ろしいか。震えるがよい。

泣くがよい。そのうちに、このワシが忘れられなくなるのじゃ」

と、小二郎は、萩枝の顔をのぞき込みながらすわった。

「クロ、吸うがよいぞ。きょうの乳房は、また格別な味のはずじゃ。それ」

オス猫は奇妙なうなり声を張りあげた。

「あッ、お、お……」

乳房に爪を立てられた萩枝は、気色の悪さ

からネコを叱咤した。猫は湯文字を足場に、

萩枝の乳首に武者振りついた。

「あッ、や、やめて！」

萩枝は、恐怖と羞恥に五体を硬直させて、

小二郎に哀願した。

「うふふふ。恥ずかしいか。うん、苦しい

か。ひッひッひッひ。クロ、もっとはい上が

れ。それ、すべるなよ」

小二郎は、腰をくね

らせ、必死に不自由な

身で猫を振り落とそう

とする女の仕草に、陶

酔した。

と、その時だ。庭伝いに人の近づく気配がした。

小二郎は、ギョロリ、雨戸に目を向ける

と、「萩枝、とうとうおいでなすったぜ。そ

ちの旦那様が、お迎えじゃ。だが、そうは問

屋はおろさねえ。ま、たんと、愛する男の前

で、このつづきを見せることじゃ。それにし

ても、おまえの亭主も馬鹿な男よ。飛んで灯

に入る夏の虫ってことは、萩枝、源四郎のこ

とだ。フフフ」

小二郎は微動だもしない。だが、目だけ

は、雨戸から離さそうとしなかった。

女の肌をなめる猫

雨戸が静かに開く者がした。次いで足音

が、廊下伝いに離れへと近づいてきた。足音

はふたりである。

サッと障子が開き、

「あッ！」

「奥さま！」

ふたりの声が、同時にほとばしった。

「あなた……」

半裸の姿を恥じらいながら、萩枝は、顔を

そむけて源四郎を呼んだ。

「うぬ、柴木、よくも拙者の妻を……」

源四郎は、怒りと嫉妬から、ハッタと小二

郎をにらみ、大刀に手をかけた。

「ふッふッふ。主人の女房を手籠めにする

のも、また格別。だが、そのまえに、ゆっく

り美肌を拝ませてもらっていたところじゃ。

それ、おぬしの愛妻が猫とたわむれておる。

萩枝殿は、おぬしよりネコがお好きのようじ

ゃ。うはッはッはは」

小二郎は、源四郎の怒りにひきつった顔を

見据えながら、不敵な笑いを発した。

「うぬ、叩き斬ってやる！」

源四郎が拝み打ちに大刀を小二郎の頭上め

がけて韃走らせた時。

畳がハネ返った。

「あッ！」

もんどり打って穴蔵へ

と姿を没した源四郎。

「あなた……」

萩枝が、縄を切ろうと



身をもみながら、叫ぶ。

「ち、畜生！ よくも

奥様と旦那さまを」

中間の小平が、木刀を抜いて小二郎に挑んだ。それより早く、

「くたばれ！」

小二郎の大刀が、小平の胸を切り裂いていた。

「グエッ！」

小平が血に染んでこ

と切れた。

「馬鹿なやつよ」
小二郎は、血刀を懷紙でぬぐいながら、小平を見下ろした。

「柴木、お、おまえは、中間まで殺すとは、鬼だわ、いっそ、わたしも一思いに……」

萩枝は泣き叫んだ。

「ふっふっふ。死なせはせぬ。やっと手に入れた女じゃ、そなたを源四郎から奪い、黒猫同様、生涯、わしは、おまえを飼ひ馴らすのじゃ。それが拙者の望みななのじゃ」



と小二郎は、冷やかな笑いを片頬に浮かべると、柱から垂れている朱綱を引いた。と、また畳がハネ返り、小平の死体は穴蔵へと落ちていった。黒猫が畳の血のりをなめ回している。

萩枝は、あまりの恐ろしさから、つい失神

した。長い時間のように感じた。

萩枝は、不思議な感触に失神からよみがえった。それは、妖しいほどの五体のうずきだった。ちょうど、夫の源四郎が、熟睡の最中に胸をまさぐっているようでもあった。萩枝は、身を反転させ、夫の手をそっと押えようとした。と、その手は……。

「ふっふっふ。萩枝、どうじゃな、クロの愛撫もまんざら悪くはないとみえるの」

ニタリ、下品な笑いを満面にただよわせているのは、夫の源四郎ではなかった。

「あッ」

萩枝の白蠟はくろうのような顔に、恥じらいの朱がのぼった。縛された萩枝のふくらとした乳房に、油が塗りつけられているのだろう、さっきの黒猫が、ペロリペロリ、白球をなめて

いる。ザラザラした舌ざわりだった。

一瞬、トリ肌がたった。が、それは瞬時のことであり、不思議な魅惑が、萩枝の肉体をもだえさせた。

「源四郎、見るがよい。おぬしの妻が踊るネコ踊りを。これが、拙者をコキ使ったおぬしへの返礼じゃ。ふっふっふふ、どうせ、そなたはあの世へゆく身、この世の名残りに、萩枝の白肌を、とくと眺めるがよからう。うはッはッはッははは」

小二郎は、柱から萩枝の裸身を解くと、畳に縛りつけた。それは、文字どおりの大の字だった。湯文字が左右に割れ、痛々しい姿だった。

「うぬ、き、貴様は！」

穴蔵で、源四郎が怒鳴った。

「吠えろ、わめけ。萩枝は、この柴木小二郎が申し受けたわ。ハッハッハッハハ」

小二郎は、狂人のように笑いながら、黒猫を、萩枝の下肢へほうり投げた。

猫は、畳に爪を立てながら、まるで人間の意志を知っているように、ノドを鳴らして萩枝の素足をなめながら、湯文字に徐々に這い込んだ。

「ヒイッ！」

やがて、萩枝の紅唇から鋭い悲鳴がほとばしった。

「ふっふっふっふ。聞くがよい、源四郎。おぬしの妻は、おぬしより、猫が好きらしい。ほれ、あの喜びの音色を」

小二郎が酒杯をあおって穴蔵を見下ろした。萩枝は、恐ろしさから、再度失神した。

「うぬ。殺してやる」

穴蔵で源四郎が大刀をハッシと投げた。

「ぐふッ」

失神した萩枝に覆いかぶさろうとした小二郎は背中を刺され、そのままドサリ、穴蔵へと転落した。黒猫だけが、無気味にのどを鳴らしながら、萩枝の五体をナメ回していた。

ニューフォトのセクシードレス

お待ちかねの新製品発表!

ビキニパンティと対のブラジャー4種、バタフライアミタイツ、コルセット、花ガーター等

(サービスとして1,000円以上お買上げの方に幸運のマスコットハンカチーフ進呈)

(例一) 左写真

No. 4 マンハント型

和服とチャイナ服との良さを取り入れたデザイン。ウェストまである裾割れからパンティがのぞく。

生地…サテン花模様
ナイロンパンティ付

¥ 2,300 100

(例二) 右写真

ビキニ A

グットくるデザイン。前面三角形にカットされたレース付パンティと対のブラジャー。

生地…サテン赤水玉模様

¥ 1,000 60



(30円切手同封、雑誌名記入、申込みあれば直ちに各種ドレス、下着類のカラー写真入りカタログ送呈します)

東京都杉並区大宮前 6-412

ニューフォト社洋品部

夫婦和合の秘器

NEO

ワゴリング



(新案特許出願中)

性に悩む男性に朗報!!

本器を使用すればアナタの悩み即日解消! 専門家も断然推奨す

★勃起不全に対して

本器使用数分内に完全隆起し且つ射精後も萎縮しません。

★短小の方に対して

本ワゴリング使用数分内に局所は驚く程膨大します。

★早漏の方に対して

本ワゴリングを(併用)により絶対に30分以上持続し効果絶大!

空前の反響を呼ぶ!

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響話題を呼ぶ新製品! 本器は(取付けたまま使用)するので効くのは当然! 而も長年月使用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。
アナタの性能を即時10倍にする新製品ワゴリングをスグ御使用下さい。
ハガキで申込次第カタログ無代進呈致します。
▼定価送料共一組11,350円
(個人名で急送します)

短小のポテビル療法!

◎専門医家謝賛!
★画期的構想による最新式短小増大器の発明!
男性器発育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「ラージ増大器」の出現により局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよう。
●定価一組11,450円(荷造、送料サービス)

ラージ真空増大器

手芸品

おみやげ
贈物に...
大好評!

名産 肥後

九州名産品

★好評新発売★

特製品7種1函...850円で急送!

- 性力チョココレート! 普通板チョコと同一で、食べて30分位で性的亢奮を示す! 男女共有効! 六枚入り...六五〇円
- オットセイ丸末 驚異の一夫多妻のオットセイの望みを粉末とせる性力の王者! 一函...千円
- スポンチ式スキン 従来のスキンの外面に微細なるザラザラを付す好評品! 一ダース...三〇〇円

東京都杉並区神戸町128
株式会社 療養の友社
電話(398)4679 替振東京118443
(高田馬場より西武線井荻駅下車 徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車)

彷徨

[新第 連 載]
1 回

虐の女

1

スリッパ一枚にむくと、日ごろかくされている部分は、ぬけるほど白く、柔軟だった。黒くよごれた縄に筋肉がくびれ上がった。「もっと、もっと」彼女は、熱い息を吐き出しながら、畳の上をのたうちまわった……

舞台では「恩讐つばくろ笠」の幕があいている。

第三場「獅子岩の重造の家」だった。

狂言の外題からもわかるように、ありふれたストーリーのやくざ物だ。

それでも、田舎町の観客は、けっこう楽しみ、気を入れて見物している。

「あやめさん、そろそろ出だよ」

私は舞台の上手の袖から、楽屋に合図する。楽屋といっても、舞台とは背中合わせの、ウナギの寝床のような細長い部屋だ。

「はい」

花村あやめが出てくる。一座の娘役である。結綿の髷が、私の鼻さきにおう。

「さ、うしろを向いて、手をまわしな」

私は、縄をつかんで言った。

言われたとおり、あやめは背をくりりと私に向け、両手を帯の上にのせて組む。さあ、縛ってちょうだい、という格好で。

あやめの腕は、肘から手首、指の先まで、まっ白に白粉がぬられている。その手首を交差させ、私は縄で縛りつけた。縄尻を腕から胸もとへぐりとまわし、やや力をこめて締めあげる。縄を軽く食いこませる。三巻きぐらいにして、もとの手首のところでとめる。

「痛い、痛いわ」



吉 枝 三 山 青

え 子 恵 上 田

悦虐の被

あやめは、小声であまえるように抗議し、目だけをチラと私にふりむける。目もとに紅をさしているの、ひどく艶な流し目になるのだ。

暗い舞台裏に、ぼうッと白く浮かぶ厚化粧の顔。白粉と髪油のせめるような香り。私は妖しい感情をおぼえ、あやめのふくよかな頬を軽く指で突く。

あやめは悪戯っぽく首をすくめ、咽喉でククク……と笑う。媚笑、とてもいいたいような笑い方だ。私は一瞬、背後からこの肩を抱きしめたい衝動にかられる。が、それを耐える。いまは仕事からだ。

舞台は進行している。

敵役の市川仙十郎扮する獅子岩の重造親分が、さびのきいた声で、「なんだと、お絹のアマ、土蔵の中でまだ強情を張っていやがるの



か。よし、ここへ曳きだしてこい。おれがひと責め、責めてやる」

と、子分たちにむかってどなっている。

「へい、かしこまりやした、親分」

子分は一礼し、上手へ引っこんでくる。そして、私の手から、あやめを縛った縄尻を受け取り、再び舞台へ戻っていくという段どりであった。

「あれッ、ゆるして、ゆるして！」

黄色い声をあげながら「お絹」は悪親分の前へひきずられていく。私の任務の一つは終わった。あとは、この場の幕を引くだけである。

私はゆっくりと腕を組んで、これから舞台で、くりひろげられる「責め場」を見物するのだ。

三人の荒くれ子分の足もとにひき据えられたお絹は、うしろ手の不自由なからだをくねらせて、しきりに哀願する。

「悪いことは言わねえから、これ以上の痛い目をみねえうちに、ささと親分のいうことをきいちまいなよ」

と、子分たち。

「そればかりは！」

と、なおも身悶えるお絹。

重造親分が、いらいらと長火鉢の前から立ちあがり、

「やい、お絹、おめえはあの旅がらすの伊太郎の帰りを待ってるんだろうが、そうは問屋がおろさねえ。伊太郎のやつはとうの昔におれが叩き斬っちゃったぜ」

と、くしくしげにせせら笑う。

それから重造は、子分の差し出す割れ竹を手にして、お絹の背後に

まわる。びしびしと責めはじめなのだ。

むろん本当に叩くわけではない。竹の先端はこまかく割れてササラになっているから、実際にからだにあてなくとも、振り方でそれらしい音がでる。迫力もでる。

「あれッ、あれえッ」

と、花村あやめは背をのけぞらせ、首をふっての大熱演。腰を浮かし、裾前を乱し、赤い蹴出しから白い脛やら腿までのぞかせるサーピスをすれば、若い男の客も目を輝かせてよろこぼうというもの。

お客は、中年以上が七分、あとの三分が若い層、子供だった。お百姓らしいおばあさんが舞台の熱演にわれを忘れ、

「おお、かわいそうに、あの親分は、なんてまあ、悪いやつなんだろうねえ」

などと大声だすのも、珍しいことではなかった。

やがてこの責め場もクライマックスにさしかかり、悪人どもの暴力に、お絹の運命もあわや、という寸前、座長の花村駒代が扮する二枚目、死んだはずの旅がらす筑波の伊太郎が、さっそうと登場して大剣劇がはじまる。

悪人ばらは、バツバツと斬り倒されてめでたく幕。

どうにも変わりばえのしない結着だが、田舎のお客は七十円の娯楽を堪能し、大満足でお帰りになるのだった。そのお客さま方の背中に「明晩もどうぞ！」と大声で呼びかけるのも、私の役目だった。

2

女剣劇、花村駒代一座。

座員は総勢十六名。旅まわりとしては、けっして小さな組織ではない。

座長の駒代は二十六、七。あるいはもう三十を一つ二つ越していただろう。一応独身ということになっていた。この年齢で一座を率いるだけあって芸達者であり、苦勞人でもあった。

娘形の花村あやめは、駒代の実の妹なのである。姉妹とも生まれついでに芸人根性をもっていて、あわただしい旅から旅への生活を楽しんでいるようであった。

私が、あやめの身内にひそむマゾヒズムに気づいたのは、四月も下旬のある午後、岩手県の泉河という、うす暗い町の小さな食堂の中でかわした会話からであった。

食堂、という古めかしい呼び名がぴたりする、しらじらと埃っぽい店で、私とあやめは堅い木の椅子に腰をおろし、いやに塩からいラーメンの汁をすすっていた。

「ねえ、松平さん」

と、彼女は言った。

「こんどさ、新作ものでさ、きれいな娘が悪人のために、うんと折檻される芝居を書いてよ。あなた、書けるでしょ。いつか書けるって言ったじゃないの。書いてよ。あたしがぎゅうぎゅう責められて、ものすごく迫力のあるやつ」

あやめは箸の先を宙に浮かせ、猫のようにキラキラ光る目つきで、いきなりそんなことを言い出したのだ。

「ふうん。きみ、そんな役、好きなのかい」

私は、ドキリとした思いで聞いた。

「好きっていうんでもないけど、やってみたい気がするわ。縄がこの

へんにぎりぎりくいこんできて、私がひいって悲鳴をあげて、七転八倒するの」

あやめの唇は、ラーメンの汁でねっとり赤く濡れていた。口紅の外まで汁に濡れていて、私は妙にみだらな、刺激的な誘惑を感じた。演し物の娘役を一手にひきうけるだけあって、あやめは目鼻だちがくっきりと整った、女優らしい美人だった。ことに切れ長の目が時代劇向きで、年齢以上の熟したエロチシズムを感じさせた。

しかし、からだつき肉づきは、あきらかに現代女性のものだった。胸も腰も、ぴちぴちと弾力にみちている。楽屋と舞台以外では洋服ばかり着ていて、セーターの胸のこれみよがしの二つの隆起は、彼女とあまり年齢のちがわない私を、いつも圧倒していた。

「書いてみるよ。でも、座長がなんていうかな」

私は、彼女のごきげんをとるようにこたえた。彼女の美しさは、時に私を卑屈にする。

「ねえさんには、あたしからうまく話してみるわよ。駄目よ、ねえ、いくら田舎まわりの芝居でも、これからはスピーディーでさ、ちょっと刺激的なのをやらなくちゃ……」

そう言うとき、あやめはドンブリを両手でささげ、ラーメンの汁をぜんぶ飲み干した。

勘定は、あやめが払ってくれる。私は首をさげて「ありがとう」を表意する。

私がもらう手当てよりも、彼女の給料のほうが、五倍も六倍も多いのだ。といっても、せいぜいこづかい銭でいどで、たいしたことはいのだが。

彼女はいつも私を誘い、安い食い物をごちそうしてくれる。芝居が

はじまるのは、夜六時からだった。昼間、けいこをし、それがすむと自由時間がある。彼女のほうから、私を劇場の外へ誘いだした。

一座の若い俳優の若杉竜太郎が、

「ちえッ、うまくやってやる」

などと、きこえよがしな罵言を、私にぶつける。私がこの一座へはいる前から、竜太郎はあやめの尻を追いまわしているらしかった。

座長の駒代は、あやめと私のそんな交遊に、さしてこうるさい口もはさまなかった。私に格別の信用があったわけではない。妹も年ごろだから、ボーイ・フレンドの一人ぐらいいても仕方がない、といった顔であった。

百戦練磨の役者ときあうより、安全度を高いとみたのかも知れない。女剣劇の座長だけあって、そのへんはふとっ腹のように、私の目にはみえた。

旅ぐらしの一座の中での、そういう男女間の風潮は、致し方のないことでもある。若杉竜太郎などは、座員と同じ旅館に泊まることは三日に一度もなかった。

あとは、いわゆる、ごひいきと一緒に泊まるのだ。地方の町の多情な未亡人や、娘さんたちが、そのごひいきだった。なかには人妻もいる。彼女たちから頂戴するご祝儀が、男優たちにとっては最大の収入源なのである。

旅ゆくさきさきで、より多く女を「ひっかける」技術をもった者が、一面では腕のいい役者ということになっていた。

3

私は、あやめにすすめられるままに、いわゆる責め場のたっぷりある脚本を書いて、おそろおそろ座長の膝の前に差しだした。あやめとのデートも断わって書いた六十枚ばかりのものだ。

それから五日ほどたって昼飯後の一服の時間に、私は座長に呼ばれた。

「このあいだの、あんたが書いたアレ、読んだよ。おもしろかった。セリフ堅いけど、なおせばよくなる。そのうちにけいこして、舞台にのせてみようよ」

ガラガラ声で乱暴な言葉使だったが、座長の顔は柔和で、デリケートな女の神経が腫の色のなかにただよっていた。

私はホッとした。ひどくうれしかった。自分の書いたものに実用の値打ちがある、ということは感激だった。

私は大学の演劇部をでたばかりだったが、脚本を書くために、この一座へはいったわけではない。ここには座付作者とか、文芸部とかいったようなものは、不必要だった。



上演台本すらないのだ。俗に口ダテ^{くちだて}といって、座長もしくは一座の老練な俳優が、口頭でストーリーを説明し、登場人物を座員に割りふり、セリフの受け渡しや、きっかけを教えて舞台にのせてしまう。毎日替わりの演し物^{あそびもの}は、それでなければ消化しきれない。

私は裏方^{うらかた}の雑役係として、この一座に雇われた男だった。伴奏のレコードをまわしたり、幕を引いたり、太鼓を叩いたり、安っぽいゼラチン紙の照明を舞台にあてたり、小道具の刀に銀紙をはったり、つぎの興行地への荷造り梱包^{こんぱう}をしたりするのが仕事だった。



だから私は、書いた脚本を、おそろおそろ座長に提出したのである。座長はこころよく採りあげてくれた。

あやめの進言もあったのだろう。あやめは、自分から希望したクライマックスの責め場に、大熱演した。あまりにもオーバーな苦悶の演技に、私は苦笑し、頭をかかえた。

しかし私は、芝居としての統一はべつとして、その場における彼女の妖しい美しさに魅了された。

彼女は、うしろにまわした自分の手首を、芝居用語でいう化粧縄でなく、本当に縛ってくれといった。駄々をこねるような口調だった。

そのけいこを見ていて、私の胸は熱く興奮した。彼女の心も、あきらかにマゾヒズムを感受し得る素質があったのだ。

縛られるとき、彼女は目をとじた。唇をややひらき、小さな舌をみせて、かすかにあえいだ。女体の深奥部からの体臭が、口からにおうようだった。

縄が身に巻きつき、力がこめられるときには、とじた両^{りょう}瞼^{まぶた}の皮膚が、ヒクヒクとけいれんした。

ただし、彼女のからだに縄をかけるのは、私ではない。私には残念ながら、その光榮はなかった。

「もっときつく、きつく縛ってよ。なまぬるいなあ。そんなんじや、感じがでやしない」

彼女は、じれったがった。

しかし、悪人役の俳優たちに、彼女の真意がわからうはずはなかった。

「本当に縛ったら、ほどくとき面倒だよ」

男優たちのほとんどは、好色家ではあったが、この甘美なる異常の

愉悦を理解する複雑性をもたなかった。

あやめにしても、おそらくサドとかマゾとかいう言葉は知らず、確たる自覚もないのである。ただ、その本能だけを、彼女は自分の内部の妖しい血のめざめにそそのかされ、無意識のうちに要求しているのだ。

もし、あやめにマゾヒズムなる言葉と、その意味と、それに付随する知識があったらば、これほど大胆に、無邪気に「もっと強く縛ってエ」などと発し得なかったであろう。

言いたくとも、言えないはずなのだ。

はっきりと自覚し、意識している者は、ほとんど、その性癖を周囲の人々から隠蔽^{いんぺい}する。極端に羞恥する。あばかれることを、怯^{おそ}れる。

「変態」とよばれるのを恐怖するのだ。たとえば、私のように――。しかし、あやめは天真^{てんしん}らんまんだった。マゾヒストとしては珍^{めづ}らしい陽性だった。私はそんな彼女を羨望^{せんぼう}し、愛着した。

4

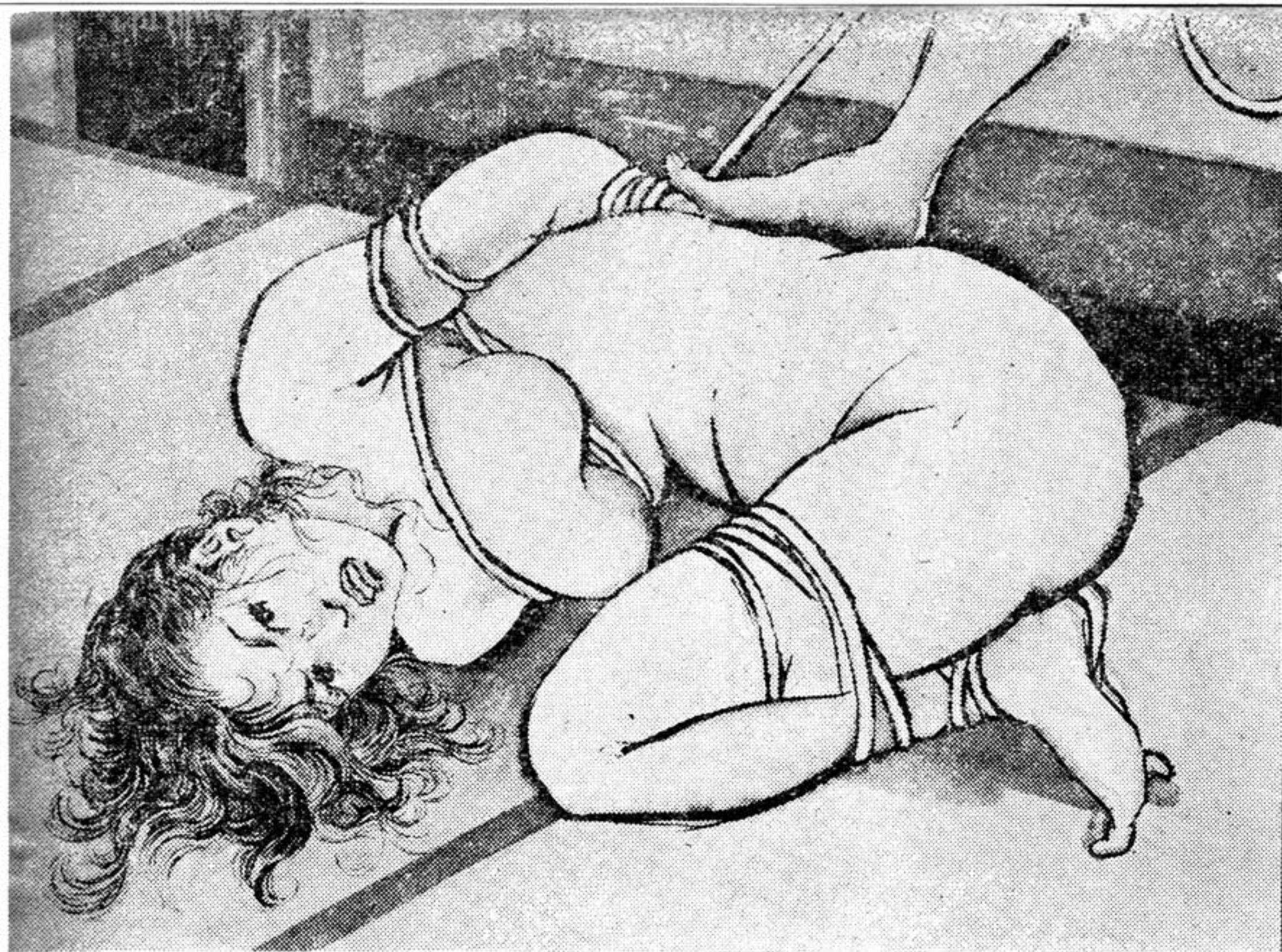
花村駒代一座が、秋田県南部のある小都市の寄席^{よせ}で、十日ばかりの興行を打ったときである。その初日^{しよにち}だった。

舞台裏の片隅で、針と糸を持って三度笠の修理をしている私へ、そっと背後からあやめが近づき、ささやいた。

「今夜、ねえさんはね、舞台閉^はねてから、山徳^{やまどく}さんの家へ招^まばれていの。宿屋へは帰ってこないのよ」

あやめの言葉には、ただならぬ誘惑が秘められていた。

山徳というのは、この地方での有力な興行師である。座長はご機嫌



伺いに一度は顔をださねばならない。親分へ酌一つもサービスせねばならないし、女座長の因果として、時にはそれ以上の求めにも応じなければならぬ場合もある。

「ねえさんの帰りは、どうせ明日のひるすぎよ。チャンスだわ」

あやめは、瞳の奥をきらめかせていった。

座長は、私たちの交際によけいな口だしはしなかったが、さすがに夜寝るときだけは、妹と自分の布団をかならず並べた。

「そりゃあ……チャンスだろうけど……」

私は口ごもった。私は座長が好きになっていた。彼女の人柄に、畏敬のような感情すら抱いていた。

あやめの誘惑に乗ずることは、座長を裏切ることになりはしないか。私は迷った。

しかし、私は結局、あやめを拒否することはできなかった。胸ぐらをとられて、引きずりまわされるような魅惑が、あやめにはあった。秘密の約束をかわした直後から、私の心は、数時間後の妖しい期待にふるえ、常軌を逸しがちであった。

その夜、舞台を終えてから、あやめと私は旅館の一室にいた。

一座が泊まるのは、いつも商人宿といったような安旅館で、一同雑魚寝に近い寝方をする。私が眠る場所などは、もっとも隅のほうに押しやられ、廊下に布団を敷くことも、まれではない。しかし、その夜の私とあやめは、座員たちとはべつの、一級上の旅館を選んだ。

十一時をすぎて、地方の小都市ではもう深夜だった。私の心は、この冒険に緊張していた。座長に対して、申しわけないという気もちが、またよみがえった。あやめがあきれ、

「あんた、東京の人間のくせに、ずいぶん古くさいのね」

といった。そして、スカートの足を大胆に投げだした。私は思わず、たじろいだ。

一座の人々の目から隔絶した部屋に、いま二人だけにいるという現実感が、ひしひしと身にせまった。

あやめは、ハンドバッグの中に、一束の縄を用意していた。使い馴れた小道具の縄である。汚れ、黒ずんでいた。新鮮な生き物のように、私の目の前に置かれた。

「ねえ、縛ってよ」

その一言に、私は骨の髄まで疼痛をおぼえる。あやめの媚態は、私を急激に悩乱の地獄へ突き落とす。

私は縄をつかんだ。落ちついて、ゆっくりと、味わいながら、と自分へいきかせる。が、私の手は臆病者のようにふるえていた。

心臓の血が煮つまり、痛いほどのはげしさで脈うっていた。

これまで私は、実行を夢みる、いわば空想的サディストにすぎなかったのだ。が、この瞬間から、その空想が現実となって満たされる。私は、はじめて女をいま縛るのだ。

私は心の底のふるえを押えるために、歯をくいしばりながら、あやめの手首を背中にねじあげ、縛りはじめた。

哀れなる異常の血よ。おんなの肉体をいましめるといふ、ただそれだけの単純な行為を夢みて、なにゆえ、過去に飢餓の苦悩を秘めてこねばならなかったのか。

そしていま、女の腕に縄をかけるときの、この戦慄に似に歓喜は、なにゆえのものなのか。おのれの心身の、どここのゆがみから湧きあがってくる欲望なのか。

「正常」の人間には、絶対にわからない、この痛烈な陶醉。



私は夢中になって縄をしごき、あやめをうしろ手に縛りあげる。重ねた手首を一つにくくり、肩のあたりまで引き締め、さらに腕から胸へ、ぎりぎりぎりとして縄をまわす。

「アッ、アッ」

という声が、あやめの咽喉から洩れはじめる。縄目が肌の中に噛みこんでいく苦痛。その苦痛の裏側にある陶醉感のうめきなのだ。

「舞台で縛られるのは、やっぱり駄目よ。けっきょく、お芝居だから気分がはいらない。だからね、あたし、一度こうして、こうしてあなたに本当に縛ってもらいたかったのよ」

きれぎれにあえぎながら、あやめは顔面を紅潮させていく。

この貴重なるマゾヒスト。白いうなじに、かぶりつきたいほどの激情が突きあがる。

私は自分の異常な性癖を、少年時から自覚していたが、理性をもって抑制に努めた。その抑制が、あやめというマゾヒストに偶然ぶつかったことによって、もろくも殻を破られ、ほとばしるような開花をしたのである。この女を知り、この女に愛されたことは、私にとって幸福なのか、それとも不幸なのだろうか。

5

一晩中、私たちは眠らなかった。

飢えたもの同士は、火のようになった。加虐と被虐の相違はあっても、たがいに相手をむさぼりつくした。

私たちは夢中で愛を誓いあった。裸の心と心をさらけだすこのプレイにふさわしい、強い愛を。

あやめをスリップ一枚にむく。時代劇の娘役の素肌は、息をのむほど新鮮にみえた。私は憑かれたように、スリップからむきでた四肢を縛りあげる。日ごろかくされている部分は、ぬけるほど白く、柔軟だった。涙流に泳ぐ魚の腹の白さを思わせた。

その柔肌と、黒く汚れた縄は、残酷な対照だった。筋肉がくびれあがった。いくら強く締めあげても、あやめは「もっと、もっと！」とうめいた。口を半びらきにして、熱い息を吐きだしながら、畳の上をのたうちまわる。

「痛い、痛いよー！」と苦痛の訴えをあげながらも、縄をゆるめてくれとはいわない。

悦虐とは、なんといううまい言葉なのか。虐げられるよろこび。この強烈な歓喜に代わるものが、ほかにあるだろうか。

いま流れゆく時間に、すべての理性、背徳感私から消えた。めくるめく激情の波に身を投じた。

「これでもか、これでもか！」

私は、余った縄尻であやめの足首を縛り、その縄を背中の手首の結び目につなげて引きしぼる。両足を膝から折り曲げて、腰の上へ縛りあげる。あやめは、畳の上うつ伏せになり、亀に似た格好になる。

あえぎが高潮する。四肢はぎゅちりと固定され、縄目には寸分のゆるぎもない。肩のあたりまで血が締めあげられて赤くなる。

私は髪を毛をつかみ、その女体の亀を仰むけにひっくりかえした。手首足首が下敷きになり、「ひいッ」という悲鳴をあげる。

乳房が上をむいた。ふくらみの上下にかかった縄目が、肌にくいこんで埋もれている。うす紅色の乳頭がかたくとがる。

スリップが膝からすべった。腿の筋肉のふるえがさらけだされる。

そのきめこまやかな白さに、私の口のなかは渴いた。あやめは両眼を細く吊りあげ、目尻から涙をこぼしていた。愉悦の涙だということ、すぐにわかった。くいしばった唇のあいだから「くくくくく！」と、しゃくりあげて泣く。

それを見ると私も感きわまり、声をあげて突っ伏したくなる。

「好きよ、好きよあんた」

「ぼくもだ！」

この旅まわりの無知な女優が、この世で一番愛しい、尊いもののように思えて、私はあやめの肩に狂おしく噛みつくのだった。

6

翌朝、私には重い鉛色の疲労感があった。

あやめも、死んだようになって寝ている。はだけた胸からは、汗がにびにびと出ている。口紅の色がきたならしく剥がれている。私はかすかな嘔吐感をもよおした。私の心には、早くも後悔がおおいかぶさっていた。

——おれは、墮落した！

愚かにも、不遜にも、私はそう思った。

サディズムの行為のなかには、罪悪感がつきまとう。

縄——縛る——罪人、という連想からか。相手を苦しめ、虐げると

いう観念からくる反道徳性からか。

サディストは、この罪悪感に苦しむ。

——おれは、反道徳な悦楽にふけた！

私は、愚かにも懊悩した。私は若かったのだ。そのときの私は、まだ青くさい理想主義の幻影からのがれることができなかったのだ。

私は、私の隣に眠っているあやめの寝顔を、白粉の剥けた娼婦のよう嫌悪した。それ以上に、自分自身を嫌悪した。黒い縄が、とぐろを巻いてあやめの頭上にあった。

その後、二、三日間、私は不潔なものを避けるように、あやめを避けた。顔を合わせないわけにはいかなかったが、視線を避けた。座長の目も、まともに見ることができなかった。

しかし、あやめのほうはもととも陽性だった。一夜の疲労が単純に回復すると、あとはケロリとしている。無知、無反省からくる陽性といえよう。いや、それも私の不逞な言葉で、あやめの明朗さこそ、人間性本来の姿なのかも知れない。

懊悩する原因が、どこに存在しよう。あやめは楽しみ、満足したのだ。そして翌日から、さらに快活に、芸に励んでいるのだ。それだけのことなのだ。

「あたしの行為の、どこに反社会的なものがあるの。だれに迷惑をかけたというの」

そんな昂然とした主張をもつ人間のように、彼女は一片の暗さもみせない。彼女の抱く罪悪感といえば、姉にかくれての行動、そのことだけなのだ。

彼女は「変態」の幻影に脅えている私に、さらにその後も誘惑の手をさしのべる。白くなやましい手を。

私は抵抗しつつも、その誘惑に負ける。このとき、私は奇妙にもマゾヒスティックな疼きをおぼえるのだ。逆に、私を屈伏させたあやめは、加虐者の微笑を浮かべる。この倒錯心理の妙は、美酒の味覚に似て私を酔わせるのだ。そして、この性癖の業の深さは、後悔も懊悩も決意も踏みこみ、私をひきずりまわす。

私は座長の目を盗んでは、あやめを縛った。そして、めくるめく歓喜の渦の中に溺れこんでいった。

「すてきだわ、松平さん！」

恍惚と目を細め、あやめはあえぎはじめる。ひしひしとうしろ手にいましめられ、肌を噛む縄の刺激を味わいながら……。

この不可思議な性情。

この甘美の後には、にがい後悔の訪れることを知りながら、私はあやめの興奮に歩みをそろえる。この瞬間、まぎれもなく私はあやめを愛している。

「痛くないか、あやめ。苦しかったら、すぐゆるめるよ」

やさしく、しかも力をこめて縄を締めあげる。腕と肩の筋肉がくびれあがる。

「松平さん、あなた、大学をでているのに、どうしてうちの一座なんかにはいったの？」

徐々に上昇する情感のさなかに、あやめは問いかける。思わぬ逆襲に、私はどぎまぎする。もっともこたえにくい質問だった。

「大学出が、女剣劇の裏方うらかたをやっているわけではないという法律はないだろう」

私は笑ってごまかす。

私の心は、私自身にもとらえがたい。

学校をでても、私はサラリーマンになることを嫌った。その職業の味気なさ、みじめさは、アルバイト生活で如実に体験した。また、商人になる素質は、ゼロだった。右から左へ品物を動かして利益をとるということが、どうも不当に思えてならない。

芸術をこころざすほどの才能もなかった。

同級生の中に、将来一流の芸術家を嘱望しよくぼうされている才知ゆたかな男が多かった。私は、自分と彼らを比較し、劣等感にさいなまれ、みずからの志望を放棄した。父も母もいるが、私には彼らを扶養する義務はなかった。同時に、学校を出てしまった以上、私は私の腕で、これから先を食わねばならない。

私は仕方なく、ある二流出版社の入社試験を受けた。が、落第した。もと全学連の活動家だったことが、彼らの忌避に触れたのだ。

私にはけっきょく、旅まわりの女剣劇の水が、性に合ったのだ。

卒業してから半年後のある日、偶然に目に触れた地方紙の三行案内欄で、私は花村駒代一座の募集広告を読んだ。私はすぐ汽車にのり、応募した。合格した。私は空を仰ぎ「ざまをみる！」とさげんで哄笑した。自嘲と、わずかに自棄があった。

私はこうして、あやめという希少価値の女を知ることができた。はげしい蛇行デモを行なった夜も、試験をひかえた勉強の夜も、金持ちの馬鹿息子に英語を教えていた夜も、過去のすべての夜、私は常に飢えていた。

苦しい夢にもだえつづけてきた。時には布団の上に一人のたうち、七転八倒もした。

それがいま満たされている。夢でなく、満たされている。無理な空想で身を汚す必要もないのだ。

私の手は縄を握り、生きた女のやわらかい腕を、こんなにもはげしく、むごたらしく背中に縛りあげている。

次第に熱い息を吐きだし、縛られた裸身を蛇のようにくねらせる女。まぎれもない被虐の女。いとしなあやめ。

私に後悔はない。そうだ、後悔はないはずなのだ。

(つづく)

読者サロン



▼美少年はいないか

現在、私はギンザで小さな洋装店を経営している二十九歳の独身男です。身長1メートル68センチ、体重56キロの、多少自信のある体格です。商売がら、客筋に女性が多く、その方面では恵まれた環境にありますが、正直のところ、女性に対しては、恋愛も、セックスも感じません。したがって、異性との交際は現在までまったくありません。

しかし、私より年少の男性が美少年とは、すでに三十九人の相手とホモの恋愛交渉をもっております。私のほうが積極的で、その愛人とは多く、相互Onanie Fellatioを行ないました。しかし、最近ではセミ・プロが多く、ひょっとすると金銭目当てのガ

ツチリ型が目立って来ました。新鮮な美少年はどうもないようです。幸い「風奇」誌上に私と同じように、日夜悩むかたもおられることと存じます。お友だちになってくださいませんか。(東京・譲治)

▼格調のある写真を

昨日『画報風俗奇譚』四月臨時増刊号を入手しました。いつもながらの緊縛フォトにカンゲキしました。村上ユキ・西牧えり子二人のフォトは、とくに毎号興味深くみております。今回の庄巻は、なんといっても晴雨翁の追悼号に載った責め写真です。若き日の先生の妊婦吊りは凄惨そのものでした。そのあと墓地の悦虚図においてもしかり。なんとなく古めかしい中に

も、格調あるフニイキには、敬服します。

そこで貴誌にのぞみたいことは、もっと背景やモデルの衣装に注意してください。ただスマートフォンを追うだけでは、すぐあきてしまいます。きたならしさも必要でしょう。単なるヌード縛りでは満足しません。

(郡山・山道)

▼「K氏自虐帳」補遺

三月号拙稿「K氏自虐帳」は編集部のご好意で活字になったが、まだあとに、肌にあつを生ずるような話があるが、長くなるので打ちきった。あの一編に省略してある箇所をここに付記したい。

K氏の書いた文中——略されてあるのは、お梅、お銀、お千代は雨中、裸、赤湯文字一つで男を責める。矢場女たちはお千代が連れて来て、縁側の軒下から(雨がかかるので)見物させる。お銀が男の六尺をムシって「これも責めの道具」というのはあとで、畳二枚ぐらいの広さで厚い板台の上へ男を上向きに縛りつけて、その台の表には黒いウルシが塗ってある。その上

で淫虐な責めをする。男は狂うような羞恥で、お銀が六尺の端をつまんで目の前に見せるのを男は、股間の異常な隆起をかくそうと「六尺を……六尺を」と必死に求めるが、お銀はますます責める。K氏も天井から六尺を下げてその下で実演する。

火鉢の焼け鉄棒は、お梅が男の尻へ焼きを入れるためである。最後にお梅たちが男の隆起している物の根もとに二本のヒモを巻きつけて、それを左右に台の端へくくりつけて、矢場女四、五人に下駄のまま蹴ったり踏んだりさせる。淫虐責めの台の黒塗りが何のためか、最後に証明される。

三月号は禪党の待望のプレイはなく、女性ばかりでさびしかった。

他誌をダンゼンはなして毎月前進する本誌こそ、大衆的の行き方である。他誌のようなひとりよがりのコムツカシイ記事もなく、編集氏も同好の友も文通し合って、本誌発展のため努力しよう。同好の諸氏も何かおもしろい話をきかせてほしい。できれば書信も直接交換したい。

(東京・百田生)

▼旅芝居を見て

このあたりは一年に二回ほどドサ回りの芝居が、鹿島神社の境内にかかりますが、二月前にやって来た「市川春之助一座」の演し物のうち、これはというサディスチックな場面があり、思いがけなくその凄艶さにたんのうしました。演しものは現在流行の「潮来笠」というマタタビ物で、筋はごくありふれた悪親分斬りです。第一場で、貸し金のかたに連れて来たおみつという娘を、よってたかつてなぶりものにする。土蔵の中では、両手を柱にくくり、みだらな目つきの自分がふたりで青竹でおみつをしごく。言うことをきかないおみつにますますいきりたつ親分。みかねた子分のひとり、が同情して、その夜おみつを逃がす。真夜中のインパ沼のほとり、追っ手をさけたおみつは、小さな地蔵堂の前でとうとうくれている。まもなく子分たちが追いついて、おみつをさがす。

第二場は、その殺し場だ。帯をほどかれ、半裸のおみつを相手に白刃をふるう。死んだと思ったおみつにとどめを刺すと、

またヨロヨロと立ち上がる。その気持の悪さは境内の小屋がけとあっていっそう効果的だ。そこへ通りがかった若いヤクザ者実はおみつの兄というわけで、仇討ちのなぐり込みとなる。

私がこの芝居で感心したのは殺されたおみつに扮した旅役者だ。うつろな目を見開いて立ち上がるすざましさは、どうしてドサ回りなどとバカにしたもの

ではない。来年か、今年の秋にふたたびこの旅芝居のやってくるのがたのしみだ。

(栃木・那須)

▼強烈なサド小説を

「風俗奇譚」創刊のころから読んでいますが、最近の貴誌はマゾ傾向の作品ばかりで、サドが少なく、またあってもサドの中にマゾが多分にはいつているため興味を半減させられます。もっと、他誌に見られない強烈なサド小説を希望します。

(東京・山中)

▼気のついたこと

さらに充実を願うがゆえに、貴誌に苦情やらお願いやらアイディアの一端やらを取りまぜ、ごっちゃの五目の文、ご笑覧に供する次第。

一、どの写真を見ても全裸パンティー、バタフライの色気のなさの多いこと、どうしても半分は和服趣味の切なる願いをかなえて、長じゅばん、腰巻き姿、現代風俗であ

っても和風のものを、乱れ姿の色気を、また時には、西牧えり子さんあたりに島田のカツラでもしてもらって、時代劇風の間面を見せてもらいたいもの。

二、それにどうして猿ぐつわをはめないのでしょうか。それも色消しの口割り手ぬぐいで頬のゆがむやつより、オーソドックスに、豆しぼりや松葉散らしの手ぬぐいで猿ぐつわを、必ずしてくださらないと、どんな美しい姿も魅力半減。

三、もう一つやりきれないのは、猿ぐつわをはめられていないせいか、どのモデルものんびりとした顔をしているのは困る。無表情の多く見受けまます。モデル嬢各位、大変でしょうが、もう少しお芝居気を出してくださいませんか、恥ずかしさに、恐ろしさに、苦しさに、……表情を生かしてほしいのです。

四、前号の晴雨の責め写真、これこそ絶好のものです。ああしたものを参考に、貴誌のグラビアをうめてください。

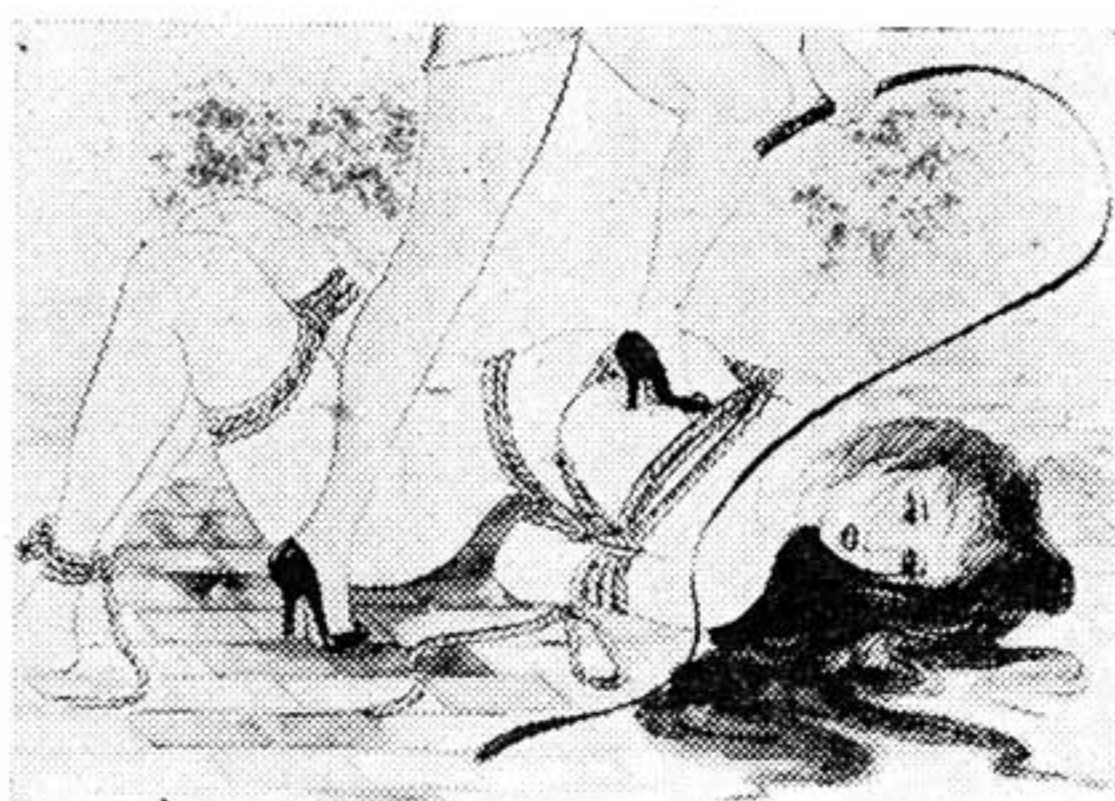
(博多・太郎)

▼連続フォトの注文

飯場のおきて——土方人夫の飯

サド・マゾふたり

(東京) 野本勝治



場を背景にした責めで、丸太小屋の殺風景な部屋の中央で梁から吊られた六尺褌一本の男。

ハダカ電球の下で汗びっしょりになった男にムチがとび、入れ墨も毒々しくニッカー・ズボンの胸毛のある飯場のカントクがみずからムチをふるい、もうふたりの責める男はいずれもサラシの腹巻きに六尺褌一本の素っ裸、まわりをかこんだ土方たちは、六尺褌、越中褌、もっこ褌などさまざまな姿。

責める男はかわるがわるにムチをふるい、タバコの火を股や尻におしつけ、もたえる男を心地よげに眺める。

もがくたびにゆるんでゆく六尺褌、やがてほどけて足元におちる、全裸になった男めがけて責めは激しさを増し、男根責めがはじまってゆく。こんな責めを写真で、もしむずかしければ絵をふんだんに入れて、お願いしたい。

(横浜・牧山)

▼芦立氏と児玉氏

「風奇」四月号を本日手にして思わずあっと息をのみました。グラビア写真を見たからです。モデル児玉氏のみごとな品のあ

る体格による大胆な褌縛りの姿に、全く魅惑されてしばらくはわれを忘れたようになっていた私でした。小生はときどき「K誌」も買ってよんでいるのですが、「K誌」ではまったく満たされない男性ヌード(褌姿)の責め写真や、絵画への欲望を完全に満たしてくれる本誌へ、かぎりなく感激と感謝の念を押えきれず、まず筆をとりました。今後ますます、この種のことを願ってやみません。

今日は、刑罰特集号でしたが、日本古来の記事は芦立氏の麗筆だけで、絵画も一つ二つで、少しさびしかったように思います。さかさ吊り、エビ責め、駿河問い、木馬責め、石抱きなどの絵を、おりあるたびに掲載されて(とくに男性ヌード)、われわれ本誌の愛読者をよろこばせてください。唯一の男責めの作者芦立氏のご健在をお祈りすると同時に、まれにみる好タイプのモデル児玉氏のご活躍を期待します。

(大阪・竹山)

▼マゾの女性へ

若さのゆえに多くの可能性と夢を内蔵する「風俗奇譚」がマ

ンネリにおちいったアブの世界に、斬新の気を送り込んで下さい。小生、今年三十歳になりましたが、たいくつきわまりない人生に生きていくという感覚と、息吹きを与えてくれる強烈な刺激を求めております。

マゾ傾向のご婦人、または「風奇」愛好ご夫婦とのご交際を希望しております。

(大阪市東淀川区東三国町一ノ一二二、公住一九ノ三七・田中誠)

▼女王さまを求む

最近「風奇」を読んで思うことは、私がマゾだということですね。それも、女王さまに仕える献身的なドレイです。ムチにうたれるくらいは多少がまんします。女王さまの考えておられることなら、殺されないかぎりお仕えしたいと思えます。まだ学生ですが、五尺五寸、十五貫、岡田英次ばりのマスクをしています。だれか私の女王さまになってください。

ノイローゼ 神経質 赤面恐怖症 性格異常 欲求不満 知能の遅れた方 将来に対する不安 睡眠障害等に悩む方は詳しくお知らせください。ご相談に応じます。

遙雲荘

相模原市橋本四九六
電話 三三(相模原)ヤ三三四
外来、電話は水土に限る

▼私のアイデア

(東京・青山Q)

① 荒れ小屋で、ワラむしろの上にうしろ手縛り、長じゅばん一枚で引きすえられた女、無理に脱がされたか、着物が裏を見せ、帯がほどけて……。目の前に突っ立った短刀。

② つきつけられたローソクの灯と男の腕、パツと顔をそむけるさるぐつわの女、ひっくりかえる貧乏徳利。

③ 横倒しにされながら逃げようと男が女、膝が大きく割れ(男の足が長じゅばんの裾を



ムチ打ち (長野) 小沢 滋人



水車責め (長野) 小沢 滋人

ふんでいる) 腰巻きが乱れて白い内もも。

④ 大写真でゆきましよう、いやがる女のうしろから、ニュッとのびた男の手が、長いじゅばんのえりをはだけて、あるいは片肌脱がされるか、えりの間にさし込まれているか、乳房にふれる暗示……さらに片手は前に回って腰巻きの一方をはねている、(しかしその片足は立て膝で逃げようとしての姿)つまり、うしろからグッと抱きすくめられて、いやがっている女は身もがいて、救いを求める声は、あわれさるぐつわにふさがれて……といったところ、まさに犯されん

とするクライマックス。

⑤ すっかり上半身裸にむかれ、腰巻きも乱れに乱れ、さらに両足は大きく開かれ、棒しぱりにされている、ガククリと絶望の目がうるんで……そうした姿を見下ろしている。

(福井・芝利吉)

▼夏川絹子さんへお答え

高圧浣腸とは、イリガツールというガラスびんの中から、ゴム管を通じて石けん液を腸内に注入する方法で、液は直腸・S字腸・下行結腸・横行結腸を通じて上行結腸にまで達します。くわしく説明と指導をしますから、年齢・性別・氏名・住所を

文献資料刊行会気付、私あてに連絡してください。

注入する圧力は、年齢・性別・座高・下腹部形態により調整するのが最良の方法です。

(座土マゾ男)

▼縛られた指の工夫

三月号の村上ユキさんの「とらわれの艶姿」椅子の上の緊縛「はすばらしかったが、前者はうしろ手が着物にかくれているのが残念でした。後者は右ページのほうが表情がよかった。」と「とらわれの艶姿」がもっと肉体がすきとおって見えるうす衣を着て、手首も見えたら効果的でした。

それから、どのモデルも縛られた手を握っています、これは開いたり、指先をちょっと工夫したらいかがでしょう。

次号にはモデル嬢が縛られたときの感想をのせていただければと存じます。

私はまだ女を縛った経験がないので、縛られる立場のモデル嬢の気持ちを知りたいと思っています。

(東京調布・仲井)

▼浣腸フォトのアイディア

浣腸ものの緊縛フォトを要望する声が多いので、二、三そのアイディアを記してみました。

① 浣腸用具および付属品を配する。グリセリン、ガラス製浣腸器、ワセリン、グリセリン壺、軽便用浣腸器などを膿盆(のうぼん)にのせて防水布(できるかぎりゴム布)の上におく。便器、オムツなどを配する。

② 施術者が準備しているポイズ、先端に指を当て、円筒を押すようにして(液を吸入して凝視して)いるポーズ。

③ 浣腸器を上に向けて液を押し出しているポーズ。

④ モデルを挙足仰臥位にして押入せんとしているポーズ。

⑤ 圧迫ポーズ。

⑥ 便器をあてるポーズ。

着衣であること、モデルは西牧えり子嬢が最適任で、セーラー服およびスリッパまたはゆかた姿であること。(岐阜・荒井)

▼写真ポーズへの注文

かねがね「風奇」を買いたいと思っていたが、思いきって買い求め、一気によみふけり

ました。そしてショッキングな記事になんどもエレクトをおさえたくらいです。

しかし、なんといっても、男性ヌードの写真が最高です。おもしろいことに、数が少なく、モデルさんもひとりだけなので、物足りないと思います。

投書欄をみると、全裸のものを希望する方も多いようですが、私もそうです。ハイティーンの少年をモデルにしてはとしまいが、むずかしいでしょう。

また、ポーズも、襦ばかりでなく、サポーター、いちじくの葉、バレーのタイツ（白いものがよく、はっきりとした形が出ます）普通のブリーフやキャラコのパンツも、うすいものは使えると思いますし、前面をとるとき襦やパンツの下でPをエレクトさせるのもおもしろいと思います。

キャラコのパンツも水をかけてびったりくっついたところなどはすてきです。

（和歌山・野上）

▼浣腸特集を！

四月号拝見いたしました。相

変わらず西牧さんの美しさに心がひかれます。先月号は私のつたない投書をサロンに発表していただきましてありがとうございます。ただ残念なことには編集部の解答が出ていませんでした。

四月号こそ、胸に来る浣腸小説をと期待しておりましたところ、鞭魔ロベールとの文字にさっそく買い求めましたが、かんじんの浣腸の部分はほんの申しわけ程度なのでがっかりしました。

マゾ・女装・ホモなどの各部分があるのに、浣腸の部屋がないのも不満です。ぜひ浣腸特集を企画してください。

（神奈川・夏川絹子）

▼ドレイになりたい

だいたい私はホモで、対男性MSですが、御誌が貴重なページをさいて、対男性または対女性マゾを取りあげてくださるの、いつも店頭より買って読んでおります。

蛇の道はヘビ、しかも狭い世界です。私のこと、あるいはご承知かも知じませんが、私は、Mとしてもかなり徹底した

ほうで、系類も少ないので、だれかSの人が飼育してくれないかなと夢みたいないことを考えております。

完全な個室でオリに入れられたりドレイとして犬として飼育されてみたい欲望大です。

肉体こそ貧弱ですが、責めには、かなり強いほうです。

縛り、吊り、ムチ、犬、ロー責め、針責めなど、O・Kです。

肉体の貧弱さをカモフラージュするため、全身に入れ墨模様を描かれたり、赤か緑に塗られたりして、急所、血管をさけて、針をさされたり……またさかさ吊り、四つ足、大の字に吊られたり、第三者を入れてもかまいません。

また、売りものにはなりませんが、カメラでとられたり……だれか、こんなことをしてくださる酔興な人はいないでしょうか？

現代科学のスパラシキ驚異!!

★写真の中にすましている全裸の美女が突然あなたの眼前に現れる!!
★息づく乳房を疑うこの不思議!!
★手を乳くく腰を疑うこの不思議!!
★殺すお目玉を疑うこの不思議!!
★別荘で新作の完成!!
★お断り!!
★本誌は単なる目のごまかしや錯覚によるものではなく科学に立脚する画期的製品で現実の世界を手にとるようになり現実に立脚する画期的製品で現実の世界を手にとるようになり写真の中にカンツメに言えは生きたヌード美人をそのままだ品交換ご自由!!

飛び出す!!ヌード集

定価6組入五百円 15組入千円 40組入二千元
★各種共携帯用特許眼鏡一台付 ★厳密封送送料各種共30円
★見本写真 及び説明書送料共50円 ☆個人名にて誰れにも分からねように厳密封送!!

浦和市元町一の二二〇K 振替(東京)三九八九三番
日本ステレオ科学研究所

寒いのはだけはいやですから、暖房さえしていただければけっこうです。

まあ、こんなことはともかくとして、一度参上してお話だけでもと思っております。

いつでもよければご返事いりませんが、何日のいつごろお伺いしたらよろしいかと思っております。

まあ一応、私のなやみなり、何なり聞いていただいて、われらの世界で心のくつろぎをおぼえれば幸せです。(東京渋谷Y)

風俗奇譚

△在庫のお知らせ▽



△36年度▽四月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ赤い靴のドミナ……
 グラビアⅡ太鼓しぼり・木にく
 くられて・荒小屋を背に・石
 の階段は冷たい・古雅な中庭
 で・緊縛悶姿・早く叩いて・
 冷蔵庫の上に・シャツも破れ
 て・ひじ曲げの拘束・棒背負
 い・双丘の魅惑……
 特集・東西古今刑罰残酷物語……
 刑罰にひそむサディズム……
 世界残酷刑罰の生態……
 刑罰と拷問のいろいろ……
 江戸封建社会の刑罰……
 昔の刑罰は残酷だった……
 花井お梅の獄中日記……
 申城残酷記……
 マダレナ殉教秘史……
 尻打ちの世界・泰西名画集……
 責められる女の姿態……

晴雨流女のしぼり方・伊藤晴雨
 マゾヒストの手紙から ⑩……
 鼻の穴がピコピコうごく……
 ほも禁秘帳 ⑥……
 Hの中のSの形態……
 サロン・マソキスチカ……
 ホモの窓・女装愛好の部屋……
 私が禪マニアになったのは……
 私のいけにえになった処女……
 鞭打浣腸小説・鞭魔ロベール……
 絵物語・快楽用の少女たち……
 中国悪虐史・羅王と朋后……
 三月号 (一四〇円)
 多色口絵・雪の露台・村上ユキ
 グラビア・雪の女・雪にころが
 されて・妖艶切腹の図・制服
 椅子責め・裸身ながながと・
 なまめかしい受縛・ころがさ
 れた受縛・古風な雰囲気……
 テーブルの上の裸女・乳房を
 縛る・足を責める・呪縛の姿
 勢・さかさ女……
 モデル村上ユキ・西牧えり子
 風早由美子・さつきみち……
 特集・マゾヒストの世界……
 マゾ小説・でんすけ地獄……
 赤禪斬り込み隊……
 戦争残酷4つの物語……
 絵物語・毛皮を着たヴァイナス
 K氏自虐帳(告白小説)……
 黄金色のご馳走……
 サロン・マソキスチカ……
 マゾヒストの手紙から ⑨……
 妖異の世界……

乳房・尻・頭髮フェチシズム
 サディストの使用したムチ……
 職業サディストの女……
 長靴を捧げて礼拝する女たち
 変わり種二輪の名花……
 あたしの「女形」……
 女体責め絵集……
 グラインダー地獄・また裂き
 変型責め・車責め・納屋の首
 吊り・あやつり責め……
 江馬美久・田上恵子の傑作画集
 ほも禁秘帳⑤妖美なる野郎たち
 私の女装告白体験記……
 女装愛好の部屋(富貴クラブ)……
 私の女装半生記……
 コルセット・フェチシズム8景
 白亜楼血の紅白試合……
 サド小説・青美しき虐魔……
 サド小説・神よ、くたばれ……
 サド小説・大都会の夜の底で……
 二月号 (一四〇円)
 多色口絵・縛愁・囚花・制服は
 悲しからずや・乳房をかむ縄
 ハリツケ縛り・緊縛・拘束の
 写真と責面特集……
 妖美なる女体責め絵集……
 マゾヒストの手紙 ⑧……
 三人のソドミア……
 あたしの女装生活ありのまま……
 鞭の味を知らされた少年……
 美少年アルキピアデスのこと……
 妻をいじめる私の方法……
 鞭打悦虐小説傑作特選集……
 死を呼ぶ鞭打……

白い双丘(あるヒップ狂の物語)
 地獄の密航船……
 ドリー・モルトンの思い出……
 お尻をムチ打たれるジネット……
 「長靴屋」さんの女たち……
 女体標本(アブ小説)……
 一月号 (一四〇円)
 多色口絵・血を好む大公妃……
 責め絵集・空中緊縛ほか……
 色刷写真・ふたりプレイ、オン
 パレード、レザー・フェチシ
 ズムほか……
 グラビア・妖美吊り艶姿・ころ
 がし責め・ハリツケとさか立
 ち・閨怨のポーズほか……
 特集・ソドミアとレスボス……
 ビューティ・ビューティ……
 ウールニングについて……
 著名ソドムの人びと……
 有名レスビアンの群像……
 男色殺人事件を推理する……
 その愛術のすべて……
 マゾヒストの手紙から⑦……
 悦虐小説・花の木馬……
 浣腸の和解……
 責められる女の羞恥……
 女の肌をうかニ……
 アブ小説・悦虐クラブの女……
 △35年度▽十二月号(一四〇円)
 特集・伊藤晴雨責面写真自選集
 多色口絵・野ざらし……
 責め絵スケッチ集・火の靴を
 はかせて・駿河責め・しも
 と責め・引きずり責め・死

体責め・すり鉢責め……………
 晴雨女体緊縛写真集……………
 伊藤晴雨さんのプロフィール……………
 晴雨さんの雪責め……………
 グラビア・石垣の緊縛裸女・め
 しい鳥・石垣の前で・長じゆ
 ばんも乱れて・棒しばり・浴
 室の悶姿・廃墟のとらわれび
 と・花模様なかで・事務所
 の狼藉・松の木吊り・庭園の
 二つのポーズ・ほか……………
 魅惑の水を求める男……………
 告白小説・美しきムチの下で……………
 マゾヒストの手紙から⑥……………
 ほも禁秘帳②五角形の成人儀式
 木馬責めと滑車吊り……………
 異常願望を昇華させる刺激遊戯
 女レポの拷問……………
 白い蝶(水車緊縛の幻想)……………
 男性責めの郷土史立石さま縁起
 女装の手記・あたしの結婚生活
 アブ小説・顔のない足クラブ……………
 サド小説・耽美荘の恐怖……………
十一月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・水地獄…土井啓子
 女体責め絵・丸太小屋の惨・岩
 場ハリツケ・竹しばり責め・
 射撃のマト・ほか……………
 グラビア・艶麗無残・はなやか
 な足吊り・犬の首輪のブラジ
 ャー・吊るし責め他……………
 特集・戦争残虐の記録……………
 拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇)
 憲兵狩り(終戦残虐秘話)……………

伊予富士の地獄地帯……………
 102人の集団ハリツケ……………
 少年愛の人びと……………
 マゾヒストの手紙から⑤……………
 あたしの乗馬日記……………
 (告白)女の下着に憑かれて……………
 死美人館潜入記……………
 アブ小説・ひつぷ・えんど・は
 いひーる獅々村裕ほか……………
十月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・女体知恵の輪……………
 色刷写真・美しき因虜・あかり
 も淡くほか……………
 グラビア・白衣の佳人・長椅子
 と女・白衣も乱れて・ローソ
 クが肌を焼くほか……………
 特集・サディストの群れ……………
 残酷なるサディスト達……………
 あるサドやくざの告白……………
 秘画展・今やスリル第3世紀……………
 地下室の吊り責め……………
 マゾヒストの手紙から④……………
 生きながら焼かれる女……………
 サド小説・裏切りの決算……………
九月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・空中鞭打……………
 原色写真・敵頭の裸女・つるさ
 れた白魚……………
 グラビア・落花の景・裸女無残
 二人しばり・静かなる地獄・
 投げ出された女ほか……………
 特集・女装する男たち……………
 男が女装するということ……………
 女装マニア、その魅力の耽溺

女装する男たちの生態……………
 マゾヒストの手紙から③……………
 アブ小説・奇妙な再会……………
 浣腸のいけにえ……………
 若年における異常の生態編集部
 猟奇事件(おこの殺し)……………
 サド小説・暗黒街の処刑室……………
八月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・受縛二重奏……………
 口絵・荒れ小屋の残虐……………
 グラビア・スタンドの美女……………
 特集・レスビアンの生態……………
 東西レスビアンの愛の技法……………
 サディスト・マゾヒストの往復
 書簡……………
 あたしの告白プレイ(告白)……………
 男に加えられる責め……………
 妖怪変化のセックス……………
 少年の腎肉切り・野口男三郎……………
 美少年の家探訪記……………
七月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・落花図絵……………
 グラビア・恋慕受縛・狙上の白
 魚・肌もあらわに・ベツトは
 知っている・鏡の中の緊縛女
 体・灯籠しばりほか……………
 特集・食人症……………
 サディズムの極「食人症」……………
 食人国物語……………
 中国における食人奇譚……………
 人肉料理をたべた人々……………
 死を賭けた遊戯……………
 鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め……………
 ムチの下で陶酔する女……………

死体と添寝、愛撫する女……………
 女装マニアのピス鍵……………
 女忍者(戦国秘聞)……………
 女肌をばう毛虫……………
 変態残虐物語・姦殺譚ほか……………
六月号 (一四〇円)
 多色刷口絵・痛ましき祭壇……………
 グラビア・樹間のニンフ・密室
 の呪縛・足づり裸女・庭園の
 囚魚・憂愁の美女・障子の前
 の残虐・狂熱の閨・読者緊縛
 写真……………
 特集・フェチシズム(淫物症)……………
 フェチシズムの実態……………
 毛に関するフェチシズム……………
 排泄物に発情する……………
 女の下着に欲情する男……………
 黒い通り魔、腎切り事件史……………
 浣腸に魅入られた女……………
 変態王・燕山君……………
 八十七個の洗濯バサミ……………
 マゾヒストの手紙から……………
 刑罰はどのように変態的か……………
 マゾ妻・二代目「矢作ヨネ」……………
 十八の乙女を散らした変態性欲
 アブ小説・レスボスの日……………
夏の臨時増刊号(一八〇円)
法悦特集五月号(一四〇円)
悦虐特集四月号(売り切れ)
春の臨時増刊号(二〇〇円)
艶妖特集二月号(一四〇円)
創刊臨時特集号(売り切れ)
 ◎既刊号のご注文は、現金書留、振替為
 替が確実、便利でございます。

画報風俗奇譚

各号とも在庫が少
なくなつてまいり
ました。お申し込
みは、お早めに！



画報風俗奇譚・第11集

四月号 (一八〇円)

表紙Ⅱバイロス秘画……………
色刷写真Ⅱ林の中で・祠の前で・
崖の上で・稲叢の前で……………
ハモデルⅡ島崎ユカ・村上ユ
キ・牧アンナ……………
口絵Ⅱ無残！責められる女八態
ムチ責め・くすぐり責め・火
責め・水責め・おもり責め……………
(田上恵子・古正英生・小田利
美・江馬美久の傑作無残絵)
グラビアⅡ石どうろう縛り・静
かなる受縛・縛られた寝姿・
格子に縛られて・エビまがい

機械の側で・あられない姿態
無残妖艶絵巻・棒で責める・
黒い紐がからむ・倉庫の縛女
受縛うらおもて・悦虐の花・
恥ずかしポーズ・すのこの上
で・縄のデュエット・浣腸の
いけにえ・うしろ棒しぼり・
吊られてムチで・被虐の法悦
ムチの下で……………
ハモデル・島崎ユカ・舟木喜
代子・西条さくら・西牧えり
子・風早由美子・児玉幹也Ⅱ
女は何を考える？・G・ロッ
スマトウシエックほか……………
ヌートリクス画廊……………
女装紳士録……………
アゾンの会の男性征服……………
谷貫太
女性同性愛クラブ……………
ロープとムチのプレイ……………
諸国責めばなし……………
芦立鋭吉
もう一つの世界……………
女サディストシチュエラビッツ
侯爵夫人・女装コンテスト・
女のレスリング・処刑の部屋

サド女とマゾ女・ホモの恋人
フェティシストの園ほか……………
画報風俗奇譚・第10集
三月号 (一八〇円)

表紙Ⅱハレムのサルタン……………
色彩写真Ⅱ艶縛クワルテット……………
グラビアⅡコタツに乗せる・雪
中縛女・戸外は雪と氷・縛悦
のひと・乳房をいたぶる・黒
い下着・浣腸のとき・あたし
をどうするの・おむつの代用
哀艶無残責められる女七景……………
掟を破った女・蒸気責め・毛
虫責め・マキの山で・新案拘
束装置・オオカミの餌食……………
不思議な世界Ⅱソドム・勝利の
女神・新しきディオギネス・
乙女の尻を守る甲冑……………
馬に乗る裸女……………
ガウチヨの女……………
縄の幻想……………
男はあたしのしもべ……………
緊縛モデル万華鏡……………
伊藤晴雨責め写真集……………
尻打ち天国・男の尻打ちに興ず
る女・ボクサーと女トレーナ
、Ⅱ・スパンキング・あたしの
写真を見てちょうだい、ほか
絵物語・天道白蛇教異聞……………
絵物語・丁半に賭けた女……………

画報風俗奇譚・第9集

二月号 (一八〇円)

表紙Ⅱボタン止めの長靴の女……………
色彩口絵Ⅱ肌もあらわに・制服
無残・裸姿の緊縛……………
グラビアⅡなまめかしき縛女・
全裸のいけにえ・板敷きの責
め場・石と落ち葉と女・ぐる
ぐる巻きの裸女・浣腸される
女・全裸のポーズほか……………
女性刑罰史絵巻・海老責め無残
かきなわとりしめ・四寸なわ
れんじやく縄……………
女体責め悦虐面集……………
ガラスの幻想……………
田上恵子
水責め苦悶図……………
江馬美久
湯気赤熱責め……………
小田利美
アブチックな世界への招待……………
お仕置きはこれから・ほか
異常な性風俗展覧会……………
女装の男に恋・同性愛ほか
女を責める5態……………
田上恵子
絵物語・山小屋のいけにえ……………
絵物語・皮はぎ小屋……………
画報風俗奇譚・第8集
一月号 (一八〇円)
表紙Ⅱモルヒネ……………
ステファン
色彩写真Ⅱ女体羞姿・ほか……………
女体責め絵集Ⅱクサリ吊り・腹

を踏む・襲うへび・ドブを散
歩・物干し場の責めほか……
グラビア盛装無残・妖美のベ
ッド・古風な花・腹切り悶悦
鞭打10のア・ラ・カルト尻打
ち・調教・禁男の家の私刑……
ピグマリオン4態……
カプリス・イン・メキシコ……
自分を愛す……ヘーゲマン
街頭の痴漢……イギリスの風刺画
女の臀部フェチズム……
女をいじめる5景II女を縛る……
写真ストーリー・消される女……
縄とムチに魅入られた女……
絵物語・女の責め絵巻……
女装狂・愛される喜び……

△35年分▽

画報風俗奇譚・第7集

十二月号 (一八〇円)

表紙IIステンドグラス……
色刷りII海老責めの女ほか
グラビアII縄に埋もれた女・船
とおんな・皮ひも十字ほか
女体責め絵集七景II大の字吊り
のムチ・吊られる女針地獄ま
といつくベルトほか
伊藤晴雨傑作責め絵責め写真集
人弓・しほり責めほか……
女体責め写真集……

画報風俗奇譚 4月臨時増刊号



好評発売中 二八〇円

大判の魅力をフルに生か
した迫真の緊縛フォトと東
西古今秘画の豪華集大成！
異色の性風俗を探究し、
その趣味を満喫させる斯界
最高の専門誌。サディズム、
マゾヒズム、フェティシズ
ムなど、あらゆるアブの部
門に異常なメスを加う！

絵物語・男をいじめる女たち……
絵物語・ビートゲーム……
絵物語・電流責めの私刑……
絵物語・責められる女忍者……
女をしいたげる7景……
新着封切・緊縛と拘束絵画集II
ハレムのドレイ・拷問の機械
刑罰の使役・ドレイの反逆・
クサリにつないだ女人犬・幽
囚の島・矯正の家ほか……

画報風俗奇譚・第6集

十一月号 (一八〇円)

多色口絵II石橋の上にはか……
第1グラビアII壁上の呪縛・タ
イルは冷たい・浴室の責め・
ハダカの女人犬ほか……
第2グラビアIIはなやかな縛虐・
法悦の時は流れて・石と草の
中でほか……

第3グラビアII華麗なるハリツ

ケ・受縛の表裏・碁盤の上に
片手つり・残虐を運ぶ自動車
輝姿二人プレイほか……
責め絵集II吊ってくすぐる・ア
リ責め・丸太流し・愛憎の果
て・柱しほり・ムチのあと・
肌を巻くベルトほか……
画集・ソドムの額縁7景……
写真物語・恐怖のドライブ……
アブチックな写真集II皮とのひ
ととき・身体矯正器・嵌口具
の諸形式ほか……
演劇・緊縛ア・ラ・カルト・片
っぱしからムチで打つんだ・
さかさ吊り3態・緊縛裸女群
像・艶麗しほり模様ほか……
絵物語・サリィの体験……
絵物語・マミーの正体……
絵物語・悦虐の天国……

ジョン・ウィリー画集IIコルセ
ットをしめる・女主人・クラ
ッカーほか……

画報風俗奇譚・第5集

十月号 (一八〇円)

多色写真とグラビアフォト多数
凄艶女体責め写真画集……
奇妙な絵画展覧会……
写真物語・奇妙な媚薬……ほか

画報風俗奇譚・第4集

九月号 (一八〇円)

色刷り写真と緊縛女体写真集……
無残凄惨な女責め画帳……
絵物語・悪徳の栄え……サド
裸女緊縛30態……ほか

画報風俗奇譚・秘蔵版

(二〇〇円)

多色刷り写真と多色刷り口絵……
責め絵画集と緊縛写真集……
永遠の美と若さの泉……マゾッホ
男をしいたげる女たち……ほか

画報風俗奇譚・第2集

(一八〇円)

多色口絵写真と口絵写真集……
グラビア鮮烈緊縛写真集……
マゾヒスチック絵画館……
絵物語・ギロチン台の美女ほか

代理部のご案内

小社好評の緊縛分譲写真が揃っております。毎号新しい作品も発表しておりますのでご利用ください。モデル別のセットは、とくに粒よりのコレクション用としての格調ある緊縛フォトです。

好評モデルの

緊縛ア・ラ・カルト



本誌独占!

男性緊縛の魅惑



▼村上ユキ特選フォト

各三枚一組 三〇〇円

大好評のプリマドンナ、村上ユキの緊縛フォト、非情な責め苦にのたうつ哀艶の抒情譜
 ☆全裸うしろ手縛り(略M1)
 ☆お灸灼熱地獄(略M2)
 ☆本格縛り責め三態(略M3)
 ☆豊麗切腹(略M5)
 ☆閨房股間縛り(略M6)
 ☆凄絶雪責め(略M7)
 ▼西牧えり子悦虐縛り
 各三枚一組 三〇〇円
 可憐な乙女えり子の受難、特に全裸にむかれた痛々しさ!
 ☆中国服悦虐フォト(略N1)
 ☆いたぶられる姑娘(略N2)

各三枚一組 三〇〇円

☆禪姿二人プレイ(略B18)

サド・マゾ二人のコンビが、禪しめて演ずる逞しき嗜虐

☆禪男一人プレイ(略B19)

白い禪の目にもあざやかなその男性美をいさよる自虐

☆裸姿二人プレイ(略B20)

大名屋敷のけんらん豪華な居間にくりひろげる恍惚境

☆全裸男性美決定版(略B21)

筋骨たくましくモデル別府昭彦の逞しき全裸の躍動美

☆女囚緊縛ポーズ(略A6)

三枚一組 三〇〇円

江戸時代の刑罰資料をもとに女囚縛りを再現した哀欲の譜

☆野外縛り(略A7)

三枚一組 三〇〇円

森閑とした雑木林の中にくりひろげられた羞恥の緊縛女性

☆凄絶切腹六態(略A8)

六枚一組 八〇〇円

豊満な腹部への嗜虐、噴出する鮮血、女体悶絶の凄惨集!

☆全裸緊縛ポーズ(略A9)

三枚一組 三〇〇円

はじめて公開した全裸凄絶の女の妖しき悦虐姿態の決定版

☆臀部責め(略A10)

三枚一組 三〇〇円

豊満な臀部への加虐のムチがとび、悶える肉に針が突刺す

☆水責め・湯責め(略A11)

三枚一組 三〇〇円

全裸女性をあくことなくバスルームに、古池に漬け責める

☆本格鞭打プレイ(略A12)

三枚一組 三〇〇円

人間本能の嗜虐の極致!本誌のみがなし得た恐怖の迫真感

☆豊満なる緊縛女体(略C6)

三枚一組 三〇〇円

超グラマーのはちきれんばかりの肉体に食い込む縄の陶醉

☆海老責め地獄(略C7)

三枚一組 三〇〇円

死一步寸前のエビ責めに絶叫する決定的瞬間の緊縛ポーズ

☆眼帯の女(略C8)

三枚一組 三〇〇円

不完全の美、片目をふさがれた女の魅惑、眼帯のもつ妖美

☆さるぐつわ艶姿(略C9)

三枚一組 三〇〇円

無残にも呼吸をせきとめられた責め苦の中の妖艶の美女!

☆制服の乙女縛り(略C10)

三枚一組 三〇〇円

むしりとられたセーラー服の乙女が悶える緊縛の青春譜!

☆乙女の祈り (略N3)
 ☆全裸いたぶり (略N5)
 ☆鼻責め嗜虐 (略N6)
 ☆哀花受難 (略N7)
 ☆西条さくら豊艶緊縛

各三枚一組 三〇〇円
 はちきれんばかりの狂宴地獄
 ☆乳房地獄責め (略S1)
 ☆腹部への嗜虐 (略S2)
 ☆悶姿の祭壇 (略S3)
 ☆風早由美子妖美緊縛

各三枚一組 三〇〇円
 大型グラママーの本格責め苦!
 ☆樹間のニフ (略H1)
 ☆嘆きのセーラー服 (略H2)
 ☆死のベルトの誘い (略H3)
 ☆舟木喜代子BG緊縛

各三枚一組 三〇〇円
 可憐なBGスタイルのプレイ
 ☆大の字縛り (略F5)
 ☆ハダカ男馬のり (略F6)
 ☆高月まゆみ野外緊縛

各三枚一組 三〇〇円
 荒涼たる砂浜に転がる姿態!
 ☆砂浜荒縄しぼり (略T5)
 ☆廃家(あばらや)の恋縄 (略T6)
 ☆妍を競う三人艶縛集

各三枚一組 三〇〇円
 おなじみのモデル二人がけん
 らんたる艶縛の姿態を競う!
 ☆肌くらべ全裸縛り (略Q1)
 ☆花ひらく受縛天国 (略Q2)

☆禪姿一人緊縛 (略B22)
 江戸っ子の気風そのままに
 キリリとした六尺禪美!

☆青竹十文字背負い (略B23)
 呪われた宿命の掟に背負っ
 た青竹十文字の奇怪な緊縛
 ☆禪股間ポーズ3態 (略B24)
 股間のもつ男性の曲線! 逞
 しくおおらかな嗜虐の極致

☆変形縛り責め (略B25)
 絶息寸前までに責め抜く変
 型縛り、号泣する男の悲哀

〈新人モデル新作発表〉

各三枚一組 三〇〇円
 ☆純白の禪姿 (略B26)

浅黒い肌に映える純白のさら
 しが目にしみる。六尺姿の魅
 力がただよい出て妖しく光る
 美しさがぬれていっぱいだ。

☆しいたげられる禪男

(略B27)
 禪一本の姿で、いろいろにし
 いたげられるとき、強烈な嗜
 虐の花がきそい、やがて艶や
 かなムードが湧いてくる!

☆裸女棒しぼり (略C11)
 三枚一組 三〇〇円
 荒れけずりの棒が縄の痛さを増
 し、白肌に鮮血がにじむ!

☆密室の呪縛 (略D6)
 三枚一組 三〇〇円
 呪われた女の宿命、のたうつ裸
 女にせまる悪魔の鋭い牙!

☆全裸変形地獄図 (略D7)
 三枚一組 三〇〇円
 うごめく女体を密室で責め抜く
 サド・マニアの無残絵巻!

☆無残二人しぼり (略D8)
 三枚一組 三〇〇円
 背中合わせの美女ふたり、縛ら
 れ投げ出された陶酔の極致

☆浣腸悦虐フォト (略D10)
 三枚一組 三〇〇円
 もだえにもだえる浣腸の嗜虐は
 マニア待望の決定版!

☆血みどりのリンチ (略X8)
 五枚一組 五〇〇円
 しばられ、吊り下げられ、あげ
 くの果てに鋭利な白刃の譜

☆悦虐の表情 (略X9)
 三枚一組 三〇〇円
 悦虐の極致をそのまま表情にと
 らえた無上の陶酔の美しさ

☆本格吊るし責め (略X10)
 三枚一組 三〇〇円
 妖美艶麗、まさに晴雨翁えがく
 本格的吊り責め絵をしのぐ

〈サディスチン・フォト〉



各三枚一組 三〇〇円
 ☆女王さまとしもべ (略W1)
 女王さまのお気持ちのままに奉
 仕するのが下僕の役目。そこに
 下僕の生き甲斐もあり、しびれ
 るよろこびもあるのだ

☆ドミナのムチ (略W2)
 ピシリッ。ドミナのムチが、男
 の肌に容赦なく打ち下ろされ
 る。ムチの魅惑は甘く、陶酔を
 さそう。悦虐姿態の圧巻!

読者原稿募集

本誌を愛し、育てあげてやろうというかたがたのご投稿をお待ちしております。純然たる創作、体験に基づく告白、編集上のアイデアなど。なんでも奮ってお送りください。ただし、ゼツタイ自作に限ること。

▼創

作 (四百字詰め25枚以内)

S・M・H・Fなどアブチックな世界にテーマを求め、主題を真剣に追求する小説。

▼告白体験手記 (四百字詰め20枚以内)

自分自身の体験または実際の見聞。もちろん、サド、マゾ、ホモ、フェチ、浣腸などに関するもの。

▼アブ・ニュース (四百字詰め3枚以内)

「ホモの窓」「女装愛好の部屋」「サロン・マソキスチカ」に収載する。町に落ちていくニュース。それ以外にも、サド関係、浣腸に関するものなど。

▼口絵・カット (枚数制限なし)

かならず墨描きのこと。筆でもペンでもかまいません。ただし、折れないように送ってください。

▼編集上の企画・アイデア

表紙をはじめあらゆる面に対する企画・アイデア。詳細なもの、ヒントだけのもの、いずれも可。

△採用の分には、応分の謝礼をお送りします▽

“風俗奇譚”はじめての臨時増刊号が四月五日に全国発売となります。

編集室より

★本号では「鞭打」特集をおおくりした。鞭打は、サディズムにもマゾヒズムにも、もっとも素朴なかたちで結びついていくからである。しかも、幼い日、母親に打たれた思い出、学校生活の教師や上級生の打撃、そして恋愛中のたわむれの打ち合い、夫婦げんかのなぐりっこ……このように鞭打は、どんな人間の生活にも、なんらかの影を落としているものである。

★本号から、アメリカの斯界の最高峰ヌートリクス社と特約を結んで、同社の作品を連載することとした。新しい息吹きを吹き込むものとご満足いただければ。

★青山三枝吉、芦立鋭吉両氏の連載小説を、本号から連載することとなった。それぞれ持ち味を発揮した力作としたいと張りきっている。ご愛読願いたい。

★来月上旬、臨時増刊を世におくるため、鋭意編集集中である。大判にし、まったく新しい試みと企画を盛り込んだつもりである。ご期待を乞う次第である。

▼月ぎめご購読の方法▲

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊) 一五〇円

三カ月 (三冊) 四五〇円

六カ月 (六冊) 九〇〇円

一カ年 (十二冊) 一八〇〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊) 一八〇円

三カ月 (三冊) 五四〇円

六カ月 (六冊) 一〇八〇円

一カ年 (十二冊) 二一六〇円

★本社に直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確実で、ご便利です。ただし、振替は日時がかかりますゆえ、あらかじめご了承ください。

風俗奇譚 五月号

定価一五〇円

昭和三十六年四月二十日印刷
昭和三十六年五月一日発行

編集人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一
発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京 (291) 二四三〇番